

筑後北部地区遺跡群 II

福岡県筑後市大字熊野・蔵数所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第70集

2006

筑後市教育委員会

ちくごほくぶちくいせきぐん
筑後北部地区遺跡群 II

筑後市熊野・蔵敷所在遺跡の埋蔵文化財調査

くまのはせまち
熊野杵町遺跡

くらかずしまのもと
蔵敷島ノ本遺跡

くらかすほこて
蔵敷保古手遺跡

くらかずさぶろうまる
蔵敷三郎丸遺跡

くらかすながせまち
蔵敷長畝町遺跡

2006

筑後市教育委員会

序

筑紫平野を彩る当市一帯では現在までに数多くの歴史的産物が生み出され、福岡県南部を代表する歴史的・文化的地域として発展しております。

今回報告する筑後北部地区遺跡群は平成16年度から継続して行われております「県営ほ場整備事業筑後北部地区」に伴う緊急の埋蔵文化財発掘調査の記録です。この大規模な農地の整備により、土の中に眠っていた先人たちの足跡が消滅する危機を回避するため、更には地域の歴史・文化財を記録に残し、後世に伝え残すために発掘調査を行いました。

調査された遺跡からは様々な時代の暮らしが復元され、当市一帯の歴史像を解明する資料が蓄積される事となりました。

本書を消滅する遺跡の名残りとして捉えるのではなく、未来を想像できる一つの学術的資料、若しくは地域を考えるための生涯学習の一資料として活用していかなければなりません。

調査に際しましては、各工事関係者、各関係機関には多大なるご協力とご支援をいただきましたことに心から感謝申し上げます。

平成18年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例言

1.本書は平成17年度に行った原形は馬場編事業（旧い手育成型）筑後北部地区事業の実施に伴った歴史文化財発掘調査報告書である。

2.発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収録、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第1章に記している。

3.本書に使用した図面の遺構図は小林勇作、上村英士、阿比留士朗が作成し、遺物の実測、浄書は柳井理絵、佐々木寿代、仲文恵、丸山裕見子が行った。遺跡の全体図に關しての航空測量はアジア航測株式会社へ委託した。

4.本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は別記する各調査現場担当者が行った。

5.今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第11種座標系(日本測地系2000)を基準としている。

6.本書に使用した遺構の表示は以下の略号による(筑後市に「まほろば」文化財の取り扱いはついて2002に準拠している)。

SD-溝 SK-土塼 SP-ピット SX-不明遺構・流路・河川・溜まり状遺構

また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。

7.本書の執筆はⅢ.調査成果を各調査担当者が行い(目次に記している)、Ⅰ.II.IVと編集は上村が行った。

目次

Ⅰ.調査経過と組織	1
Ⅱ.位置と環境	2
Ⅲ.調査成果	5
Ⅲ.1.調査成果	5
Ⅲ.2.調査成果(小林勇作)	5
Ⅲ.3.調査成果(阿比留士朗)	17
Ⅲ.4.調査成果(上村英士)	23
Ⅲ.5.調査成果(小林勇作)	39
Ⅲ.6.調査成果(阿比留士朗)	51
Ⅲ.7.調査成果(小林勇作)	61
Ⅲ.8.調査成果(阿比留士朗)	64
Ⅲ.9.調査成果(阿比留士朗)	68
Ⅳ.考察	75

1. 調査経過と組織

英後北部地区道徳課は英後市大・宇・熊野・歳敷に所在する。この地域は平成15年度より単営は通常課事業による大規模な農地の改良工事を行っている。

平成16年10月4日に委員会である福岡県英後川水系農地開発事務所より当該地について試掘・確認調査依頼が茨城より教育委員会に提出され、担当課である社会教育課文化スポーツ係による現地での試掘調査を平成16年10月25日から11月9日まで実施した。試掘調査の結果、計画地における各水路新設予定地の8ヶ所については遺構が破壊を受けるため本調査を実施しなければならぬ旨を伝え、平成17年4月13日に「県営は場整備事業担い手育成型英後北部地区に係る埋蔵文化財調査」として協定を締結し、埋蔵文化財発掘調査を行う事となった。調査費用については費用総額に対して80%を福岡県英後川水系農地開発事務所が負担し、20%を国・県・市・地元で負担している。平成17年4月18日から平成17年10月31日まで現地での本調査を行い、整理報告書作成作業を平成18年3月20日に完了した。

1) 平成16年度 (事前調査等)

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	塩原 修
	社会教育課長	田中 博一
	文化スポーツ係長	成淵 平和
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作 (事前調査)
		上村 英士
		阿比留土朗
		立石 真二

1) 平成17年度 (調査、報告書作成)

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	塩原 修
	社会教育課長	田中 博一
	文化スポーツ係長	角 惠平
	文化スポーツ係	水見 秀徳
	(文化財担当職員)	小林 勇作 (調査担当)
		上村 英士 (調査担当)
		阿比留土朗 (調査担当)

3) 発掘調査参加者

石橋香代美	井上むつ子	今山美成子	船田勝子	内野博隆	江崎末敏	江崎トシ子	加藤礼子
河添幸子	吉賀明美	下川義文	埴崎マユミ	角里子	田島好江	田島マユ子	辻名草
辻勲	宮安英子	中村富男	中村三男	馬場千鶴子	馬場浩	原清隆	松尾原代美
深川香代子	渡辺春子	豊川一枝	三浦美樹子	藤田雅代	近藤一昭	青藤和代	

4) 整理作業参加者

整理補助員	仲 文恵	横井 理絵	佐々木 寿代
整理作業員	野口 聡彦	三上 裕見子	

調査及び整理作業に際しては次の方々にご指導、ご指示を賜った。記して心より感謝申し上げます。

(順不同、敬称略)

本報課 (長崎外国語短期大学)、山村信彦 (大宰府市教育委員会)、小畑野茂 (筑紫野市教育委員会)、立石真二 (蒲崎町教育委員会)

II. 位置と環境

・地理的環境

真夜市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花菜川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳輪山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の運道が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内多数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

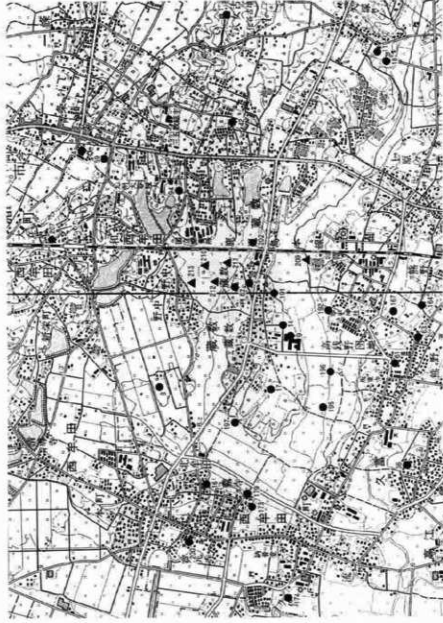


Fig.1 周辺道路分布図 (1/5000)

- 1.石人山古墳
- 4.壇王寺古墳
- 5.成豊車原古墳群第1次
- 8.田侍古墳
- 9.成豊車ノ水遺跡第1次
- 11.矢部古墳
- 14.成豊車ノ水遺跡第2次
- 16.西牟田監寺遺跡
- 17.成豊出口遺跡
- 18.前田塚山遺跡
- 36.久原古墳遺跡
- 42.成豊赤坂遺跡
- 53.西牟田前原遺跡
- 61.熊野塚遺跡

- 62.成豊車ノ水遺跡新築2次
- 63.熊野塚古墳群第2次
- 94.成豊長原山遺跡
- 164.熊野塚遺跡
- 167.熊野山ノ原遺跡
- 173.西牟田小水原丸遺跡
- 174.西牟田上京手遺跡
- 176.西牟田監寺未遺跡
- 191.熊野水町遺跡
- 192.熊野松ノ下遺跡
- 195.熊野五反田遺跡
- 196.熊野宮ノ後遺跡
- 197.成豊長崎山遺跡
- 200.西牟田成豊寺遺跡

- 202.成豊赤古手遺跡第1次
- 207.西牟田成豊遺跡
- 209.熊野水町遺跡
- 210.成豊車ノ水遺跡
- 211.成豊赤古手遺跡第2次
- 212.成豊三郎丸遺跡
- 213.成豊長崎町遺跡

※番号は当市の発掘調査番号

・畿数地区の歴史的背景

畿数地区には旧石器時代から現代まで様々な文化財が埋蔵されており、歴史的背景について時代を追って解説する。

畿数市坂口では後期旧石器時代とみられる角洲式石器が出土している。伊予市由賀原産の黒曜石を使用した焼石の剥片を素材とする新面三角形の未加工品である。市内ではこの石器の他に大字鶴田地区で4点の旧石器遺物が出土しているが、明確な旧石器時代包含層からの出土ではない¹⁾。しかしながら、遺物の存在は市内の旧石器時代を物語る資料として貴重である。

縄文時代になると熊野・畿数地区の遺跡からは遺構・遺物の報告例が殆どない。市南部の大字常田地区や大字忠地区などでは早期の集居遺構や遺物を纏まって出土する跡が²⁾見られるが、畿数地区では畿数森ノ木遺跡で落として穴状遺構が3基検出されているに³⁾過ぎ、終々弥生時代以降の集落が⁴⁾形成される様相とは対照的である。

弥生時代になると、熊野・畿数地区一帯の八女丘陵部には大集落が形成される。現在までに明確な周囲の遺構は確認されていないが、中期以降になると倉目川北側の丘陵部に提示する畿数森ノ木遺跡で多くの聚穴住居・竊穴柱建物が形成され、これらの住居群は古墳時代まで連続と生活痕跡を残している様子が⁵⁾確認されている。遺物も豊富であり、数多くの土器・石器類を出土している筑後地方を代表する遺跡である。また、畿数東野屋敷遺跡では中期の竊穴集、上層部が片8基検出されている。当該期の集落の変遷や集落との関わりを窺う資料である。

古墳時代にかけては畿数地区一帯（倉目川北側丘陵上）では集落が⁶⁾営まれる。先述した畿数森ノ木遺跡からは子持知玉を出土しており、大集落の発展過程が⁷⁾看取できる。当地区から、北西約1kmに田師遺跡もあり、弥生時代から古墳時代にかけての集落が⁸⁾検出されている。

熊野・畿数地区と大字西牟田地区の字境である大字西牟田字松尾に5世紀中頃と考えられる熊王寺古墳が⁹⁾造営さ¹⁰⁾。畿数丘陵上に延々と築かれる八女古墳群の中で東の石人山古墳と西の久留米市三津町十津寺古墳の間は¹¹⁾距離としており、現在は消滅して¹²⁾面影も¹³⁾ない。聚穴系開口式石室をもつ直径約26mの円墳である。主な遺物は瓦文鏡、埴・甌などの鉄製器具、形象埴輪、須恵器、有孔埴瓦、目玉などがある。

当市では古代西国街道が南北に縦断することが¹⁴⁾解っており、大字南津ノノ井・鶴田地区などでは遺跡遺構が¹⁵⁾検出されている。畿数地区では国道209号とはほぼ同じラインで¹⁶⁾推定されているが、現在までに道路遺構は¹⁷⁾検出されており、奈良時代から平安時代にかけての集落についても¹⁸⁾検出されていない¹⁹⁾。西国街道を²⁰⁾経るとは、畿数地区は三津部と下妻郡の²¹⁾界地に²²⁾近い下妻郡に²³⁾存在する。

中世になると畿数地区は上妻郡広川荘として²⁴⁾東条寺権野神社による支配となる。鎌倉初期の広川荘名別圖²⁵⁾では143町と広川荘庄大の²⁶⁾面積を²⁷⁾誇っていたようである。また、永和4年(1378年)に²⁸⁾蒲原光顯が²⁹⁾京都の大地寺塔頭瑞雲庵の³⁰⁾東林西堂相向に³¹⁾広川兼言員名田地³²⁾町・³³⁾畠地³⁴⁾丘陵・³⁵⁾屋敷³⁶⁾茶園³⁷⁾百³⁸⁾一人を³⁹⁾末代⁴⁰⁾寄⁴¹⁾して⁴²⁾おり、⁴³⁾兼中⁴⁴⁾納言⁴⁵⁾(⁴⁶⁾征⁴⁷⁾左⁴⁸⁾官⁴⁹⁾した⁵⁰⁾人物が⁵¹⁾畿数地区に⁵²⁾田⁵³⁾茶⁵⁴⁾園⁵⁵⁾を⁵⁶⁾有⁵⁷⁾して⁵⁸⁾いたと⁵⁹⁾されて⁶⁰⁾いる。⁶¹⁾発⁶²⁾掘⁶³⁾調査⁶⁴⁾では⁶⁵⁾坂東寺⁶⁶⁾北⁶⁷⁾側の⁶⁸⁾熊野宮⁶⁹⁾後⁷⁰⁾遺⁷¹⁾跡、⁷²⁾熊野⁷³⁾五⁷⁴⁾反⁷⁵⁾田⁷⁶⁾遺⁷⁷⁾跡⁷⁸⁾から⁷⁹⁾当該⁸⁰⁾期⁸¹⁾の⁸²⁾貿易⁸³⁾陶⁸⁴⁾磁⁸⁵⁾器⁸⁶⁾や⁸⁷⁾生⁸⁸⁾活⁸⁹⁾器⁹⁰⁾類⁹¹⁾を中心⁹²⁾に⁹³⁾多⁹⁴⁾数⁹⁵⁾出⁹⁶⁾土⁹⁷⁾して⁹⁸⁾おり、⁹⁹⁾坂東寺¹⁰⁰⁾権野¹⁰¹⁾神社¹⁰²⁾の¹⁰³⁾祭¹⁰⁴⁾司¹⁰⁵⁾を¹⁰⁶⁾世¹⁰⁷⁾ぶ¹⁰⁸⁾遺¹⁰⁹⁾跡¹¹⁰⁾である。室¹¹¹⁾明¹¹²⁾時代¹¹³⁾には¹¹⁴⁾広川¹¹⁵⁾荘と¹¹⁶⁾水田¹¹⁷⁾荘との¹¹⁸⁾境¹¹⁹⁾界¹²⁰⁾有¹²¹⁾い¹²²⁾な¹²³⁾ど¹²⁴⁾を¹²⁵⁾起¹²⁶⁾し、¹²⁷⁾戦¹²⁸⁾国¹²⁹⁾期¹³⁰⁾で¹³¹⁾の¹³²⁾莊¹³³⁾の¹³⁴⁾開¹³⁵⁾墾¹³⁶⁾へ¹³⁷⁾と¹³⁸⁾な¹³⁹⁾り¹⁴⁰⁾、¹⁴¹⁾先¹⁴²⁾に¹⁴³⁾述べ¹⁴⁴⁾た¹⁴⁵⁾坂東寺¹⁴⁶⁾の¹⁴⁷⁾再¹⁴⁸⁾興¹⁴⁹⁾や¹⁵⁰⁾土¹⁵¹⁾木¹⁵²⁾工¹⁵³⁾事¹⁵⁴⁾を¹⁵⁵⁾行¹⁵⁶⁾い、¹⁵⁷⁾農¹⁵⁸⁾作¹⁵⁹⁾地¹⁶⁰⁾開¹⁶¹⁾墾¹⁶²⁾に¹⁶³⁾力¹⁶⁴⁾を¹⁶⁵⁾込¹⁶⁶⁾め¹⁶⁷⁾た¹⁶⁸⁾と¹⁶⁹⁾され¹⁷⁰⁾る。田¹⁷¹⁾中¹⁷²⁾東¹⁷³⁾新¹⁷⁴⁾地¹⁷⁵⁾段、¹⁷⁶⁾当¹⁷⁷⁾市¹⁷⁸⁾は¹⁷⁹⁾久¹⁸⁰⁾留¹⁸¹⁾米¹⁸²⁾景¹⁸³⁾域¹⁸⁴⁾として¹⁸⁵⁾行¹⁸⁶⁾馬¹⁸⁷⁾氏¹⁸⁸⁾による¹⁸⁹⁾集¹⁹⁰⁾落¹⁹¹⁾と¹⁹²⁾な¹⁹³⁾る。行¹⁹⁴⁾馬¹⁹⁵⁾氏¹⁹⁶⁾により¹⁹⁷⁾赤¹⁹⁸⁾坂¹⁹⁹⁾院²⁰⁰⁾や²⁰¹⁾坂²⁰²⁾東²⁰³⁾寺²⁰⁴⁾院²⁰⁵⁾が²⁰⁶⁾起²⁰⁷⁾こ²⁰⁸⁾つ²⁰⁹⁾た。また、²¹⁰⁾当²¹¹⁾地²¹²⁾区²¹³⁾では²¹⁴⁾鎌²¹⁵⁾倉²¹⁶⁾用²¹⁷⁾部²¹⁸⁾池²¹⁹⁾の²²⁰⁾遺²²¹⁾成²²²⁾が²²³⁾盛²²⁴⁾ん²²⁵⁾に行²²⁶⁾われ、²²⁷⁾田²²⁸⁾圃²²⁹⁾開²³⁰⁾墾²³¹⁾に²³²⁾應²³³⁾じて²³⁴⁾も²³⁵⁾17²³⁶⁾世²³⁷⁾紀²³⁸⁾に²³⁹⁾整²⁴⁰⁾頓²⁴¹⁾さ²⁴²⁾れて²⁴³⁾いたと²⁴⁴⁾考²⁴⁵⁾え²⁴⁶⁾ら²⁴⁷⁾れ²⁴⁸⁾て²⁴⁹⁾い²⁵⁰⁾る。近²⁵¹⁾世²⁵²⁾の²⁵³⁾当²⁵⁴⁾市²⁵⁵⁾での²⁵⁶⁾発²⁵⁷⁾掘²⁵⁸⁾調²⁵⁹⁾査²⁶⁰⁾事²⁶¹⁾例²⁶²⁾は²⁶³⁾多²⁶⁴⁾く、²⁶⁵⁾その²⁶⁶⁾中²⁶⁷⁾でも²⁶⁸⁾水²⁶⁹⁾利²⁷⁰⁾開²⁷¹⁾墾²⁷²⁾(²⁷³⁾溝²⁷⁴⁾や²⁷⁵⁾水²⁷⁶⁾溜²⁷⁷⁾など²⁷⁸⁾)の²⁷⁹⁾遺²⁸⁰⁾構²⁸¹⁾検²⁸²⁾出²⁸³⁾が²⁸⁴⁾多²⁸⁵⁾く、²⁸⁶⁾現在²⁸⁷⁾の²⁸⁸⁾畿²⁸⁹⁾数²⁹⁰⁾地²⁹¹⁾区²⁹²⁾の²⁹³⁾姿²⁹⁴⁾は²⁹⁵⁾この²⁹⁶⁾時²⁹⁷⁾期²⁹⁸⁾の²⁹⁹⁾地³⁰⁰⁾圃³⁰¹⁾開³⁰²⁾墾³⁰³⁾や³⁰⁴⁾集³⁰⁵⁾落³⁰⁶⁾形³⁰⁷⁾成³⁰⁸⁾による³⁰⁹⁾名³¹⁰⁾残³¹¹⁾が³¹²⁾数³¹³⁾多³¹⁴⁾く³¹⁵⁾残³¹⁶⁾る³¹⁷⁾地³¹⁸⁾域³¹⁹⁾である。

【参考文献】

1) 筑後市史 筑後市史編纂委員会・編 1985

2) 畿数遺跡群 筑後市史編纂委員会・編 1989

3) 筑後市文化財調査報告書第1集 2005

4) 筑後市史編纂委員会・編 1984

5) 畿数遺跡群 筑後市史編纂委員会・編 1989

6) 筑後市文化財調査報告書第5集 1988

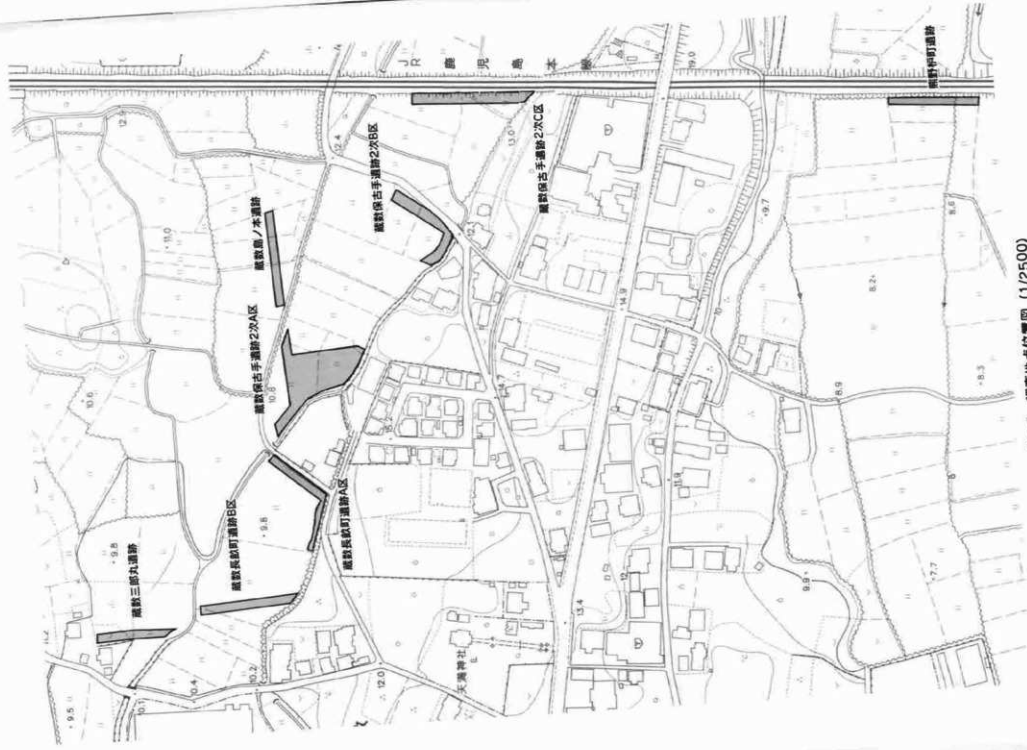


Fig.2 調査地点位置図 (1/2500)

1. 熊野町町遺跡第1次調査

(1) はじめに

当遺跡は八女丘陵南麓にあたる標高8～9m位の低地成地した筑後市大字熊野字中町3930-1、408-1に所在する。筑後北部地区防空壕整備事業（旧・手竹成型）筑後北部地区の平成17年度工事に係る地盤調査で、新設される水路によって破壊を受ける約308㎡を調査対象範囲として発掘調査を実施した。調査区は旧区遊覧島本線（西側）に沿って南北に細長く、途中、東西方向に走る水路によって南北に区別される。このため、便宜上南部をA区、北部をB区と称した。

発掘調査は小林勇作が担当し、平成17年4月18日から同年6月11日の約2ヶ月間実施した。この期、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を現場で行い、築削作業から権借書作成に至るまでの作業は文化財管理室で随時行った。なお、直機による表土剥ぎは（行）福島重博へ、航空測量業務はゾリア航測（株）へ委託した。調査の結果、調査の遺構が確認され、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

A区

1SD04 (Fig.3)

A区の北部で検出した南北方向の溝である。北部は現代の東西水路によって破壊されており、南方へ2.45m分を掘出したところで終息する。幅0.60～0.90m、深さ0.13mを測り、埋土は黒褐色砂質土を基調とする。堆積土がうは土師器（片）を散かに認められた。B区南端で検出された1SD07に接続する可能性が考えられる。

土坑

1SK05 (Fig.3)

A区北部1SD04の西側で検出した。平面プランは楕円形状を呈し、遺構西側は現代の擾乱を受ける。長軸1.03m、短軸0.83m、深さ0.27mを測り、埋土は硬質土を基調とする。土師器（片）が散かに出土した。

溜まり状遺構

1SX01 (Fig.3)

A区南部に位置した遺構であり、調査区外へ展開するのために全体プランは確認できていない。遺構西部において東側は浅く、西側へ深くなっており、東側の深さは最大0.17m、西側の深さは最大0.30mを測る。西側北岸部にテラスを認め、底部はやや凹凸面を現す。埋土は黒灰色砂や黒褐色砂質土等が混入した自然堆積を呈し、遺物は弥生土器（破）、土師器（片・甕・片）、瓦器（残）、白磁（皿）等が出土した。

1SX02 (Fig.3・Tab.2)

1SX01の北部に隣接した遺構であり、東部は調査区外へ展開する。遺構1/5部は南部から北部にかけて一段深くなっており、深さは0.15～0.36mを測る。黒灰色砂や黒褐色質土等が混入した埋土が自然に堆積する。出土遺物は皆無であった。

1SX03 (Fig.3)

1SX01の北部に隣接した遺構であり、幅2.05m、深さ0.18mを測る。黒灰色砂や褐色色粘質土等が混入した埋土が自然に堆積し、1SX01と同様の埋土を呈することなどから同一遺構である可能性が考えられる。なお、出土遺物は皆無であった。

B区

溝

1SD07 (Fig.4・Tab.2)

B区南端で検出した東西方向の溝であり、1SX14を切る。途中は南方へ分岐し、A区で検出された1SD04へと接続するものと思われる。東西溝は幅1.80m、深さ0.28m、南北溝は幅0.63m、深さ0.05mを測る。埋土は南方からの流入土が見られ、僅かながら砂層が発達しており、流水があったものと思われる。遺物は弥生土器(片)、土師器(片)が僅かに出土した。

1SD09 (Fig.4・Tab.3)

B区南部で検出した東西方向の溝である。溝の北岸にテラスを認め、断面形は逆台形状を呈する。幅1.55~3.08m、深さ0.44mを測る。埋土は砂層が厚く堆積し、かなりの流水があったものと思われる。出土遺物はない。

1SD10 (Fig.4・Tab.3)

B区南部に位置し、1SD09の北部で検出した。東西方向の溝で幅1.05~1.30mを測る。溝底部はビット状の窪みが著しく、深さは最大で0.28mを測る。埋土は砂層が厚く堆積しており、埋土中から土師器(高坏)が出土している。

1SD11 (Fig.4・Tab.4)

B区中央部で検出した。平面状では多岐に分離しており、南部に位置する1SD10との切り合いは不明である。遺構内の状況から概ね東西方向に走るものと思われるが、底部はビット状或いは土坑状の凹凸、窪みか特に目立った状態で確認された。土層観察では複雑に砂層が混入し、発達していることからかなりの流水に伴って埋没したものと考えられる。埋土中からは土師器(片・小皿・坏)が認められた。

1SD12 (Fig.5・Tab.5)

B区北部で検出した遺構であり、南部の1SD13及び北部の1SD15を切る。遺構内は東側を中心に階状を呈し、埋土の上半部は黒茶色粘土、下半部は砂層が厚く堆積した状態であった。当溝と重複するかのように現代の水路が東西方向に設置されており、調査中はここから流れ込んでくる流水に幅まされた。流水を遮断するためのコンクリート製堤防が部分的に設置されており、現在もなお激しい流水があることを物語っている。この状況より以前からも水が集中する場所であったことが考えられ、この東方からの流水によって当遺構内西部は大きく抉られた状態になったと推測される。出土遺物は須恵器(鉢・片)、青磁(碗)が認められた。

1SD13 (Fig.5・Tab.5・6)

B区北部で検出した東西溝であり、先述した1SD12に切られる。溝の断面形は概ねU字状を呈するものと思われ、南岸にはテラスを認める。幅1.50m以上、検出面からの深さ0.54mを測り、埋土は南方から灰色砂及び黒色粘土が流れ込みが強い。遺物は僅かながら第10層より土師器(甕)を1点出土した。

1SD15 (Fig.6・Tab.7)

B区北端部で検出した遺構であり、南部の1SD13に切られる。遺構内は先述した1SD13と同様な階状を呈する。埋土の上半部は黒茶色粘土、下半部は砂層が厚く堆積した状態であり、東方からの流水によって当遺構内西部が大きく抉られたものと推測される。出土遺物は土師器(小皿)、黒曜石(細片)が僅かに認められた。

溜まり状遺構

1SX14 (Fig.6・Tab.6)

B区南端部に位置し、上半は1SD07に切られる。平面プランは半円状を呈し、遺構西部は調査区外へ展開する。幅3.10m、1SD07底部からの深さは0.35mを測る。埋土は黒灰色粘土が厚く堆積し、遺物は皆無であった。

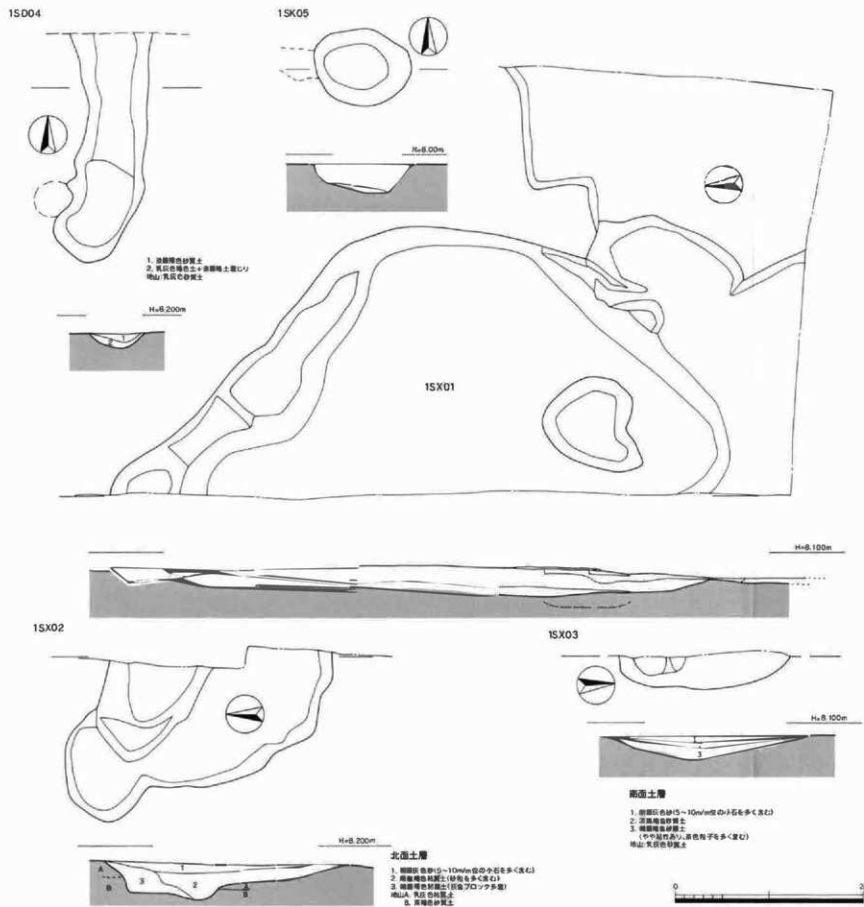
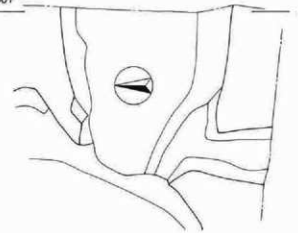


Fig.3 A区 溝 (15D04)・土坑 (15K05)・溜まり状遺構 (15X01-03) 実測図 (1/40)

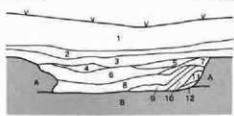
1SD07



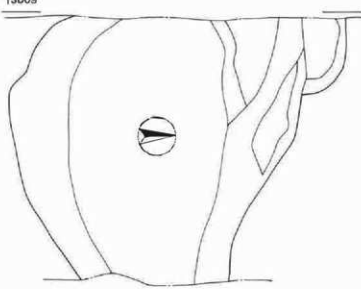
Hs. 87.00m

沖壁面土層

1. 灰黄色土層
2. 腐植土層(灰土)
3. 灰黄色土(腐植層)
4. 腐植層砂質土
5. 砂質土
6. 腐植層砂質土
7. 腐植層
8. 腐植層砂質土
9. 腐植層
10. 腐植層砂質土(砂質ブロック状)
11. 砂質土
12. 砂質土
13. 腐植層砂質土
14. 腐植層



1SD09



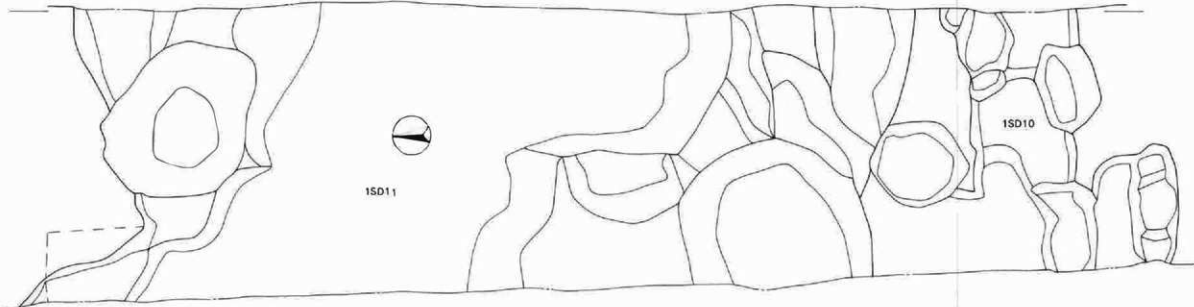
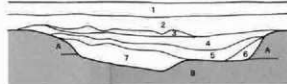
Hs. 8.500m

東壁面土層

1. 灰黄色土層
2. 腐植土層(灰土)
3. 腐植土(灰土層)
4. 腐植層砂質土(砂質ブロック状)
5. 腐植層砂質土
6. 腐植層砂質土(腐植層を多く含む)
7. 腐植層砂質土
8. 腐植層砂質土(腐植層を多く含む)
9. 腐植層
10. 腐植層
11. 砂質土
12. 砂質土
13. 砂質土
14. 腐植層
15. 腐植層
16. 腐植層
17. 腐植層
18. 砂質土
19. 腐植層砂質土(腐植層を多く含む)
20. 腐植層
21. 腐植層砂質土
22. 腐植層
23. 腐植層
24. 腐植層砂質土(腐植層を多く含む)
25. 腐植層
26. 砂質土
27. 砂質土
28. 砂質土
29. 腐植層砂質土
30. 砂質土
31. 砂質土
32. 腐植層砂質土(腐植層を多く含む)
33. 腐植層砂質土
34. 腐植層

西壁面土層

1. 腐植土層(灰土層)
2. 腐植層砂質土
3. 腐植層砂質土(腐植層を多く含む)
4. 腐植層砂質土
5. 腐植層砂質土
6. 腐植層砂質土
7. 腐植層砂質土
8. 腐植層砂質土
9. 腐植層砂質土
10. 腐植層砂質土
11. 腐植層砂質土
12. 腐植層砂質土
13. 腐植層砂質土
14. 腐植層砂質土
15. 腐植層砂質土
16. 腐植層砂質土
17. 腐植層砂質土
18. 腐植層砂質土
19. 腐植層砂質土
20. 腐植層砂質土
21. 腐植層砂質土
22. 腐植層砂質土
23. 腐植層砂質土
24. 腐植層砂質土
25. 腐植層砂質土
26. 腐植層砂質土
27. 腐植層砂質土
28. 腐植層砂質土
29. 腐植層砂質土
30. 腐植層砂質土
31. 腐植層砂質土
32. 腐植層砂質土
33. 腐植層砂質土
34. 腐植層砂質土
35. 腐植層砂質土
36. 腐植層砂質土
37. 腐植層砂質土
38. 腐植層砂質土
39. 腐植層砂質土
40. 腐植層砂質土
41. 腐植層砂質土
42. 腐植層砂質土
43. 腐植層砂質土
44. 腐植層砂質土
45. 腐植層砂質土
46. 腐植層砂質土
47. 腐植層砂質土
48. 腐植層砂質土
49. 腐植層砂質土
50. 腐植層砂質土
51. 腐植層砂質土
52. 腐植層砂質土
53. 腐植層砂質土
54. 腐植層砂質土
55. 腐植層砂質土
56. 腐植層砂質土
57. 腐植層砂質土
58. 腐植層砂質土
59. 腐植層砂質土
60. 腐植層砂質土
61. 腐植層砂質土
62. 腐植層砂質土
63. 腐植層砂質土
64. 腐植層砂質土
65. 腐植層砂質土
66. 腐植層砂質土
67. 腐植層砂質土
68. 腐植層砂質土
69. 腐植層砂質土
70. 腐植層砂質土
71. 腐植層砂質土
72. 腐植層砂質土
73. 腐植層砂質土
74. 腐植層砂質土
75. 腐植層砂質土
76. 腐植層砂質土
77. 腐植層砂質土
78. 腐植層砂質土
79. 腐植層砂質土
80. 腐植層砂質土
81. 腐植層砂質土
82. 腐植層砂質土
83. 腐植層砂質土
84. 腐植層砂質土
85. 腐植層砂質土
86. 腐植層砂質土
87. 腐植層砂質土
88. 腐植層砂質土
89. 腐植層砂質土
90. 腐植層砂質土
91. 腐植層砂質土
92. 腐植層砂質土
93. 腐植層砂質土
94. 腐植層砂質土
95. 腐植層砂質土
96. 腐植層砂質土
97. 腐植層砂質土
98. 腐植層砂質土
99. 腐植層砂質土
100. 腐植層砂質土



1SD11

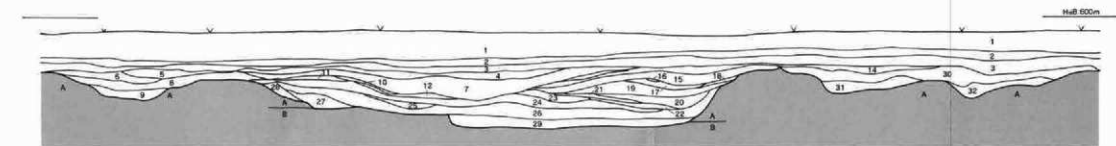
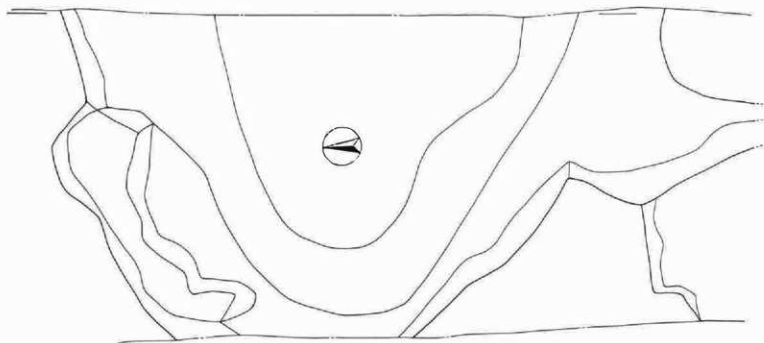
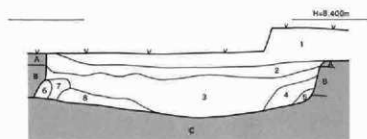
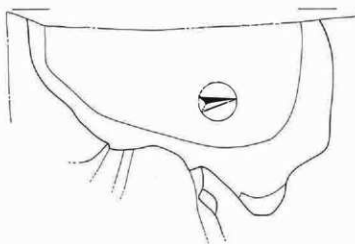


Fig. 4 B区 溝 (1SD07・09~11) 実測図 (1/40)

1SD15

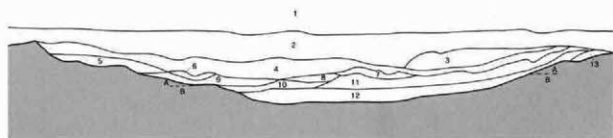


1SX14



1. 原色土(埋藏層)
2. 埋藏層砂土
3. 埋藏層粘土
4. 埋藏層(埋藏土)灰色砂層(U)
5. 灰色粘土
6. 埋藏層砂土
7. 土C層(U)
8. 灰砂層
- 埋藏土 灰色粘層土
- 埋藏土
- C. 灰砂層

Maß 400m



1. 原色土(埋藏層)
2. 埋藏層砂土
1. 埋藏層(埋藏土)灰色砂層(U)
3. 灰色粘土
4. 埋藏層粘土
5. 埋藏層砂土
7. 埋藏層砂土
8. 埋藏層砂土
9. 埋藏層粘土
10. 土C層(U)
11. 土C層(U)
12. 埋藏層粘土
13. 灰砂層
- 埋藏土 灰色粘層土
- B. 灰砂層

0 2m

Fig.6 B区 溝 (1SD15)・溜まり状遺構 (1SX14) 実測図 (1/40)

(3) 出土遺物

A区

溜まり状遺構

1SX01 (Fig.7・Tab.8)

弥生土器

大甕 (1) 底部破片で平底を呈する。底径11.2cmを測り、体部にかけてはやや丸みを帯びながら立ち上がる。磨耗が著しく調整は不明である。

土師器

杯 (2) 口縁部細片で僅かに外反する。磨耗のため調整不明で、胎土は微砂粒・石英・角閃石を僅かに含む。

甕 (3) 底部細片で底径7.2cmを復元する。小型品と思われ、底部は平底を呈する。磨耗のため調整不明で、胎土は微砂粒・石英・角閃石を僅かに含む。

瓦器

埴 (4) 口縁部細片で僅かに外反する。内面端部に重ね焼き痕跡が認められる。

白磁

皿 (5) 口縁部細片で端部は口売げとなる。淡灰白色の素地に淡灰白色軸を施軸する。大宰府編年Ⅸ類。

B区

溝

1SD10 (Fig.7・Tab.8)

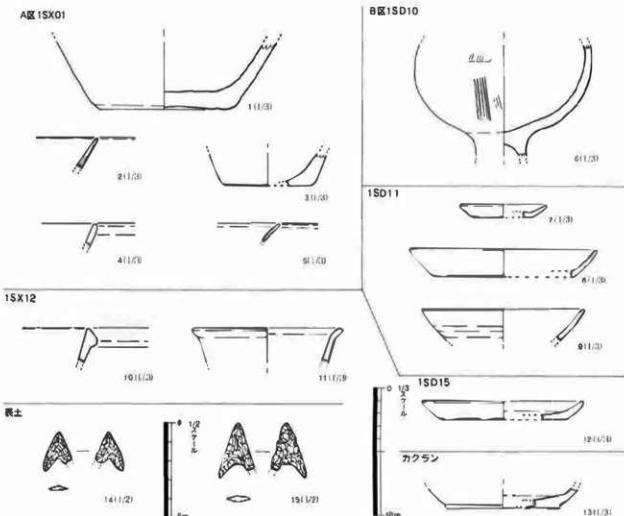


Fig.7 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

土師器

高坏 (6) 坏部の口縁端部及び耳部を欠損し、坏部の最大径は14.0cmを測る。外面の一部で僅かに刷毛目痕を認め、胎土は微砂粒・石英・角閃石を含む。

1SD11 (Fig.7・Tab.8)

土師器

小皿 (7) 口径7.0cm、底径4.7cm、器高1.05cmを復元する。底部外面は糸切りで磨耗のため調整不明。

皿 (8) 口径14.9cm、底径11.2cm、器高2.2cmを復元する。底部外面は糸切りで体部はやや丸みを帯びる。磨耗のため調整不明である。

坏 (9) 口縁部細片で口径13.0cmを復元する。体部と口縁部の境で絞線を認め、口縁部はごく僅かに外反する。磨耗のため調整は不明である。

1SD12 (Fig.7・Tab.8)

須恵器

鉢 (10) 口縁部は玉縁状を呈する。焼成不良で色調は淡茶白色を呈する。胎土は1~2mm程度の砂粒及び石英を多く含む。

青磁

坏 (11) 口縁部細片で口径12.0cmを復元する。濃灰白色の素地に淡茶緑色の透明釉をかけ、内外面に貫入を認める。大宰府編年Ⅲ-1類と思われる。

1SD15 (Fig.7・Tab.8)

土師器

小皿 (12) 口径12.9cm、底径10.0cm、器高1.5cmを復元する。表面磨耗のためわかりにくい。底部外面は糸切りと思われる。

攪乱・表土 (Fig.7・Tab.8)

土師器

坏 (13) 底部細片で底径9.1cmを復元する。表面磨耗のため調整不明。

石器

石鏃 (14・15) 共に凹基式の二等辺三角形を呈する石鏃であり、石材はサスカイト製である。右側部を欠損し、側面に細かくリタツチを加える。14は表面の風化が著しい。

(4) 小結

当地は、東部から展開する八女丘陵南端部にあり、西流する倉目川の北岸に立地する。調査区のほぼ全面にまたがって検出された溝及びびらまり状遺構は、当地がこれらの地形的な制約を受けているためのもと考えられ、かねてから相当分の流水が集中する地域であったことが予測される。検出された全ての遺構が不安定なプランを呈し、堆積土中に多くの砂や礫層が認められたのはこのためと思われる。また、遺物において弥生時代から中世に至るまでの土器、石器を出土したが、何れも表面が著しく磨耗していることから、土砂に混入した遺物が激しいローリングを繰り返すことによって生じたものと察することができよう。今回出土した遺物は上流にあたる東部に展開する集落からの流入品と思われ、その存在を窺える資料となった。

2. 蔵敷島ノ本遺跡 (1次調査)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市蔵敷島ノ本に所在しており、標高10.9mの低地に立地している。調査区は本路新設予定地のため南北4.5m、東西70mの東西に細長く設定し、平成17年4月26日より表土を除去を(有)福岡重機に委託し、調査を開始した。7月21日の空中写真撮影を(有)空中写真企画に委託し7月26日に(株)アジア航測に委託した航空測量をもって調査は終了となった。

(2) 検出遺構

溝

SD01 (Fig. 11・Pla.9・10)

調査区東側で検出された南北に走る溝である。検出段階では幅1.5m～2.7mと東に幅広がりを見せ、大溝であったが、掘り進めると自然道路であることと、数回の道路の変化があることが分かった。SD01の最終的な形態はY字状を呈し分流していたものと思われる。また、中洲状に残っている箇所も地山とは異なり前段階に堆積した堆積土である。

SD02 (Fig. 11・Pla.9・10)

SD01の東側で検出された南北方向に走る溝である。幅約1.7m、深さは検出面より約0.5mを測る。この溝はSD01を切っている。

SD08 (付図)

調査区南西隅で検出された幅約0.2m、深さ0.1mを測る。断面形楕円字状を呈し、北西方向に走る溝である。

土坑

SK03 (Fig.8)

SD01の西側に深さ3cm～10cmの浅い窪地状が不定形に広がっており、その中央部に幅約1.0m、深さ約0.1mを測り、不定形を呈する土坑である。土俵器の細片が数点出土したが図化出来るレベルではなかった。

SK04 (Fig.8)

SD01の西側に位置している。長軸0.95m、短軸0.65m、深さ0.1mを測る。不定形を呈する土坑であり、出土遺物は土俵器が数点出土したが図化出来るレベルではなかった。

SK07 (Fig.9)

調査区中央より西よりで検出し、北側の調査区外に延びている土坑である。幅1.4m、深さ0.2mを測る円形を呈すると思われる。土俵器を数点出土したが図化出来るレベルではない。

SK05・06 (付図)

植物質と思われる非常に薄い土層から遺物が出たために遺構番号を使用した。レベル自体は地山面と変えっけに不定形に広がっており、範囲も曖昧なために航空測量で図化されなかった。SK04とSK07の面がおおよそその範囲であり、細かい面占面になっている。

3) 出土遺物 (Fig. 10・Pla.13)

SK03



Fig.8 SK03・SK04遺構実測図 (1/40)

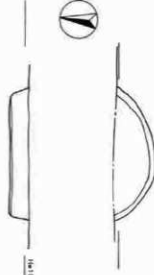
SD01
土師器

1・2は葉の口縁部片である。1は復元口径19.0cmを測る。口縁部内外面をナデによる調整を行い、口縁下内面はケズリを施す。2は口縁外面はナデ、内面はハケ目調整を施す。3は高杯の脚部である。杯との接合には充填法を用いる。磨耗が激しく調整痕は見られない。4は内面に丁寧な磨きを施した杯である。外面にも磨きを施しているようだが磨耗によって彫痕が残らない。5・6はミニチュアの手握ね土器で、口縁部を内傾するタイプと対称かに入内するタイプが出土したが磨耗が激しく器壁が剥落している。7は甗り付け高台の杯である。切り履し痕も看取されないほど磨耗している。

SD02
土師器

8～11まで葉の口縁部である。8・10は短く直線的に立ち上がり、9は外側に強く屈曲している。11は緩やかに屈曲しながら立ち上がる。8・9は調整痕が磨耗により看取出来ない状態である。8も外面の縦方向のハケ目調整が施されているのが見える程度である。

1:10,000m

SD01
土師器

0 2m

Fig.9 SK07遺構実測図 (1/40)

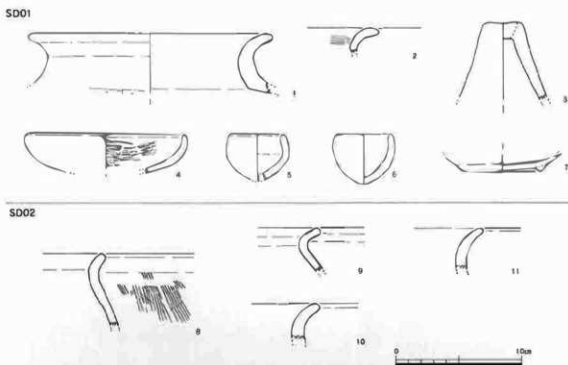


Fig.10 SD01・SD02出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	色調
1	土師器甕	(19.4)	—	—	口縁部1/2	淡灰茶色
2	土師器甕	—	—	—	口縁部1/4	淡茶褐色
3	土師器高杯	—	—	—	脚部1/3	淡褐色
4	土師器杯	(12.8)	—	—	1/3	暗茶褐色
5	土師器ミニチュア	(4.6)	—	3.7	1/3	淡茶灰色
6	土師器ミニチュア	(4.2)	—	4.0	1/2	淡茶灰色
7	土師器杯	—	(6.3)	—	1/4	淡茶白色
8	土師器甕	—	—	—	1/4	淡灰茶色
9	土師器甕	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色
10	土師器甕	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色
11	土師器甕	—	—	—	口縁部細片	淡灰茶色

※()内は 復元による数値

Tab.1 出土遺物観察表

(4) 小結

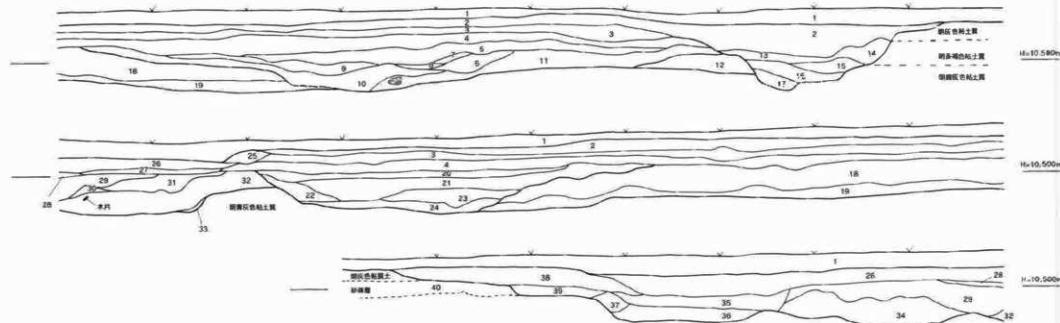
今回発掘した本遺跡は東西方向に長い調査区であり、その調査区内で遺物を多く含む遺構は少なかった。その中で溝状遺構では少量ながら遺物を出土したのだがSD01は自然流路であった。本遺跡の立地する場所は八女丘陵西端部より鋸歯状に張り出した丘陵間の谷部から低地部に移行する箇所に立地しているために西側に向かって標高が低くなっており、水の流れは東西方向になると思われる。しかし、SD01は南北方向に走っているために、低地部では谷部から流れた水はかなり蛇行しながら流れていたと思われる。

【参考文献】

- 筑後市教育委員会 「縄文遺跡群 (兼ノ本遺跡)」 1990 筑後市文化財調査報告書第6号
 筑後市史編纂委員会 「筑後市史」 1998 筑後市史編纂委員会

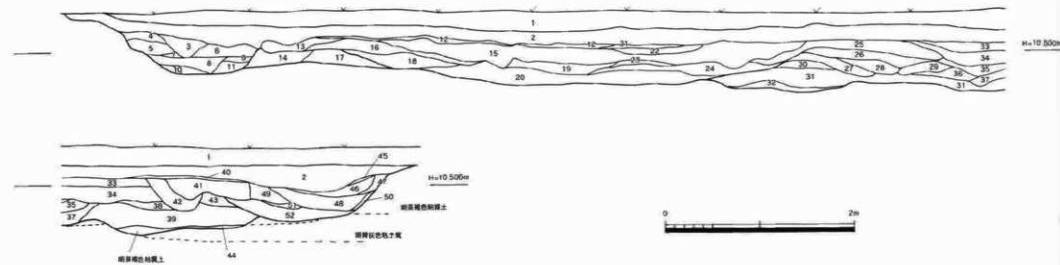


調査終了後 現地状況



SD01.SD02北壁土層図

- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 観音寺粘土層 | 21. 観音寺色粘土層 |
| 2. 観音寺粘土層 | 22. 観音寺粘土層 |
| 3. 観音寺粘土層 | 23. 観音寺色粘土層 |
| 4. 観音寺色粘土層 | 24. 観音寺色粘土層 |
| 5. 観音寺色粘土層 | 25. 観音寺色粘土層 |
| 6. 観音寺色粘土層 | 26. 観音寺色粘土層 |
| 7. 観音寺色粘土層 | 27. 観音寺色粘土層 |
| 8. 観音寺色粘土層 | 28. 観音寺色粘土層 |
| 9. 観音寺色粘土層 | 29. 観音寺色粘土層 |
| 10. 観音寺色粘土層 | 30. 観音寺色粘土層 |
| 11. 観音寺色粘土層 | 31. 観音寺色粘土層 |
| 12. 観音寺色粘土層 | 32. 観音寺色粘土層 |
| 13. 観音寺色粘土層 | 33. 観音寺色粘土層 |
| 14. 観音寺色粘土層 | 34. 観音寺色粘土層 |
| 15. 観音寺色粘土層 | 35. 観音寺色粘土層 |
| 16. 観音寺色粘土層 | 36. 観音寺色粘土層 |
| 17. 観音寺色粘土層 | 37. 観音寺色粘土層 |
| 18. 観音寺色粘土層 | 38. 観音寺色粘土層 |
| 19. 観音寺色粘土層 | 39. 観音寺色粘土層 |
| 20. 観音寺色粘土層 | 40. 観音寺色粘土層 |



SD01.SD02南壁土層図

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 観音寺粘土層 | 24. 観音寺色粘土層 |
| 2. 観音寺粘土層 | 25. 観音寺色粘土層 |
| 3. 観音寺粘土層 | 26. 観音寺色粘土層 |
| 4. 観音寺粘土層 | 27. 観音寺色粘土層 |
| 5. 観音寺粘土層 | 28. 観音寺色粘土層 |
| 6. 観音寺粘土層 | 29. 観音寺色粘土層 |
| 7. 観音寺粘土層 | 30. 観音寺色粘土層 |
| 8. 観音寺粘土層 | 31. 観音寺色粘土層 |
| 9. 観音寺粘土層 | 32. 観音寺色粘土層 |
| 10. 観音寺粘土層 | 33. 観音寺色粘土層 |
| 11. 観音寺粘土層 | 34. 観音寺色粘土層 |
| 12. 観音寺粘土層 | 35. 観音寺色粘土層 |
| 13. 観音寺粘土層 | 36. 観音寺色粘土層 |
| 14. 観音寺粘土層 | 37. 観音寺色粘土層 |
| 15. 観音寺粘土層 | 38. 観音寺色粘土層 |
| 16. 観音寺粘土層 | 39. 観音寺色粘土層 |
| 17. 観音寺粘土層 | 40. 観音寺色粘土層 |
| 18. 観音寺粘土層 | 41. 観音寺色粘土層 |
| 19. 観音寺粘土層 | 42. 観音寺色粘土層 |
| 20. 観音寺粘土層 | 43. 観音寺色粘土層 |
| 21. 観音寺粘土層 | 44. 観音寺色粘土層 |
| 22. 観音寺粘土層 | 45. 観音寺色粘土層 |
| 23. 観音寺粘土層 | 46. 観音寺色粘土層 |
| | 47. 観音寺色粘土層 |
| | 48. 観音寺色粘土層 |
| | 49. 観音寺色粘土層 |
| | 50. 観音寺色粘土層 |
| | 51. 観音寺色粘土層 |
| | 52. 観音寺色粘土層 |
| | 53. 観音寺色粘土層 |
| | 54. 観音寺色粘土層 |
| | 55. 観音寺色粘土層 |
| | 56. 観音寺色粘土層 |
| | 57. 観音寺色粘土層 |

Fig.11 B区 蔵敷畠ノ本SD01・SD02土層図 (1/40)

3. 蔵教保古手遺跡 第2次調査 (A区)

(1) はじめに

当遺跡は茨城市大字蔵教字保古手225外に所在する。標高約9m~10mの低地に立地し、調査区北側と南側は八丈丘陵裾部の標高約15mの台地を形成するため、調査区一帯は各々の地形を呈する。試掘調査は平成18年度に行い、新設水路及びポンプ場建設範囲を調査対象とした。調査面積は1455㎡、調査期間は平成17年5月25日から7月29日。調査に際しては重機による表土剥きを(行)フックンで重機、基準点・水準点設置作業、航空測量による遺構全体図作成をアゾブ電測(株)、遺構全体写真撮影を(有)空中写真企画に委託した。発掘調査は上村英士が担当した。

基本土層

調査前は米田として使用されており、標高約10mを測る。耕作土が約25cm、その下に約5cm~10cmの粘土を確立し、床土を除去した黄白色粘土(一部シルト系が有り)および茶色粘土の地山に遺構が切り込む。遺構直上は黒色系粘質土と茶色系粘質土及び砂質土に分かれる。

(2) 検出遺構

土溝

2SK05 (Fig.12)

調査区南端の現況水路北側で検出し、調査区外へ延びると考えられる土溝である。検出最大長軸約8.8m、検出最大幅約3.25m、最大深さ約0.57mを測る。直上は茶色系で下層は砂質土である。遺物は須恵器甕片、土師器坏片、小皿片、土鍋片、土鍋片、甕器片、陶器片、瓦片、黒曜石剥片、サヌカイ卜剥片を出している。

2SK13 (Fig.15, Pla.15)

調査区中央で2SD10に切られる不定形な土溝である。検出長軸約5.2m、検出短軸約2.5m、最大深さ約0.72mを測る。直上は黒色系の粘質土が基本で下層で砂質土が混じる。遺物は甕器片を出す。

溝

2SD09 (Fig.14, Pla.15・16)

調査区を南北に走行して走る溝で、低地に存在するため氾濫原として使うほうが妥当である。調査はA・B・Cトレンチを設定し掘削している。検出最大幅約1.3m、最大深さはAトレンチで1.7mを測る。直上は基本的に黒色系の粘質土で一部の層が混じる。地山は黄色粘土層下の小礫層となり湧水がある。遺物は土師器甕片、破片、坏片、瓦片を出している。

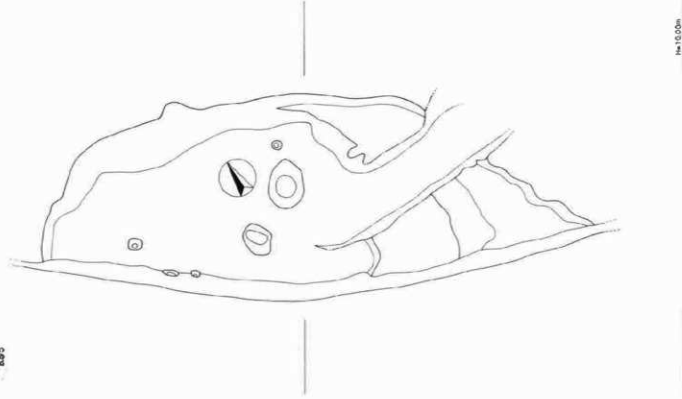
2SD10 (Fig.14, Pla.17)

調査区中央を東西に走行して走り、2SD09・2SK05を切る溝である。東端で2SX12に接続するような形状をとる。検出長約20m、検出最大幅約2.3m、最大深さ約0.33mを測る。直上は上層が茶色系の砂質土、下層が黒色系である。遺物は上層で須恵器甕片、土師器坏片、小皿片、土鍋片、甕片、瓦器、瓦片、磁器片、瓦片を、下層からは須恵器甕片、土師器坏片、甕片、土鍋片を出している。

不明遺構

2SX12 (Fig.16)

調査区中央東端で検出した不定形な遺構で2SD10と合流している。検出長軸約9.55m、検出短軸約6.5mを測る。深さについては傾成を過剰しており一部残存部で0.48mを測る。直上は茶色系の粘質土である。遺物は土師器甕片、高坏片、土鍋片、茶釜片、瓦器坏片、磁器片、陶器甕片、破片、瓦片、行裂品を出している。



2SX14 (Fig. 17)

2SK13東側で検出し、不定形な遺構である。一部にテラスを設け、検出長軸約3.7m、検出短軸約1.75m、最大深さ約0.33mを測る。溝底は安定しておらず、雨水による崩壊で図上では復元できていないが、溝底には約10cm前後の小ピットを多数確認している。遺構全体の埋土は茶色系である。遺物は土師器杯×皿片、甕片、土鍋片、瓦器碗片、磁器片を出している。

2SX23 (Fig. 13)

調査区南側で検出した不定形な遺構である。このような不定形な遺構は当該調査区では数多く確認しており、上層の現況耕作や旧耕作時の痕跡、若しくは粘土等の土取り場ではないかと考えられる。検出長軸約9.3m、最大深さ約0.06mを測る。遺物は土師器片、磁器片、陶器片、黒曜石割片を出している。

2SX26 (Fig. 13)

調査区中央で検出した不定形な遺構であるが2SD09を避けるように配置している。埋土は茶色系と黒色系が混じる粘質土であり、溝底は北側が低くなる。遺物は須恵器甕片、土師器杯×皿片、土鍋片、磁器片、瓦質すり鉢片、瓦片を出している。

2SX18 (Fig. 18, 19, Pla. 17~20)

波板状遺構土層

調査区中央北側で検出した計12個(a~l)の連続する土層群である。各土層は槽円形を基本とし、側面は槽円形に二分岐している。土層厚は長軸0.40m~0.45m(立上り部間隔)、東列の南北で0.40m~0.50mを測る。埋土は平一層で、淡黒色土に地山近似的な黄色土が珪に混入している。埋土は締まっており堅固である。遺物は土師器小片のみである。

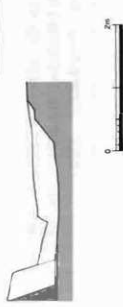


Fig. 12 2SK05実測図 (1/60)

一部不定形な形状をとる。土層群の主軸は南北から若干東に振れ、二股に分岐している。土層厚は長軸約0.18m~0.49m、深さは最大で0.13mを測る。土層間隔は西側の南北で0.40m~0.45m(立上り部間隔)、東列の南北で0.40m~0.50mを測る。埋土は平一層で、淡黒色土に地山近似的な黄色土が珪に混入している。埋土は締まっており堅固である。遺物は土師器小片のみである。

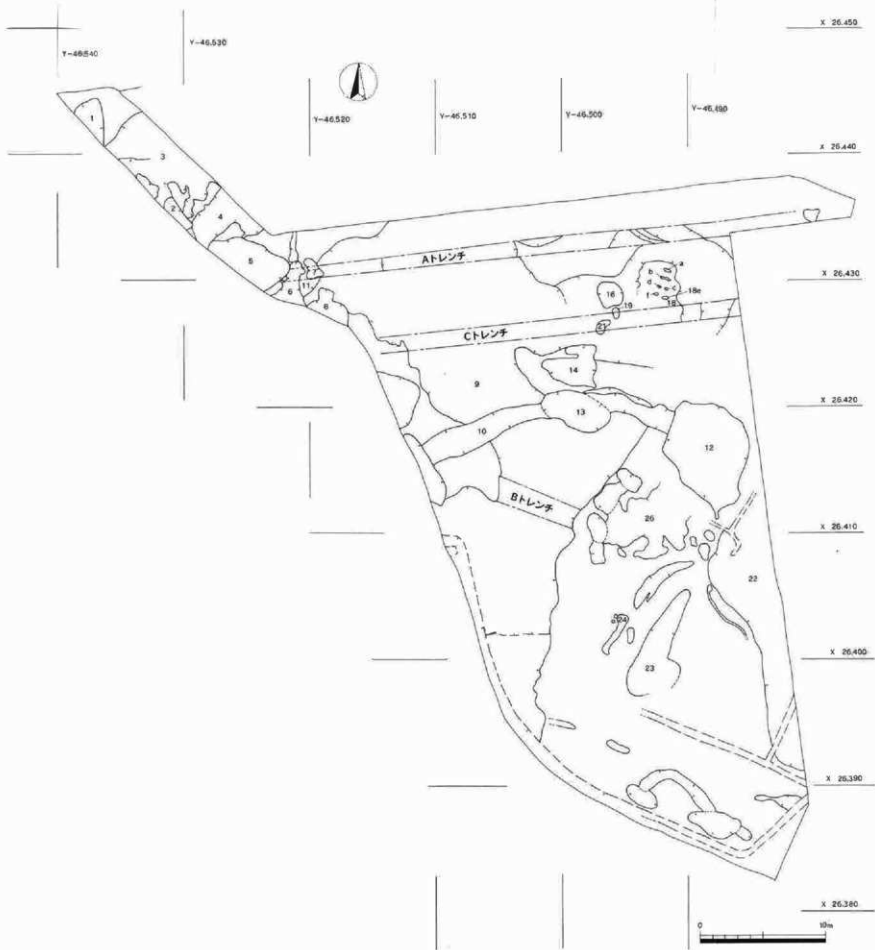
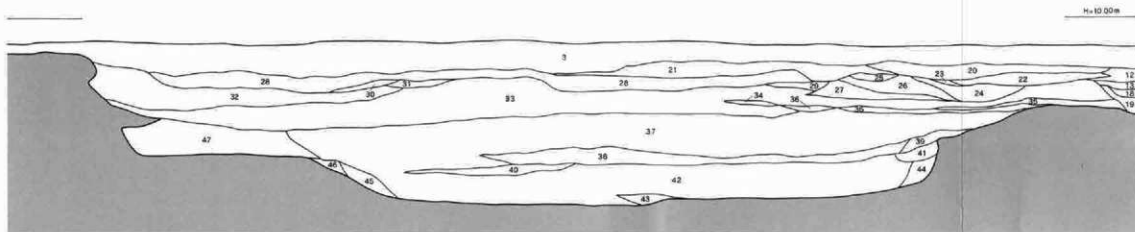
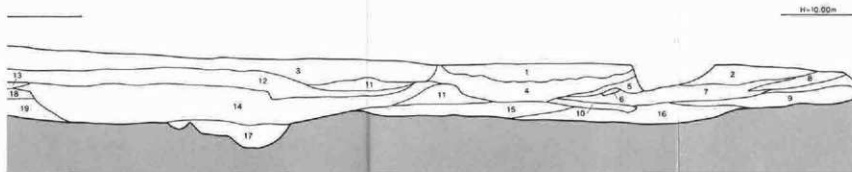


Fig.13 藏数保古手遺跡第2次調査 (A区) 遺構略測図 (1/300)

2SD09(Aトレンチ)

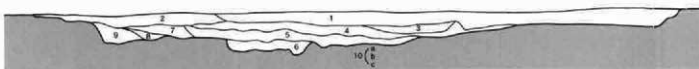
- | | |
|-------------|--------------|
| 1. 緑褐色土 | 26. 褐色砂(少量) |
| 2. 黄褐色砂質土 | 26. 灰褐色砂(少量) |
| 3. 黄褐色粘質土 | 27. 砂質土(少量) |
| 4. 灰褐色砂(少量) | 28. 黄褐色粘(少量) |
| 5. 黄褐色土(粘) | 29. 黄褐色粘(少量) |
| 6. 黄褐色土 | 30. 黄褐色粘(少量) |
| 7. 黄褐色土 | 31. 黄褐色粘(少量) |
| 8. 黄褐色土 | 32. 黄褐色粘(少量) |
| 9. 黄褐色土 | 33. 黄褐色粘(少量) |
| 10. 黄褐色土 | 34. 黄褐色粘(少量) |
| 11. 黄褐色土 | 35. 黄褐色粘(少量) |
| 12. 黄褐色土 | 36. 黄褐色粘(少量) |
| 13. 黄褐色土 | 37. 黄褐色粘(少量) |
| 14. 黄褐色土 | 38. 黄褐色粘(少量) |
| 15. 黄褐色土 | 39. 黄褐色粘(少量) |
| 16. 黄褐色土 | 40. 黄褐色粘(少量) |
| 17. 黄褐色土 | 41. 黄褐色粘(少量) |
| 18. 黄褐色土 | 42. 黄褐色粘(少量) |
| 19. 黄褐色土 | 43. 黄褐色粘(少量) |
| 20. 黄褐色土 | 44. 黄褐色粘(少量) |
| 21. 黄褐色土 | 45. 黄褐色粘(少量) |
| 22. 黄褐色土 | 46. 黄褐色粘(少量) |
| 23. 黄褐色土 | 47. 黄褐色粘(少量) |
| 24. 黄褐色土 | 48. 黄褐色粘(少量) |



2SD09(Bトレンチ)

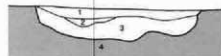
- | | |
|---------------|-----------|
| 1. 黄褐色粘質土 | 6. 灰褐色土 |
| 2. ノミ形砂(少量) | 7. 黄褐色土 |
| 3. 灰褐色土(粘質砂層) | 8. 砂層(少量) |
| 4. 黄褐色土 | 9. 黄褐色土 |
| 5. 灰褐色土 | 10. 黄褐色土 |
| 6. 黄褐色土 | 11. 黄褐色土 |
| 7. 黄褐色土 | 12. 黄褐色土 |

H=10.00m



2SD10

H=10.00m

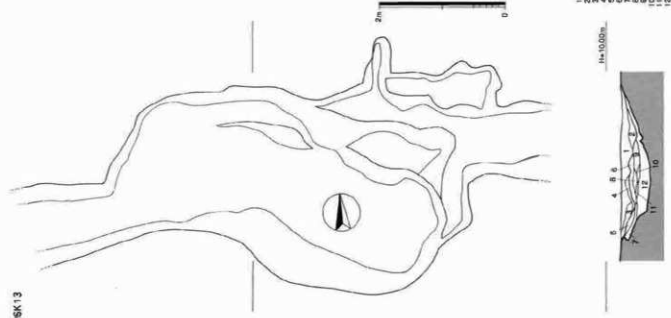


- | |
|--------------|
| 1. 黄褐色土(粘質層) |
| 2. 黄褐色土 |
| 3. 黄褐色土 |
| 4. 黄褐色土 |



Fig.14 2SD09・10土層図 (1/40)

25K13



1. 赤褐色土(砂・砂・赤土)
2. 赤褐色粘土
3. 赤褐色粘土
4. 赤褐色粘土
5. 赤褐色粘土
6. 赤褐色粘土
7. 赤褐色粘土
8. 赤褐色粘土
9. 赤褐色粘土
10. 赤褐色粘土
11. 赤褐色粘土
12. 赤褐色粘土

Fig.15 25K13発掘図 (1/60)

2SX22 (Fig.20, Pla.20・21)

調査区中央東側で検出し調査区外へ延びる不定形な遺構である。検出長軸約15m、最大深さ約0.16mを測る。茶色砂系の埋土を掘削すると断面は0.10m程度の小ピットが無数に存在している(圖上は雨水による樹環で残存部のみを図化で、検出時は小ピットが密集している。)遺物は須恵器残片、土師器杯×皿片、高坏片、土鍋片、鏝片、鉢片、瓦器残片、陶器片、瓦質土器片、瓦片、土製皿、石製皿が出土している。

2SX27 (Fig.21, Pla.20・21)

2SX18南側で検出した小ピットが密集する遺構である。SX12との切り合い関係は不明であり、これらの小ピットの分布範囲も不安定でSX18を切るものもある。埋土は茶色系の砂質土と粘質土が混ざっており、各ピットの断面は不定形である。遺物は出土していない。

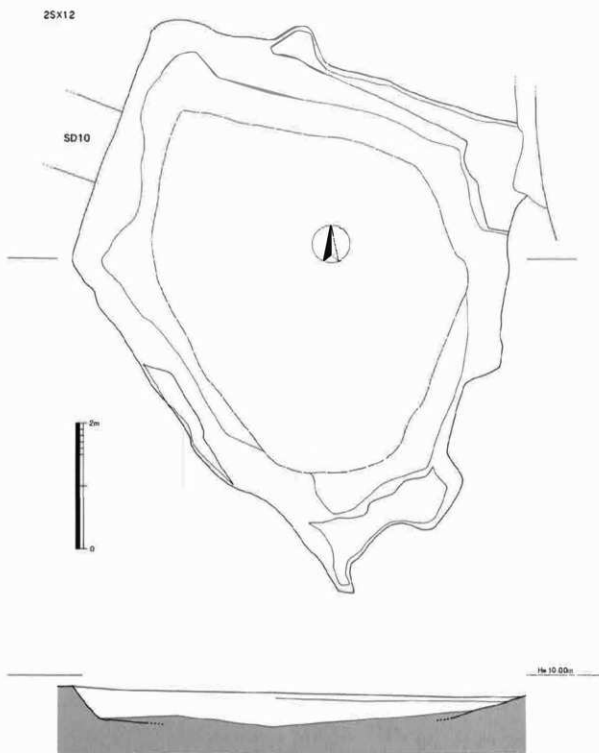


Fig.16 2SX12実測図 (1/60)

(3) 出土遺物

土曜

2SK05 (Fig.22、Pla.23)

土師器

小皿(1) 口径7.0cm、器高1.8cm、底径5.6cmを測る。底部糸切りで口縁部に油煙が残る。

磁附

白磁

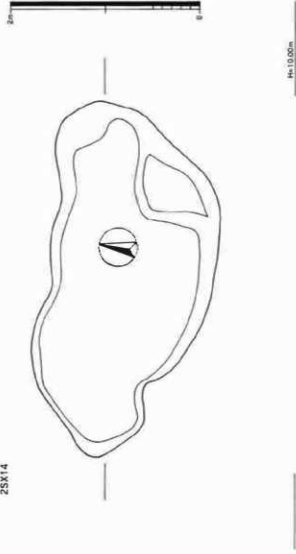


Fig. 17 2SX14実測図 (1/40)

例 (2) 底径5.1cmを測る。高台接地面のみ範囲で、見込みに目跡が4ヶ所残る。若干質人が見られ、内面にはピンホールが残る。

皿 (3) 口縁部片で端部が若干外反する。残存器高1.2cmを測る。

染付

例 (4) 口縁部から体部片で口縁外面に圓縁、体部下位に柳花文を施す。

2SK13 (Fig.22, Pla.23)

磁器

白磁

碗×皿 (5) 口縁端部片で唇部を外反させ上端部を水平に仕上げる。

構

2SD09 (Fig.22, Pla.23)

土師器

坏 (6) 体部から口縁部にかけて内湾し、丸底になると考えられる環片である。調整は磨耗のため不明。裏(7・8) 7は口縁部片で内面頸部下から横方向のケ、又1口縁部内外面をヨコナテ調整。8は口縁部内外面にヨコナテ後の斜方向ハケ目が残る。

2SD10茶砂土 (Fig.22, Pla.23)

土師器

土鍋 (9・10) 共に口縁部片で端部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。調整は磨耗のため不明、焼成不良である。

磁器

白磁

皿 (11) 口縁部細片で端部を外反させる。現存器高1.4cmを測る。

2SD10茶粘 (Fig.22, Pla.23)

土師器

土鍋 (12) 口縁部から上蓋上位片で、口縁部を折り曲げ玉縁状に仕上げる。体部外面に指頭痕が残る。

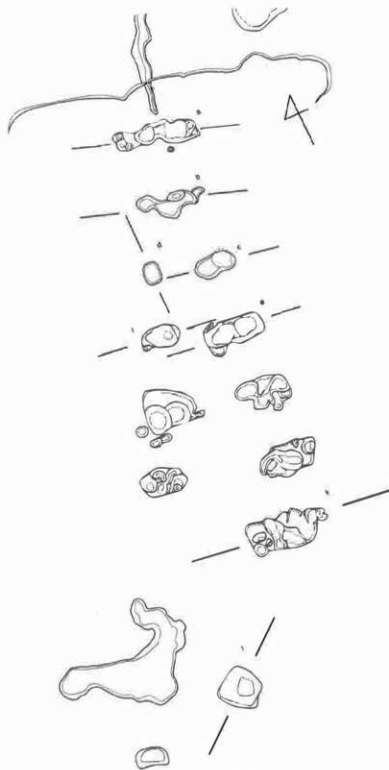


Fig.18 2SX18実測図 (1/40)

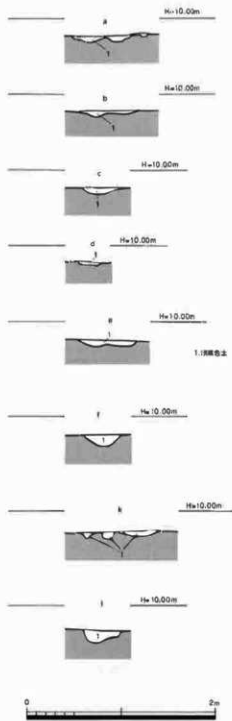


Fig.19 2SX18土層図 (1/40)

2SD10 (Fig.22, Pla.23・24)

類土器

壺 (13) 口縁端部片で調整はヨコナテ、外面層面下に自然軸がわかる。焼成還元良好で暗青灰色。

土師器

小皿 (14) 口径10.7cm、器高1.4cm、底径8.0cmを測る。底部糸切り、内外面は磨耗のため調整不明。

すり鉢 (15) 底部片で底径8.0cmを測る。内面にすり目を施す。焼成不良。

瓦器

甕 (16) 口縁部片で調整はヨコナテ。焼成不良で口縁部内外面淡黒灰色、淡茶灰色を呈する。

磁器

白磁



Fig.20 2SX22実測図 (1/50)

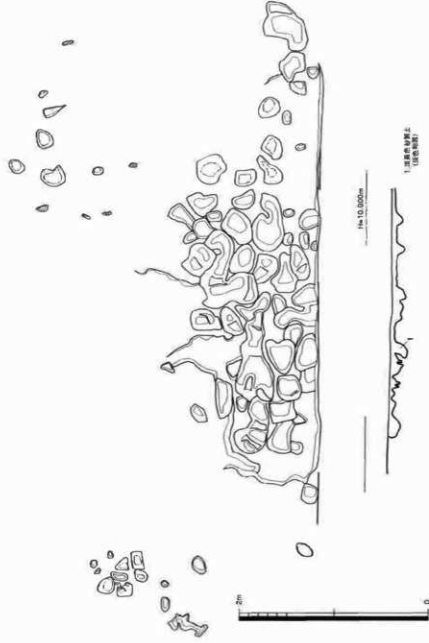


Fig.21 2SX27実測図 (1/40)

皿 (17) 口縁から体部片で口弁げの皿である。残存器高2.15cmを測る。
 碗 (18) 口縁部片で全面施釉である。口縁端部を若干外反させる。

青磁

碗 (19) 竜泉窯系青磁で外面に施釉を施す。

土製品

平瓦 (20) 胎土は石英や角閃石を含み比較的精選されている。丁寧に瓦取りし、布目痕が残る。

不明遺構

2SX12 (Fig.22, Pla.24・25)

土俵跡

土器 (21) 口縁端部を玉縁状に仕上げ、内面は横方向のハケ目、外面は指頭痕と縦方向のハケ目が残る。

甕×釜 (22) 穿孔した耳の部分である。胎土は精選されており赤色粒子が見られる。

瓦器

碗 (23) 口縁部片で調整は磨耗のため不明、内外面淡茶灰色を呈し、釉或不良である。

磁器

青磁

碗 (24) 体部片で外面に縦方向の飾目を施す。同玄瀝系青磁。

陶器

甕 (25) 底部片で内外面に鉄釉を施す。高台部は露胎。素地は淡茶灰色、淡褐色を呈する。

石製品

不明製品 (26) 長さ22.5cm、厚さ4.8cmを測り、側面が破損している。中央に直径5cm程度、深さ2.0cm程度の窪みが見られる。花崗岩製。

2SX14 (Fig.22, Pla.25)

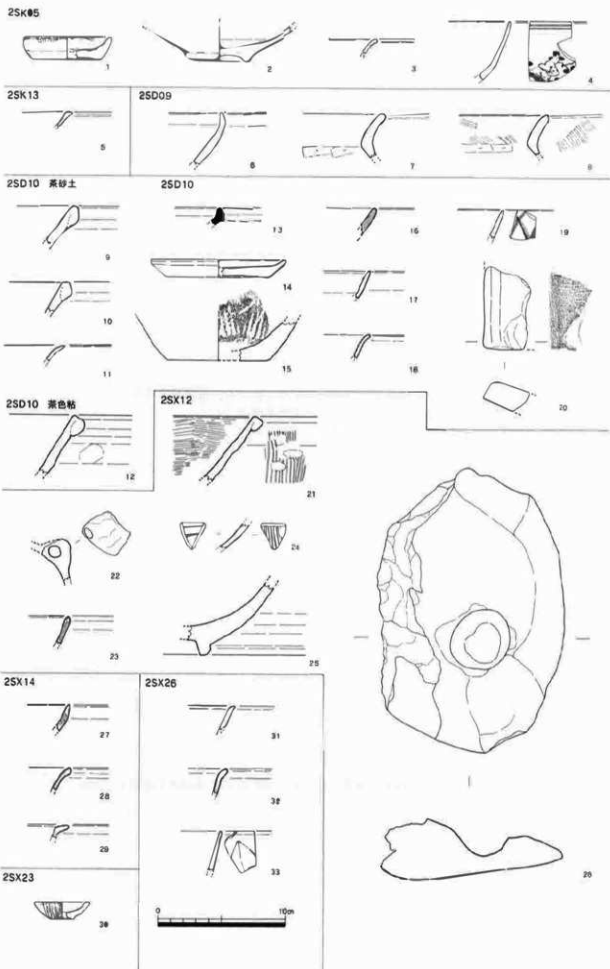


Fig.22 出土遺物① (1/3)

25X22

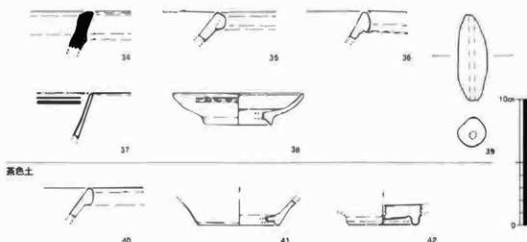


Fig.23 出土遺物② (1/3)

瓦器

碗 (27) 口縁部片で端部が若干内湾する。口縁外面は重ね焼き痕が残り黒色化している。

磁器

青磁

碗 (28) 口縁部片で端部が若干丸みを帯びる。軸が厚く掛かる。竜泉窯系青磁。

鉢 (29) 口縁端部を屈曲させ平らに仕上げる。竜泉窯系青磁。

25X23 (Fig.22, Pla.25)

磁器

白磁

紅皿 (30) 口径4.5cm、器高1.35cm、高台径1.8cmを測る。外面を貝殻上に型押しする。

25X26 (Fig.22, Pla.25)

磁器

白磁

碗 (31) 口縁部片で端部が若干外反する。素地は淡茶白色、釉調は淡黄白色。

青磁

碗 (32・33) 32は小碗で口縁部を外反させる。33は外面に蓮弁を施す。共に竜泉窯系青磁。

25X22 (Fig.23, Pla.25・26)

須恵器

甕 (34) 口縁部片で外面に浅い断面三角形の突帯が付く。調整はヨコナテ、自然軸が掛かる。

土御器

土鍋 (35) 口縁部片で端部を玉縁状に仕上げる。調整は磨耗のため不明。

磁器

白磁

碗 (36) 口縁部を玉縁状に仕上げる。外面にピンホールが残り、淡黄茶色を呈して焼成不良。

青磁

碗 (37) 口縁部内面に三本の沈線が見られる。竜泉窯系青磁。

染付

皿 (38) 口径10.5cm、器高2.5cm、高台径5.4cmを測る。見込みを蛇の目状に軸のカキ取る。

土製品

土錘 (39) 長さ6.8cm、幅2.35cm、厚さ2.3cmを測る。約6mmの孔を穿つ。

茶色土 (包含層)

磁器

2SX26 (Fig. 23, Pla. 25・26)

白磁

碗 (40・41) 40は口縁部を玉縁状に仕上げ、釉調は灰白色を呈し、視感良好。41は高台径6.5cmを測り、高台部露胎で基筋底に仕上げ。

青磁

碗 (42) 底部片で高台径5.8cmを測る。高台部は露胎。

(4) 小鉢

今次調査では前回の調査範囲により数々の遺物が検出されており、これらの中で幾つかの特徴的な遺物・遺物について観察していく。

大甕

2SD09については、北側検出地点でかなり遺物は深く粘土層と砂層の混在している状況から、かなりの流水があったと考えられ、遺物断面のオーバーハングの状況からも判断できる。しかし、中央部や南側では粘土層が残積堆積しているのみとなり、調査区南端では地山である砂礫層が北側の検出面より高い位置で確認されている。このことから2SD09は蛇行しながら調査区を東西に迂回、若しくは雨水により潤しい流水があった事を物語る。調査区一帯が標高10m以下の低地であり、北側と南側がより潤しい流水となる谷地形のため、大甕と云うより、むしろ自然河川及び溜水の痕跡とも考えられる。水には事欠かない地域である事は調査区の雨水による水没等により明らかである。また、出土遺物から見るとハトレンチである北側からは古墳時代までの遺物しか確認されず、南側であるCトレンチからは重畳の遺物を検出している事から、地形的な問題により様々な時代にも程度が繰り返されている様が見受けられる。しかし、大甕や甕以外に様々な遺物が検出されており、旧地で営まれた遺物の意義について考えなければならぬ。

波板状磁土断および不明遺物

2SX18については、現在までには様々な研究成果から遺物認定や性格の推定が行われている。今次調査の遺物については、遺物配置状況と2SX22・27から、ある程度想定できうる性格について言及しておく。遺物は2SX18が南北方向に配置され、北から南側へ二連に分岐する。分岐した最南端の連続土断2SX18-1周辺から2SX27の小ピット群が切り込み形で検出される。更に南側では2SX22が階段状に検出され、下層で膨大な小ピット群を形成する。これらの一連の遺物については、埋土が黒色系(2SX18)と茶色系(2SX22・27)に分かれるが、共に跡まっただけであり、平面的には埋土がマーブル状に入ることが共通している。

波板状磁土断については昨今の研究で遺物の性格付けが行われているが、その中で「牛馬歩行痕」が近年の成果で明らかになっている。牛馬の歩行により連続した土断が形成される過程が復元されており、一面には言えないが今次調査の2SX18から2SX22・27へと続く痕跡はこれを推定する手かりとなる。調査地で農家の方の聞き取り調査を行ったところ、30年～40年前までは馬等による水田耕作を行っていたようで、遺物が茂土(耕作土・床土)直下から検出される点も考慮すると可能性は高い。しかし、連続土断が検出されたのは2SD09のみであり、小ピット群も範囲は調査区全体から見ると稀薄に狭いために検出されており、今後の調査事例の増加に期待したい。

出土遺物

各遺物からは遺物が出土している遺物の時期を明確に示す遺物に恵まれなかった。① 毛瓦の中で、2SD10Rの平瓦が特異な遺物として挙げられる。当市では古代・中世を通じて瓦を出土する遺物及び遺物自体の出土が稀とない。近世・近代では水田境の茶畑きの土管を作る過程で作成された平瓦が現存している。今次調査の平瓦については水田境の平瓦に比べ厚く、胎土も若干異なる。近隣で古代の遺物は確認されておらず、2SX27には坂東寺熊野神社(鎌倉時代)の荘園地として築いてきたことから断片を繋ぎ合わせる遺物である。

遺構	S-番号	計画	番号	中番号	名称	器種	口径(長さ)	器高(幅)	底径 (底き(厚))	残存	備考
	28J05		5	22							
	28J05		6	22							
	28J05		5	22					5.6		
	28J05		5	22					6.1		
	28J13		13(5-12期)	22							
	28J09		9	22							
	28J09		9	22							
	28J10		10	22							
	28J10		10	22							
	28J10		10	22							
	28J10		10	22							
	28J10		10	22							
	28J12		12	22							
	28J12		12	22							
	28J12		12	22							
	28J12		12	22							
	28J14		14	22							
	28J14		14	22							
	28J23		23	23							
	28J26		26	23							
	28J26		26	23							
	28J22		22	23							
	28J22		22	23							
	28J22		22	23							
	28J22		22	23							
	茶色土		22	23							
	茶色土		22	23							
	茶色土		22	23					5.5		
	茶色土		22	23					5.8		

○ は復元値、*は残存長

Tab. 2 鹿教保古手遺跡第2次調査A区 遺物調査表

4. 歳数保古手遺跡 第2次調査 (B区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字歳数保古手238-1に所在する。東方より八手状に広がる八女丘陵の谷部にあたり、標高10.8m位の低地に立地する。筑後北部地区県営ほ場整備事業(担い手育成型)筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、調査区は同小字内において2箇所を設置することとなったために西側調査区をA区、東側調査区をB区と称した。A区は上村英士、B区は小林勇作が調査を担当した。当調査区(B区)は、永久橋架物となる道路の拡張部分と遺跡確認範囲の約411㎡を対象範囲としてし字状に設定し、発掘調査は平成17年6月6日から同年9月5日の約3ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で随時行った。なお、重機による表土剥ぎは(有)福島重機へ、航空測量業務はアジア航測(株)へ委託した。調査の結果、溝・土坑・道路状遺構等の遺構が確認され、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

溝

2SD1 (Fig.25・Tab.28・29)

調査区北部に位置した東西方向の溝であり、途中、土坑状に拡張する箇所を確認した。溝の長さは15.0m、幅0.60~1.03m、深さ0.33mを測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、溝底はほぼ平坦な状態を呈する。上位層は黒茶色粘質土、下位層は灰色砂がレンズ状に堆積し、一定の流水を伴っていた可能性が考えられる。もう一方で検出した土坑状に拡張した部分は、長軸2.62m、短軸1.83m、深さ0.83mを測り、溝より下位の壁坑はオーバーハング気味に抉られていた。遺構内下半の壁面は灰色砂利を呈する地山で脆く、流水に伴って崩落したためと考えられる。遺構の機能としては一般的に流水路(2SD1)を利用した灌漑的施設であったことが推測されるが、この他の様々な要因も考えらる。2SD1から弥生土器(甕・片)を認めている。

流路

2SX2 (Fig.25・Tab.30・31)

調査区中央部に検出した東西方向の溝である。南部の溝(2SX3)及び下位の道路状遺構(2SF5)を切るように確認され、幅約5.40m、遺構検出面からの深さ0.32~0.90mを復元する。土層観察では上位層に比較的安定した粘質土が堆積していたが、下位層においては砂や砂利が混入した砂質土の発達層が見られた。また、溝底では筋状にはしる溝状遺構が認められるなど荒れた状態を呈していたことから上流からの多量の流水があったものと推測される。溝底は北部側が一段と深くなっており、レベル差異は概ね0.60m前後を測る。遺物では上位層の黒色粘土で弥生土器(甕)、須恵器(坪・甕・片)、土師器(坪・高坪・甕・壺・片)、瓦器(碗)、白磁(片)を認め、下位層の灰色砂では弥生土器(高坪・器台)、土師器(丸底坪・甕)が出土した。

2SX3 (Fig.25・Tab.30)

調査区南部で検出し、北部は溝(2SX2)に切られる。幅15.0m以上、遺構検出面からの深さは0.22~1.09mを測り、調査区南端部で溝南岸の立上りを確認する。土層観察では比較的安定した粘質土が上位層を覆い、下位層で砂質土層の発達を認めたが、溝底付近の一部では乳青灰色の沈殿層も認められた。溝底は筋状にはしる溝状遺構やピット状遺構を認めるなどの凹凸が著しい。2SX2と同様に上流から多くの流水が繰り返されていたものと思われる。遺物では上位層の黒茶色粘質土で弥生土器(甕・片)、土師器(高坪・片)を認め、下位層の砂質土では弥生土器(片)、土師器(片)が出土した。

不明遺構

2SX5 (Fig. 26・Tab. 33~38)

当遺構は調査区中央部で検出した溝路 (2SX2及び2SX3北西部) の下位で確認し、S-6~9で構成される。まず遺構の状況について述べる。遺構内北部にあるやや幅広い溝状遺構 (S-6) は、S字状に蛇行しながら、流路 (2SX2) とほぼ平行位を示すように東西方向へと走る。断面形は細やかなじ字状を呈するものであるが、遺構の幅や深さについては著しく変化がみられるなど不規則な状態であり、S-7は遺構内東側に位置した溝状遺構であり、南部は遺構内の途中で終息する。調査区域に存在しており、終息するのではなく方向を転換することも予測される。溝状遺構 (S-8) は東西方向に走り、東から西にかけて溝幅は細く、溝底は浅くなる。S-9はこれらの溝状遺構 (S-6~8) に挟まれた空間全体を示し、当遺構の埋土はFig. 26に示すように複雑な堆積状況を示す。埋土は砂礫コナが稠さらないほど表面が固く、強い圧力によるものなかなど土壌学的に硬化した状態も窺えた。この埋土の性質によるものなのか、上位から固く覆われており、部分的に硬化した状態も考えられるが土層断面からは言及しない。また、更に西部においては小石や礫が散在する。両西部から多くの小ピット状並びに土坑状の痕跡を著しく認め、更に埋土を除去した遺構底面では、両西部から多くの小ピット状並びに土坑状の痕跡を著しく認め、更に遺構レベルは一連の溝状遺構と同じく西高東低を呈する。出土遺物はS-6から僅かに弥生土器 (片) を認めただけである。

(3) 出土遺物

流路

2SX2様出面採集 (Fig. 24・Tab. 39)

弥生土器

① 甕(1~4) 1は断面形が鐘先形口縁を呈する。2は上底を呈する底部細片で、底径6.0cmを測る。3は底径9.0cmを復元する。底部はやや粗く匂気味で土底を呈する。4は平底を呈した口縁部細片で底径8.0cmを復元する。底部から胴部にかけては滑らかな味に立ち上がる。

② 甕 (5) 底部細片で底径6.0cmを復元する。底部は平底を呈し、胴部へは徐々に立ち上がる。土師器

③ 環 (6~9) 6~9は丸底杯の口縁部細片で何れも断面形状のため調査不明である。6は口径12.0cmを復元し、口縁部はやや縮み上げる。7は器底が厚く、口径は12.9cmを復元する。9は口縁部がやや内側を呈する。

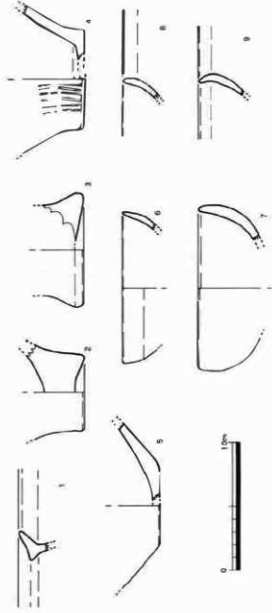
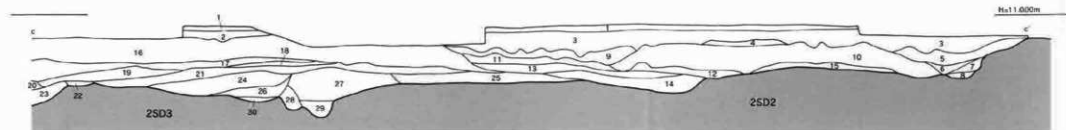
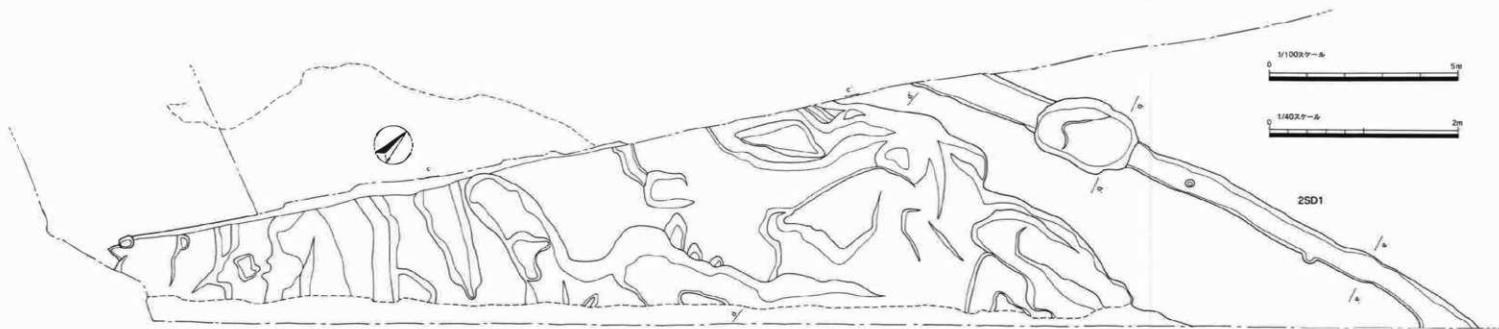
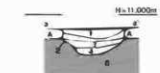


Fig. 24 流路 (2SX2様出面採集) 出土遺物測量図 (1/3)



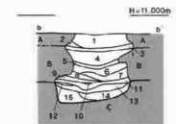
2SD2-2SD3

- | | | | |
|----------------|--------------|------------|------------|
| 1. 褐色砂質土(灰土) | 10. 黒褐色粘土 | 17. 黒褐色砂質土 | 23. 20と同じ |
| 2. 褐色砂質土(灰土層) | 11. 褐色粘土・灰色砂 | 18. 褐色砂質土 | 24. 黒褐色砂質土 |
| 3. 黒褐色砂質土 | 12. 褐色粘土 | 19. 褐色砂質土 | 25. 20と同じ |
| 4. 黒褐色砂質土(灰土層) | 13. 褐色粘土 | 20. 褐色砂質土 | 26. 黒褐色砂質土 |
| 5. 褐色砂質土 | 14. 褐色粘土 | 21. 褐色砂質土 | 27. 褐色砂質土 |
| 6. 褐色砂質土(砂中砂層) | 15. 12と同じ | 22. 褐色砂質土 | 28. 黒褐色砂質土 |
| 7. 褐色砂質土 | 16. 褐色粘土 | 29. 黒褐色砂質土 | 30. 20と同じ |
| 8. 7と同じ(砂中砂層) | 17. 褐色粘土 | | |
| 9. 褐色砂質土 | 18. 褐色粘土 | | |



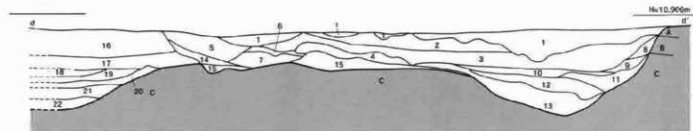
2SD1 北ベルト

1. 褐色砂質土
 2. 褐色砂質土(褐色粘土を少し含む)
 3. 褐色砂質土(褐色粘土を少し含む)
 4. 褐色砂質土(褐色粘土を多く含む)
- 地質A. 褐色砂質土
地質B. 褐色砂質土



2SD1 南ベルト

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 褐色砂質土 | 8. 褐色粘土 |
| 2. 褐色砂質土 | 9. 褐色粘土 |
| 3. 褐色砂質土 | 10. 褐色砂質土 |
| 4. 褐色砂質土 | 11. 褐色砂質土 |
| 5. 褐色砂質土 | 12. 褐色砂質土 |
| 6. 褐色砂質土 | 13. 褐色砂質土 |
| 7. 褐色砂質土 | 14. 褐色砂質土 |
| 8. 褐色砂質土 | 15. 褐色砂質土 |
- 地質A. 褐色砂質土
地質B. 褐色砂質土
地質C. 褐色砂質土



2SD2(1-15)-2SD3(16-22)

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| 1. 褐色砂質土 | 8. 褐色砂質土 | 15. 褐色砂質土 |
| 2. 褐色砂質土 | 9. 褐色砂質土 | 16. 褐色砂質土 |
| 3. 褐色砂質土 | 10. 褐色砂質土 | 17. 褐色砂質土 |
| 4. 褐色砂質土 | 11. 褐色砂質土 | 18. 褐色砂質土 |
| 5. 褐色砂質土 | 12. 褐色砂質土 | 19. 褐色砂質土 |
| 6. 褐色砂質土 | 13. 褐色砂質土 | 20. 褐色砂質土 |
| 7. 褐色砂質土 | 14. 褐色砂質土 | 21. 褐色砂質土 |
| | | 22. 褐色砂質土 |
- 地質A. 褐色砂質土
地質B. 褐色砂質土
地質C. 褐色砂質土

Fig.25 溝 (2SD1)、流路 (2SX2・3) 実測図 (1/40・1/100)

2SX2黒色粘土 (Fig.27・Tab.39~41)

弥生土器

甕 (10~12) 10・11は「く」字状に口縁を呈し、11は口径9.9cmを復元する。12は平底を呈する底部細片で底径10.0cmを復元する。

氣惠器

坏 (13) 底部細片で底径7.6cmを復元する。外底部は回転ヘラケズリ、内面はナデである。

甕 (14) 肩部の細片で、外面に平行叩き文、内面上位にヨコナデ、下位に同心円文を施す。

土師器

坏 (15~22) すべて丸底坏である。著しく磨耗した破片が多く、調整痕は判別できた範囲で記す。15は手捏ね土器で口径3.2cm、器高2.1cmを測る。16は口縁部の一部が歪んでおり、口径は最大で14.0cmを復元する。器内は厚く、やや深めの坏で器高は7.1cmを測る。底部は手持ちヘラケズリ後ミガキを施す。17はやや内傾した口縁部を呈し、口径14.0cmを復元する。口縁部外面はヨコナデを施す。18はやや深みのある坏で口径14.8cm、器高6.0cmを復元する。口縁部は傾きに内傾する。19は口径15.0cm、器高5.75cmを復元する。底部外面は手持ちヘラケズリ、口縁部外面及び内面はミガキを施す。20は厚手でやや内湾した口縁部を呈し、口径16.2cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。21は口径16.9cmを復元する。内面及び底部外面上位は丁寧なミガキ、口縁部外面はヨコナデ、底部外面下位は手持ちヘラケズリを施す。22はやや内傾した口縁部を呈し、口径17.1cmを復元する。

甕 (23) 口径15.4cmを復元する。口縁部は緩やかに外反し、口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面は横方向の刷毛目、肩部内面はケズリを施す。

甕 (24~26) 24は外方へ湾曲した口縁部を呈し、内外面はミガキを施す。口径は12.0cmを復元する。25はラッパ状に立上がる口縁部を呈し、口径9.6cmを復元する。内外面はミガキを施す。26は胴部細片で胴部最大径は16.3cmを復元する。内面はケズリ、外面は刷毛目を施す。

高坏 (27~31) 27は坏部の細片で坏部は丸みを帯びる。著しく磨耗しており、調整不明。28~31は脚部破片であり、28は脚部径8.9cm、29は脚部径9.2cm、30は脚部径9.5cm、31は脚部径11.2cmを測る。何れも器面磨耗のため調整不明である。

甕 (32) 把手部はナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデの調整を施す。

瓦器

埴 (33) 底部細片で高台径7.3cmを復元する。胎土は微砂粒を多く含み、表面は磨耗のため調整不明である。

白磁

埴 (34) 体部細片で淡灰白色の素地に淡灰白色釉を内面に施す。外面は露胎でケズリの調整。

2SX2灰色砂 (Fig.28・Tab.41・42)

弥生土器

甕 (35・36) 35は外方へ湾曲した口縁部を呈し、口径12.4cmを復元する。36は「く」字状を呈する口縁部破片で口径14.0cmを復元する。共に磨耗のため調整不明である。

土師器

坏 (37~42) 37~41は丸底坏である。38は口径14.4cmを復元し、口縁部はやや肥厚する。39は口径14.5cmを復元し、底部外面は手持ちヘラケズリを施す。40は口径15.0cmを復元し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は丁寧なミガキ、体部外面は手持ちヘラケズリ後一部ミガキを施す。41はやや内傾した口縁部を呈し、口径16.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は不定方向のナデ、体部外面は手持ちヘラケズリを施す。42は口径15.6cm、底径8.8cm、器高4.0cmを測る。口縁部内外面及び体部外面はヨコナデ、体部内面は不定方向のナデ、底部外面は糸切り後ナデを施す。

甕 (43・44) 43は「く」字状に屈曲した口縁部を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はケズ

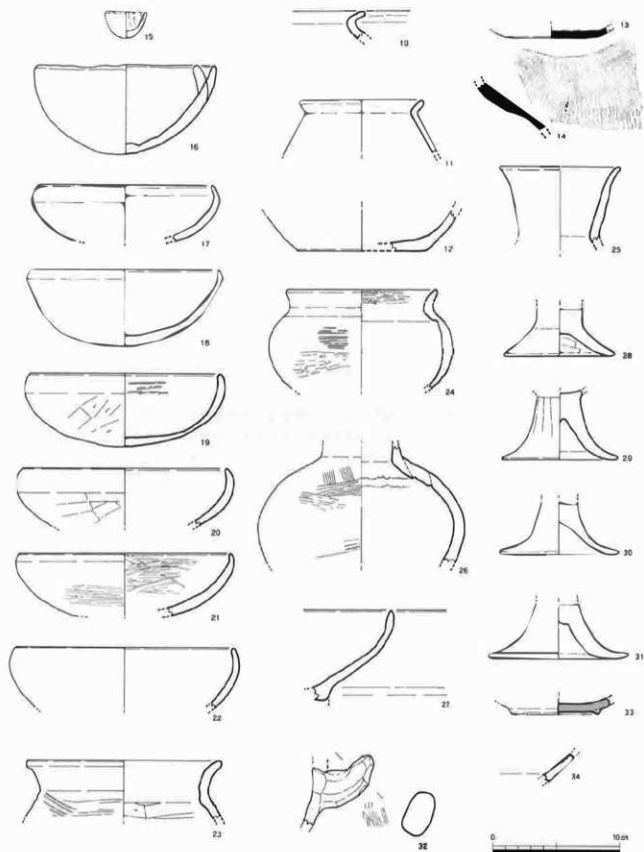


Fig.27 流路 (2SX2黑色粘土) 出土遺物実測図 (1/3)

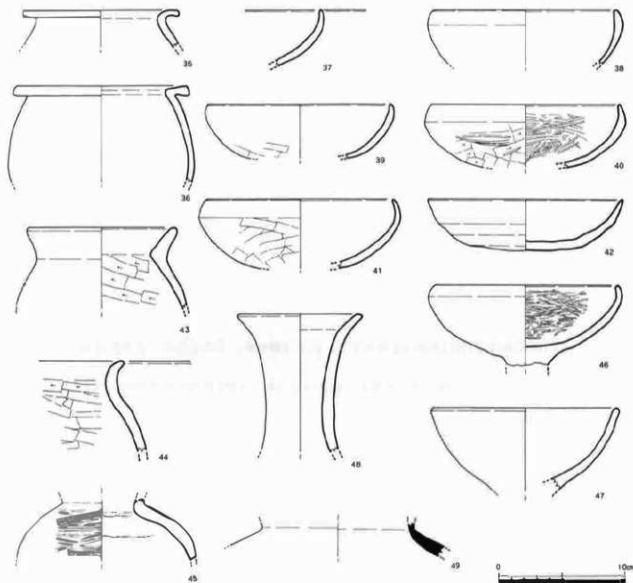


Fig.28 流路 (2SX2灰色砂) 出土遺物実測図 (1/3)

リを施す。体部外面は磨耗のため調整不明。44は緩やかに外反する口縁部を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はケズリ、体部外面はナデの調整を施す。

壺 (45) 肩部の細片で外面は横方向の刷毛目を施す。内面は粘土接合痕跡を認めるが磨耗のため調整は不明である。

高坏 (46・47) 共に丸みを帯びた坏部の破片である。46は口径14.65cmを測り、内面には丁寧なミガキ痕が残る。外面は磨耗のため調整不明。47は口径15.0cmを復元する。胎土に微砂粒、石英、角閃石、雲母を含む。磨耗のため調整不明。

器台 (48) 口径10.0cmを測る。磨耗のため調整不明で胎土は微砂粒、石英、角閃石を含む。

須恵器

甕 (49) 肩部細片で外面に自然釉がかかる。胎土は微砂粒を多く含み、色調は淡灰色を呈する。

2SX3 (Fig.29・Tab.42)

弥生土器

甕 (50・51) 50は上底を呈する底部細片で底径4.4cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデを施す。

51は平底を呈する。表面磨耗のため調整不明。

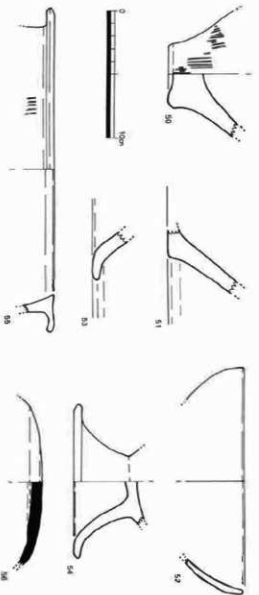


Fig. 29 流鏑 (2SX3)、カケラン、養土出土遺物実測図 (1/3)

土俵器
 杯 (52) 口縁部細片で口径18.0cmを復元する。胎土は微砂質、石炭を含み、表面は磨耗のため調整不明である。

高杯 (53・54) 53は脚端部の細片で、胎土は微砂質を含む。54は脚部の長さが短いタイプで脚部径は12.2cmを測る。表面磨耗のため調整不明。

カケラン (Fig. 29・Tab. 42)

弥生土器

鏑 (55) 口縁部細片で脚先形口縁を呈する。口径25.6cmを測る。

養土 (Fig. 29・Tab. 42)

乳頭器

杯 (56) 天井部細片で外面は回転ヘラケズリ、内面はココナデである。

(4) 小結

今回は狭小の調査区設定にもかかわらず溝1条、流鏑2条などの遺構に加え、弥生時代から古墳時代、中世の遺物を得ることができた。

調査区北部で確認された溝 (2SD1) と流鏑 (2SX2・3) は、東西方向に走るものである。調査中、付近に住む男性が現堀へ立ち寄り、「雨期になるとこのあたり (現堀南側) は昔から水溝が氾濫して一気に水没してしまうほど水が集中する場所だよ」と話されていた。当地は北部並びに南部に展開する八女丘陵に挟まれた谷地にあたる。先の話から予てよりこの地形的作用による影響を受けていたことが窺い、知るべきでき、輸出された一連の流水溝は地形的作用を多分に受けて自然派生した遺構であると考えられる (当調査区西側にあたる歳数保古手遺跡1次並びに2次C区の調査区からも同様の溝・流鏑を検出している)。流鏑 (2SX2・3) 下層からは5C後半を主体とする遺物を出上しており、当該遺構を遺構形成時期下限としておきたい。上層では瓦器、自磁等の遺物を含んでおり、埋没に至るまでには相当の期間があったものと思われる。

流鏑下位より検出した2SX5は、遺構の残存状態から流鏑とは関係のない別の遺構としての見方を強めて調査を進めたところであったが、遺構の機能や性質を判断することができず今回は不明遺構として報告するに留まった。しかし、当該遺構を構成する溝状遺構 (S6~8) 並びにこの遺構に挟まれた空間 (S9) を含む各パーツを同一時期の所産で意図的に構築された遺構であったと想定すると、道路状遺構に類似するところが見られる。2SX5と道路状遺構との接点について、少々乱暴ではあるが当該遺構

を道路状遺構のパーツに当てはめた場合、「①遺構全体 (S-6~9) = 切り通し、②溝状遺構 (S-6~8) = 開溝、③硬化した埋土及びその空間 (S-9) = 路面」と置き換えることができる。道路の認定とタイプについては山村氏著書の「大宰府周辺の道路状遺構 (註1)」が著名であるが、その充分条件として「1.路面と認定できる状況、切り通しにみられる道路状遺構に舗装や硬化面を伴うこと 2.切り通し、土塁 (土橋)、橋梁や側溝などの関連施設を伴うこと 3.轍跡などの通行を示す痕跡を伴うもの 4.一定距離をおいて2地点以上で存在が確認できること」をあげている。当遺構はこの充分条件に対して1及び2に関しては概ね満たされているものと考えるが、以下の2項目の内容については立証できていないのが現状である。当遺構を流路が形成される段階から埋没過程に至るまでの痕跡である可能性も否定できないために道路状遺構として判断するにはより一層の条件提示が必要であると考え。今後の調査事例が期待される。

【引用文献】

註1 山村信泰「大宰府周辺の道路状遺構」 九州考古学報46号 徳山園 (1)94

5. 歳数保古手遺跡 第2次調査 (C区)

1) はじめに

当遺跡は筑後市歳数保古手に所在して、調査区は水路新設予定地のために南北75m、東西6mと南北に細長く、「J」型児童本線の西側に隣接平行して位置し、標高11.3m～11.5mの低地に立地している。調査区中央には水堀が走り、残っているために北側調査区、南側調査区と本文では表記している。平成17年6月27日より(有)福島重機に表土を除去を委託し、調査を開始した。その際に「J」形状の降接地のために重機が動く間、列車の安全と事故防止として監視員を(株)にしけいに委託した。また、同「観出によりラジコンを使用して行う航空測量をとりやめ、手測りによる平面図作成を(株)アジア航測に委託した。同年8月31日に(有)空中写真企画に委託した空中写真撮影をもって調査は終了となった。

2) 検出遺構

2SD01 (Fig.31・Pla.43)

北側調査区北端で検出された若干カーブを描きながら東西方向に走る溝である。規模は幅0.6m、深さ0.2mで断面は楕円かな字形状を呈する。土師器の破片が出土したが陶化出来るレベルではなく、また時期不明である。

2SD05・2SD06 (Fig.31・Pla.44)

北側調査区で検出された東西方向に走る溝である。調査区東側では地山を挟んで北側の幅10mと南側の幅8mで検出したのだが、西側部分ではそれらが合流しており明確に分けることが出来なかった。北側の幅10mの方を2SD05、南側の幅8mの方を2SD06とそれぞれ遺構番号をつけたのだが土層図(Fig.31)を見ると粗い砂粒やシルトなどが堆積しているために自然流路であることが分かる。またそれぞれが判別できていた、堆積を繰り返していたり、谷地点周辺は西側に陥入って幅高が低くなるために東側より流れ、水がSD05、SD06を通り調査区内で合流したのであろう。また、2SD05内で幅1.5mの調査区外に延びているため溝が土坑か不明な遺構を2SD05a、幅1mの粗い溝が2SD05bと細分して表記してある。

2SD08 (Fig.31・Pla.46)

南側調査区北端で「く」字状に検出された。幅約2m、検出面よりの深さ0.8mを測る。遺構内の中位がオーバーハンングしており(Fig.31)流路であった事が伺える。遺物は土師器の破片が出土したが陶化出来るレベルではなかった。

土坑

2SK03 (Fig.30・Pla.43)

北側調査区で検出し東側調査区外に延びていく。長さが約2.2m、検出面よりの深さが0.15mと浅い土坑である。遺物は土師器の破片が出土したが陶化出来るレベルではなかった。

2SK04 (Fig.30・Pla.44)

北側調査区南側のSK03より南側で検出された幅約2.0m、検出面よりの深さが0.4mを測る。長楕円形を呈する土坑であるが南側を攪乱により削平されている。断面形態はすり鉢状を呈しているが、中心部で一部下がっている。

2SK07 (Fig.32・Pla.46)

南側調査区の北端で検出された不定形を呈する大型の土坑である。一部は西側調査区外に伸びており、深さは検出面より0.2mを測る。また、この土坑は2SD08を切っている。

2SK09 (Fig.32)

南側調査区で検出し東側調査区外に伸びていく。長さが約2.1m、検出面よりの深さが0.5mを測る土坑である。遺物は土師器の細片が出土したが図化出来るレベルではなかった。

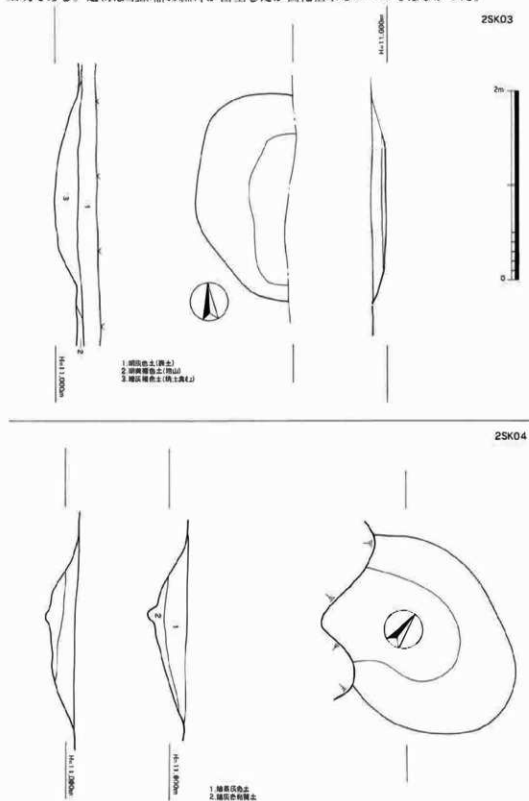
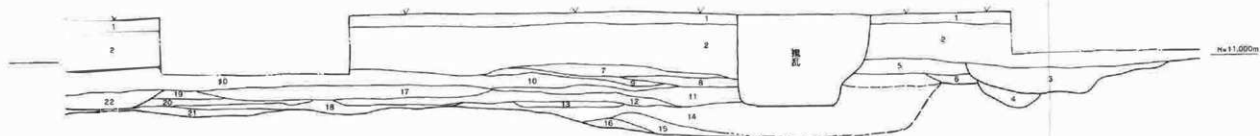
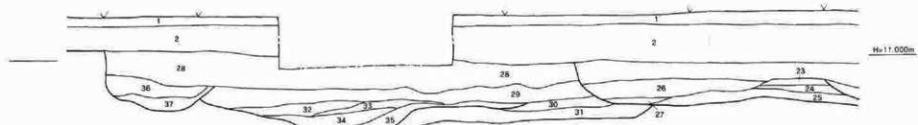


Fig.30 2SK03・2SK04 遺構実測図 (1/40)



1. 褐色粘土(粘土)
2. 褐色粘土
3. 褐色粘土
4. 褐色砂質粘土(粘土)
5. 褐色砂質粘土
6. 褐色砂質粘土
7. 褐色砂質粘土
8. 褐色砂質粘土(粘土)
9. 褐色砂質粘土
10. 褐色砂質粘土
11. 褐色砂質粘土(粘土)
12. 褐色砂質粘土
13. 褐色砂質粘土
14. 褐色砂質粘土(粘土)
15. 褐色砂質粘土
16. 褐色砂質粘土(粘土)
17. 褐色砂質粘土
18. 褐色砂質粘土(粘土)
19. 褐色砂質粘土(粘土)
20. 褐色砂質粘土(粘土)
21. 褐色砂質粘土
22. 褐色砂質粘土
23. 褐色砂質粘土
24. 褐色砂質粘土
25. 褐色砂質粘土
26. 褐色砂質粘土(粘土)
27. 褐色砂質粘土(粘土)
28. 褐色砂質粘土
29. 褐色砂質粘土(粘土)
30. 褐色砂質粘土
31. 褐色砂質粘土(粘土)
32. 褐色砂質粘土
33. 褐色砂質粘土
34. 褐色砂質粘土
35. 褐色砂質粘土
36. 褐色砂質粘土
37. 褐色砂質粘土



2SD05 土層図



2SD01 扇状土層図



2SD08 扇状土層図

1. 褐色粘土
2. 褐色砂質粘土(粘土)
3. 褐色砂質粘土
4. 褐色砂質粘土
5. 褐色砂質粘土
6. 褐色砂質粘土
7. 褐色砂質粘土(粘土)
8. 褐色砂質粘土(粘土)
9. 褐色砂質粘土
10. 褐色砂質粘土



2SD08 ベルト土層図

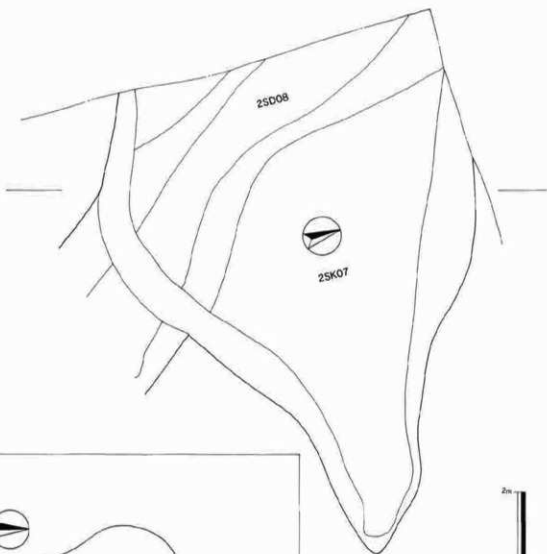
灰白色粘土質
褐色粘土質

1. 褐色粘土
2. 褐色砂質粘土
3. 褐色砂質粘土(粘土)
4. 褐色砂質粘土
5. 褐色砂質粘土(粘土)
6. 褐色砂質粘土
7. 褐色砂質粘土
8. 褐色砂質粘土
9. 褐色砂質粘土



Fig.31 保古手2C土層図

2SK07



2SK09

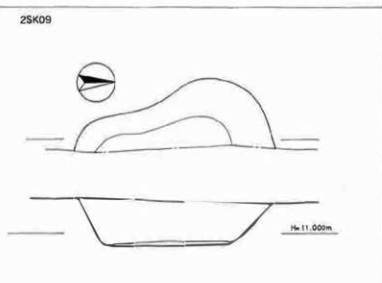


Fig.31 2SK07・2SK09遺構実測図 (1/40)

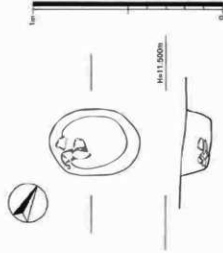
ビット

2SP02 (付図)

2SD01を切っている幅0.3mを測る円形ビットである。出土遺物は土器の細片が一点出土しただけであり時期などは不明である。

2SP11 (Fig.33・Pla.47)

南陽調査区に位置し長軸0.5m、短軸0.35m、深さは出土面より0.15mを測る。平面はやや扇円形を呈している。遺物底部に遺物が良好な状態で出土していたが覆土すると土の口縁と高杯の脚部であった。



不明遺構

2SX10 (付図・Pla.48・49)

南陽調査区内で遺構全体図(付図)に破線で囲まれている範囲内に細かな凹凸面があり、そこから遺物が出土したため遺構番号をつけたのだが凹凸の深さは非常に浅く不定形に広がっているが、そのためこの範囲だけを破線で図化した。

3) 出土遺物 (Fig.34・35・Pla.50・51)

2SD05 (1)

葉もしくは鉢の底部である。磨耗が激しく調整痕が見えない。

2SK04 (2・3)

2は土師器の鉢である。外面中に強いヨココナデを施し外側に置きながら立ち上がる。3は白磁の碗である。体部外面下半が露胎を呈しており足部分には沈線が施されている。

2SK07 (4~7)

4は土師器の鉢と思われる。製元による厚み底厚は14.0cmと大厚であり外面には細い工具を使用したと思われる回転アズリ痕が残っている。底部切り直しは糸切りによる。5は鉢である。鋳先口縁を呈しているがローリングによる磨耗がひどく、SD08に帰属する遺物だと思われる。6は白磁の皿である。体部外面下半が露胎を呈している。7は権鉢である。内外面は暗茶褐色を呈する。1単位10本の磨り目を施す。

2SX10 (8・9)

8・9どちらも蛇ノ目軸刺ぎを施し、体部外面が高台縁から下半が露胎を呈している白磁碗である。8は9よりも量付け部分が幅広く、復元底径が大きいため8・9は別個体である。

2SP11 (10・11)

10は鉢である。体部は外面に縦方向のハバ調整、内面は斜め方向にケズリを施す。口縁部は外側に直線的に置き、全体的に器壁は薄く、シャープである。11は高杯の脚部である。脚部上端部は割れ口ではなく成型状態で残存しているために杯との接合は杯の底部をソケット状に施し接合したと思われる。しかし、杯部分は出土しておらず、杯との接合部分の接合は不明瞭であった。

表掘 (12~18)

12~14は葉の口縁部片である。磨耗が激しく調整痕は看取されない。15は葉の底部である。底部中央を窪ませてあるが、磨耗が激しく調整痕は看取されない。16は白磁の底部である。高台縁から高台内面は露胎であり見込みには貫入が入る。17は三足もしくは4足のハマか中央が円孔してあり足の端部にはガラス状の管が付着する。18(附.35)は明色を呈する鉛ガラス製の管玉である。

Fig.33 2SP11 出土状況 (1/20)

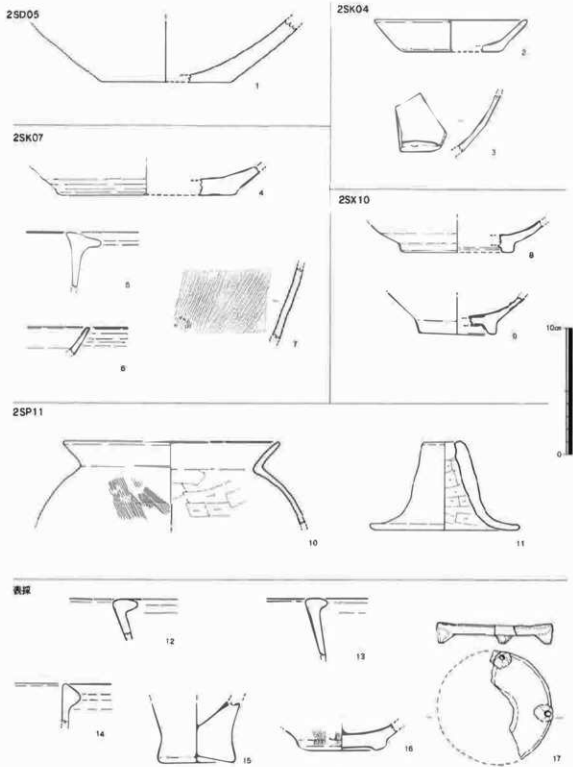


Fig.34 蔵敷保古手2次C出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	色調
1	土師器鉢	—	(10.0)	—	底部1/2	淡灰茶色
2	土師器杯	(12.1)	(7.5)	2.4	1/3	淡橙茶色
4	土師器杯	—	(14.0)	—	底部1/3	暗茶褐色
8	白磁碗	—	(9.0)	—	底部1/3	淡緑白色
9	白磁碗	—	(6.0)	—	底部1/2	淡灰白色
10	土師器壺	(17.0)	—	—	口縁部1/2	淡橙茶色
11	土師器高杯	—	11.8	—	脚部のみ完形	明茶色
16	白磁碗	—	(7.1)	—	底部のみ	灰白色
17	ハマ	—	(9.0)	1.5	1/2	淡灰茶色
ガラス製品		全長	幅	残存	色調	
18	管玉	2.45	0.9	完形	明青色	

※小片は省略 ()内は 復元による数値

Tab.3 出土遺物一覧表

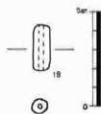


Fig.35 表探出土遺物 (1/2)

(4) 小結

今回調査をした水遺跡は、新幹線建設に伴い発掘調査を実施した成教保古手遺跡1次調査区の線路を挟んだ西側に位置している。1次調査区の続きと思われる遺跡が2次調査C区でも検出されたのでそれら遺跡の対応関係をみてみると(図36)、まず、1次調査区SD01の続きである溝は、今回遺跡の出土がないために遺跡番号を付けていないなかつた南側調査区の南端を東西に走る溝に続く。この溝も丘陵に沿って走っているためにSD01と状況が同じである。2SD08は第1次調査区西面を見るとSD10、SD15どちらかにか該当するものと思われるのだが、遺物の出土状況、土層の堆積状況、オーバーハンドしている溝の断面形状からSD15に該当すると思われる。古墳時代の遺物を多く含んだ自然流路であったSD10は2次調査区では検出しなかつたためにそのまま線路の下を土籠1に扱っていたのだろう。また、2SD05、2SD06の自然流路は1次調査区の北側に破線で囲んだ範囲に該当するものと思われる。この破線で囲んだ範囲はSD15と埋設土色が同じであり自然流路と判断し未掘のまま範囲だけをおさえた箇所である。1次調査区では谷地形の一番低い場所にあたる。

今回の調査では遺物量が少なかつたが、表土ながら菅玉が出土しているし、1次調査では透かしの入る高杯の脚部が出土している。このことから八女丘陵の高い位置からかなりの水量を伴って谷に流れていたものと思われる。

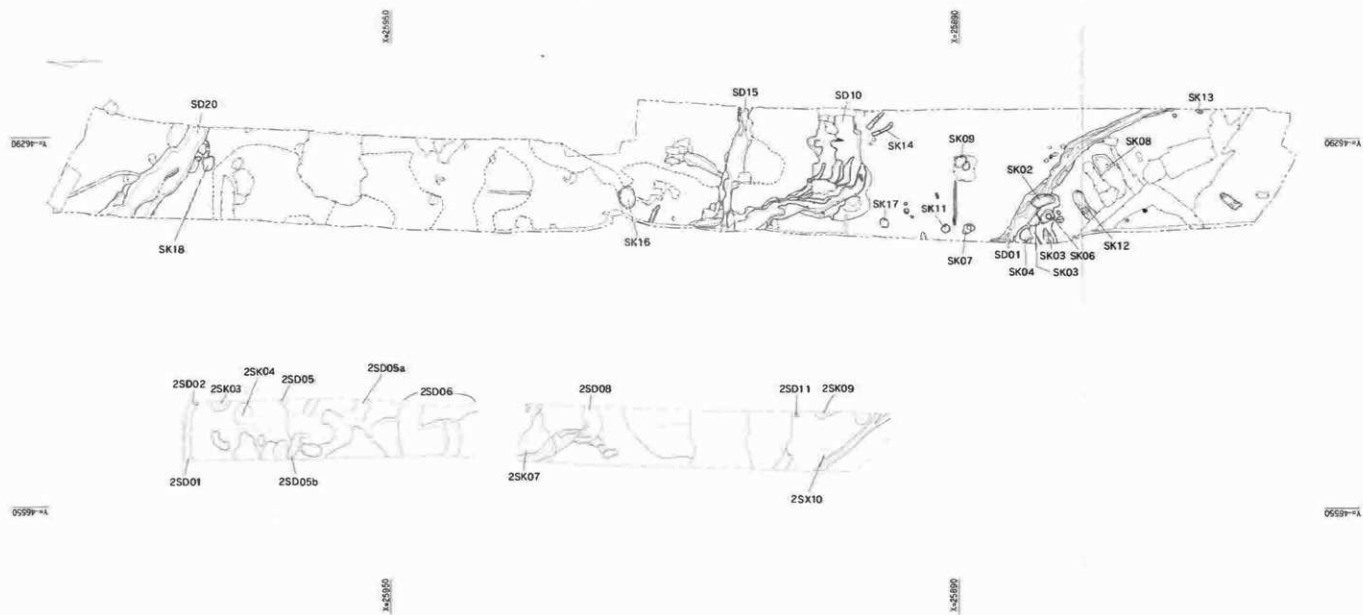


Fig.36 葦数俣古手1次、2次遺構配置図 (1/400)

6. 歳数三郎丸遺跡 第1次調査

(1) はじめに

当遺跡は京後市大字歳数三郎丸404-2・408に所在する。当調査区の北部は標高9.1m前後、南部は8.8m前後と徐々に西部へ向かって下がっており、当地には東方より八手状に広がる八女丘陵南斜面にあたる谷部に近い場所に位置する。京後北部地区県営は場整備事業（相い手有成型）京後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、着設される水路によって成壊を受ける約661㎡を調査対象範囲として発掘調査を実施し、小林明作が担当した。

調査区は南北方向に細長く設定した。発掘調査、造成17年8月30日から同年9月16日の間実施し、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構測尺・実測作業・写真撮影を行った。重視による表土剥ぎでは（付）福島重機へ、航空測量業務はアジア航測（株）へ委託し、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で同時行った。調査の結果、溝等の遺構の他に不明遺構（牛嶋歩行痕跡?）が前認され、出土遺物では弥生土器・須恵器・土師器・磁器等を得た。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

溝

1SD1 (Fig.37・Tab.53)

調査区北部で検出した東西溝であり、長さ4.30m、幅0.53～0.87m、深さ0.15mを測る。溝の断面形は概ね楕円か凹凸字状を呈し、溝の北端の一部が突出してテラス状を呈する。土層に淡灰茶色土、下層に暗灰茶色砂質土が堆積することから、溝は成壊水を作っていたものと思われる。出土遺物は土師器（小皿）を認めており、中世に比定される。

1SD2 (Fig.37・Tab.53)

調査区南部で検出した東西溝である。溝の断面形はV字状を呈し、長さ4.43m、幅0.70～1.47m、深さ0.35mを測る。溝中の南岸側に多くのテラスを呈し、底部は東高西低で0.1mの差異を生じる。灰茶色砂質土を基調とする埋土が厚く堆積しており一定の排水量があったものと思われる。出土遺物は弥生土器（片）、須恵器（鉢）を認めており、中世期の溝であったと考えられる。

1SD3 (Fig.37・Tab.54)

調査区南部で検出した南北溝で、南方へ向かって著ち込む。調査区南端部の落ち込みは縦数長約40mで検出された河川跡（1SX1）の北岸部にあり、より水路として機能していた可能性が考えられる。長さ6.50m、幅0.55～0.75m、深さ0.08mを測り、埋土は淡黒茶色砂質土である。出土遺物に思われておらず、假令（付）弥生土器片）を認めたのみで埋設時期については不明である。

不明遺構 (付圖・Tab.54)

今回、不明遺構とした小ピット群は調査区北部で確認された。小ピットの径は10～15cm程度であり、形状は楕円形・不規則形・多角形・連続状などの変化に富み、底部は凹凸状・著しいものや平坦であるなど規則性に欠ける。地山である乳黄白色土層に埋没した埋土を基調とするが、土層によって変化したものもある。群集となった範囲では小ピットが概ね北東-南西方向に密集して筋状を呈している観があり、一定の規則性があったものと思定される。小ピット群からは土師器（土鍋・片）の遺物が出土しており、近世の所産であると思われる。

(3) 出土遺物

溝

1SD2 (Fig.38・Tab.55)

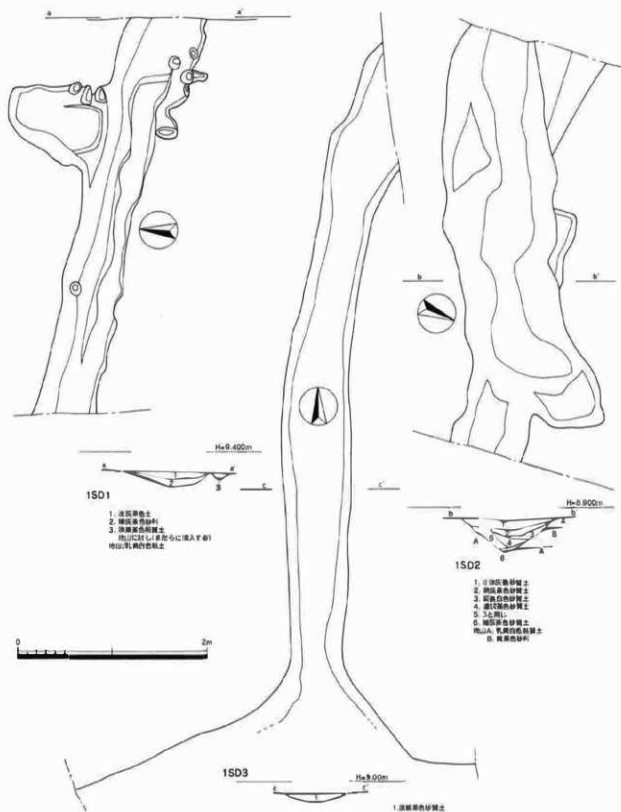


Fig.37 溝 (1SD1~3) 実測図 (1/40)

須恵器

鉢 (1) 玉縁状を呈した口縁部細片である。焼成不良で胎土に微砂粒・石英を含み、色調は淡茶灰色を呈する。

不明遺構 (Fig.38・Tab.55)

土師器

土鍋 (2・3) 共に口縁部細片で玉縁状口縁を呈する。3は口縁部から外面にかけて灰が付着する。

灰土 (Fig.38・Tab.55)

白壁

碗 (4) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。淡灰白色の赤地に淡灰白色軸を内面及び外面に施軸するか高台部は露胎である。高台部は厚り出しが残く、器内も厚く、大宰府編年Ⅳ類に属するものと思われる。

(4) 小鉢

今回の調査で検出された遺物は、前及び不明遺物であり、例ながら古代からの出土遺物を得られたことは成果であった。

先述したように器 (ISD1・2) は申世に比定される東西遺物であり、何れも理上に砂を含む泥層が覆えたことから水路として機能していた可能性が考えられる。また、調査区南端部で検出された落ち込みは盛数長政町遺跡で確認された旧河川跡と想定され、この落ち込みに対して接続するISD3についても排水を伴う水路として機能していたと思われる。なお、ISD2は断面形がV字状を呈することから区画溝としての可能性も考えられるので追記しておきたい。

調査区北部で検出した不明遺物は、径10～15cm程度を測る小じつた範囲内においては筒状に集中している箇所があるなど一定の規則性が認められ、遺物の履版や形状・遺構残存状態等から想像すると水田の囲壘や耕作時の際に牛や馬に牽かせる一連の作業によって生じた歩行痕跡と推測され、当地が耕作地として土地利用をされていたものと解される。牛馬等歩行痕跡については、昨年度実施した熊野宮ノ後遺跡においても確認されている。

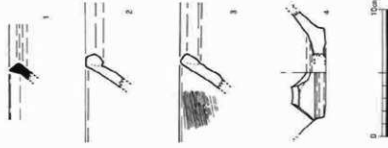


Fig.38 出土遺物実測図 (1/3)

7. 歳数長軟遺跡 第1次調査 (A区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市歳数長軟町に所在しており、標高10.9mの低地に立地している。調査区は水溝新設予定地のため南北40m、東西5m及び南北3.5m、東西38mの「J」字に設定し、表土を除去を(行) 加蓋重機に委託し、調査を開始した。10月20日の空中写真撮影を(行) 空中写真企画に委託し、調査を開始した。10月21日に(株) プラザ航測に委託した航空写真をもって調査は終了となった。尚、本調査区は河北留土副が担当し、西側に位置している歳数長軟遺跡第1次調査田区を小林勇介が担当した。

2) 検出遺構

河川跡

ISX01 (Fig.40・Pla.56)

この遺構は「J」字状調査区の南北に長い調査区北側で広く検出された遺構である。しかし、明らかな埋土の進入溝が確認されたためにISX01を細分しISX01a、ISX01bとした。ISX01aは幅1.25mの走行しながら東西方向に走る溝である。ISX01bは幅8mの東西に走る溝である。これらはすべてISX01内に重複しており、また、ISX01を河川と判断した理由としては検出幅が14.5mと幅広く、西側の中間状に地山が残っている溝部分を含めると17mを測る。また、傾斜のために「J」字状にトレンチを入れ順序を調整すると砂や砂利、細砂船が互層に堆積しているために河川跡と判断し完結はしなかった。そのために未埋の部分はや脚で表記している。B区で検出されたこの河川跡の続きはISX02である。

自然流路

ISD02 (Fig.39・40・Pla.57・58)

ISX01の南側で検出した幅4mの東西に走る流路である。この流路を切って竹製堰を築出した(Fig.39)。この堰築は昭和の前半代に水田の増水施設として作られたもので調査区の中で数本確認された。このISD02もB区のISD02として検出されている。

土坑

ISK03 (付図)

ISK01aを切っている長軸1.0m、短軸0.5m、深さ0.04mを測る楕円形の浅い土坑である。

溝

ISD04 (付図)

東西に長い調査区で検出された浅い溝状遺構である。浅いために途中で切れている箇所もあるが、東西方向に走っており屈曲し北側の調査区外に抜けて行く。

出土遺物 (Fig.41・Pla.60)

1~4はISD02出土である。1は窯の口縁部で磨耗が激しく調査痕は不明である。2は窯もしくは鉢の口縁部である。3は鉢もしくは袋の底部である。4は窯の胴部であり三角形の突起が張り付けて

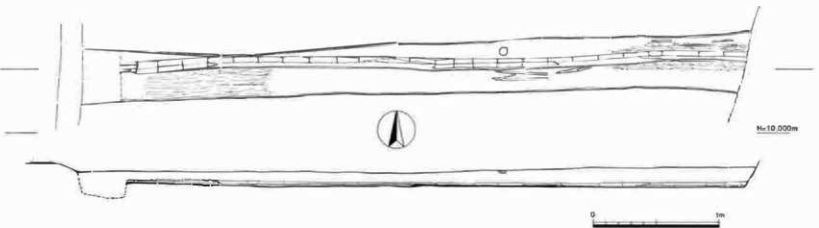
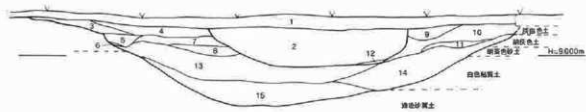
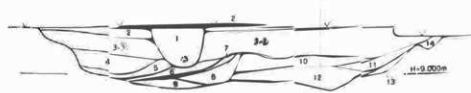


Fig.39 歳数長軟町A区SD02竹製堰 (1/30)



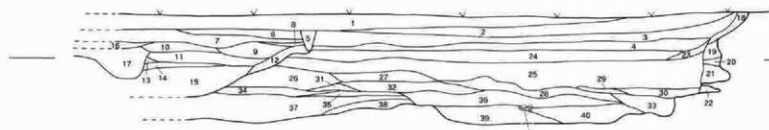
SX01 西野土層図

1. 褐色砂土
2. 褐色砂土層(厚さ不明)
3. 褐色砂土
4. 褐色砂土層(厚さ不明)
5. 褐色砂土
6. 褐色砂土
7. 褐色砂土
8. 褐色砂土層(厚さ不明)
9. 褐色砂土
10. 褐色砂土層(厚さ不明)
11. 褐色砂土層(厚さ不明)
12. 褐色砂土層(厚さ不明)
13. 褐色砂土層(厚さ不明)
14. 褐色砂土層(厚さ不明)
15. 褐色砂土層(厚さ不明)
16. 褐色砂土層(厚さ不明)



SD02 西野土層図

1. 褐色砂土層(厚さ不明)
2. 褐色砂土層(厚さ不明)
3. 褐色砂土層(厚さ不明)
4. 褐色砂土層(厚さ不明)
5. 褐色砂土層(厚さ不明)
6. 褐色砂土層(厚さ不明)
7. 褐色砂土層(厚さ不明)
8. 褐色砂土層(厚さ不明)
9. 褐色砂土層(厚さ不明)
10. 褐色砂土層(厚さ不明)
11. 褐色砂土層(厚さ不明)
12. 褐色砂土層(厚さ不明)
13. 褐色砂土層(厚さ不明)
14. 褐色砂土層(厚さ不明)



SX01 南北トレンチ貫層土層図

1. 褐色砂土
2. 褐色砂土
3. 褐色砂土
4. 褐色砂土
5. 褐色砂土
6. 褐色砂土
7. 褐色砂土
8. 褐色砂土層(厚さ不明)
9. 褐色砂土層(厚さ不明)
10. 褐色砂土層(厚さ不明)
11. 褐色砂土層(厚さ不明)
12. 褐色砂土層(厚さ不明)
13. 褐色砂土層(厚さ不明)
14. 褐色砂土層(厚さ不明)
15. 褐色砂土層(厚さ不明)
16. 褐色砂土層(厚さ不明)
17. 褐色砂土層(厚さ不明)
18. 褐色砂土層(厚さ不明)
19. 褐色砂土層(厚さ不明)
20. 褐色砂土層(厚さ不明)
21. 褐色砂土層(厚さ不明)
22. 褐色砂土層(厚さ不明)
23. 褐色砂土層(厚さ不明)
24. 褐色砂土層(厚さ不明)
25. 褐色砂土層(厚さ不明)
26. 褐色砂土層(厚さ不明)
27. 褐色砂土層(厚さ不明)
28. 褐色砂土層(厚さ不明)
29. 褐色砂土層(厚さ不明)
30. 褐色砂土層(厚さ不明)
31. 褐色砂土層(厚さ不明)
32. 褐色砂土層(厚さ不明)
33. 褐色砂土層(厚さ不明)
34. 褐色砂土層(厚さ不明)
35. 褐色砂土層(厚さ不明)
36. 褐色砂土層(厚さ不明)
37. 褐色砂土層(厚さ不明)
38. 褐色砂土層(厚さ不明)
39. 褐色砂土層(厚さ不明)
40. 褐色砂土層(厚さ不明)



SX01 東西トレンチ貫層土層図

1. 褐色砂土層(厚さ不明)
2. 褐色砂土層(厚さ不明)
3. 褐色砂土層(厚さ不明)
4. 褐色砂土層(厚さ不明)
5. 褐色砂土層(厚さ不明)
6. 褐色砂土層(厚さ不明)
7. 褐色砂土層(厚さ不明)
8. 褐色砂土層(厚さ不明)
9. 褐色砂土層(厚さ不明)
10. 褐色砂土層(厚さ不明)
11. 褐色砂土層(厚さ不明)
12. 褐色砂土層(厚さ不明)
13. 褐色砂土層(厚さ不明)
14. 褐色砂土層(厚さ不明)
15. 褐色砂土層(厚さ不明)
16. 褐色砂土層(厚さ不明)
17. 褐色砂土層(厚さ不明)
18. 褐色砂土層(厚さ不明)



Fig.40 長紋町A区 土層図

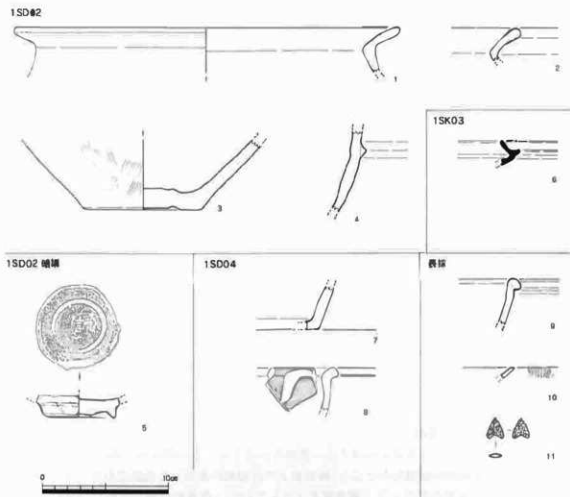


Fig.41 葦取長畝町A区出土遺物 (1/3)

NO	種類	口径	底径	器高	残存	胎土色調	釉調
1	土師器甕	(30.6)	—	—	口縁部1/4	淡灰茶色	
2	土師器甕	—	—	—	口縁部1/5	淡橙茶色	
3	土師器鉢	—	(9.5)	—	底部1/2	暗茶褐色	
4	土師器甕	—	—	—	底部1/3	淡灰茶色	
5	青磁碗	—	5.9	—	底部のみ	灰白色	明緑色
6	須恵器杯身	—	—	—	口縁部1/5	明灰色	
7	陶器不明	—	—	—	底部1/4	赤褐色	
8	陶器鉢	—	—	—	口縁部1/5	明灰色	黄緑色
9	陶器鉢	—	—	—	口縁部1/5	暗灰色	黒褐色
10	紅血	—	—	—	口縁部1/4	白色	白色
石製品	全長	幅	残存	材質			
11	石鏃	1.65	1.4	完形	黒曜石		

※()内は 復元による数値

Tab.4 出土遺物一覧表

いる。5は1SD02竹製暗渠から出土した青磁碗である。見込み部分は釉剥ぎを施し無釉である。また、同じく見込みには文様を描き、その内側に「諫」の字を入れる。6は1SK03出土の須恵器の杯身である。焼成が悪く明灰色を呈している。7・8は1SK04から出土し、7は陶器の不明品で内面に若干釉が付着する。8は陶器の鉢だと思われる。灰釉を基調とし白釉を掛け流す。9～11は表探である。9は褐釉を施した陶器鉢で、10は紅血、11は石鏃である。

(4) 小結

今回の調査ではA区、B区とも一連の遺構が検出している。それら一連の遺構は自然流路や河川跡であるのだが両調査区だけでなく、この周辺は流路が多くある。また、その埋没年代も中世まで下るものもあり生活痕と思われる遺構は検出されていない。

8. 歳数長敵町遺跡 第1次調査 (B区)

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字歳数長敵町219、220に所在する。東方より八手状に広がる八女丘陵の谷部にあたり、標高は9～10m位を測る。筑後北部地区駅営ほ場整備事業（担い手育成型）筑後北部地区平成17年度工事に係る発掘調査であり、新設される水路によって破壊を受ける約661㎡を調査対象範囲として発掘調査を実施した。調査区は同小字内において2箇所を設置することとなり便宜上、東側調査区をA区、西側調査区をB区と称し、A区は阿比留土朗、B区は小林勇作が調査を担当した。

B区は、南北方向に細長い調査区となり、発掘調査は平成17年9月5日から同年10月31日の約1ヶ月間実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は文化財整理室で同時行った。なお、重機による表土剥ぎは(有) 福島重機へ、航空測量業務はアジア航測(株)へ委託した。調査の結果、溝等の遺構が確認され、縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・石器等の出土遺物を得ることができた。以下は、発掘調査で確認された主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

河川跡

1SX1 (Fig.42・Tab.62～64)

当遺構は調査区の北部から中央部にかけて広い範囲で検出した。遺構検出後、調査区に沿って確認のためのサブトレンチを西側に設置したところ、検出面下では複雑に堆積した流路であることが判明した。そこで、調査はトレンチ幅を拡張して土層観察を主として行い、遺構検出面から約1.6m程掘り下げたところで地山と思われる礫層を確認した。調査区東側壁で土層を確認したところ溝は少なくとも6条以上が存在していたことがわかった。上位層では黒茶色粘質土が厚く堆積し、比較的安定した状態であったが、下位層では砂や砂利、砂質土が微しく入り乱れ、混在した状態であったことから河川の氾濫溝であったことが推測される。出土遺物は摩滅した縄文土器(片)、染付(片)、石器(削片)等を数ヶ所確認したのみである。

流路

1SD2 (Fig.43・Tab.65・66)

八女丘陵北袖部の麓にあたる調査区南部で検出された流路であり、丘陵に沿うように南東-北西に方向をとるものである。流路は蛇行した状態で検出され、断面形は概ね緩やかなU字状を呈する。溝底部は溝筋に沿って溝状に乱れており、部分的にピット状の凹凸痕を認める。上位層では安定した黒茶色粘質土が形成し、下位層では砂や砂利を多く含む砂層が発達していたことから相当な流量を伴った流路であったと考えられる。南岸西よりの溝底では自然流木を認め、遺物は弥生土器(甕・壺・片)、土師器(小皿・埴・甕・片)、瓦器(埴)、石器(石包丁・風石)等を出土した。

(3) 出土遺物

河川跡

1SX1 (Fig.44・Tab.67)

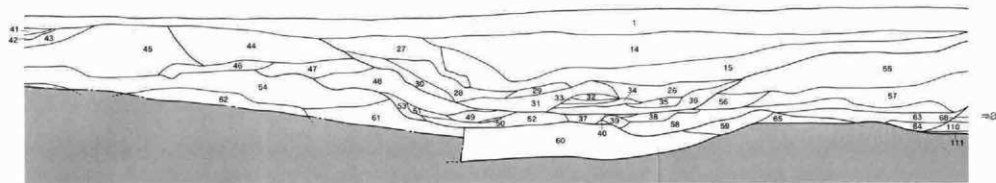
縄文土器

片(1) 胎土に1～2mm程度の砂粒及び石英・金雲母を含む。風化が著しくわかりにくいから、備かながら外面に貝殻痕を認める。

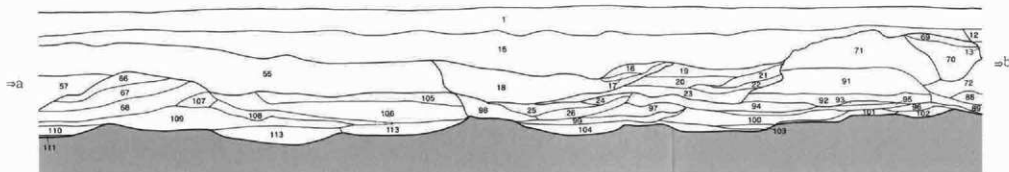
染付

皿(2) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。淡灰白色の素地に青みがかった淡灰白色釉を皿付け以外に施釉する。

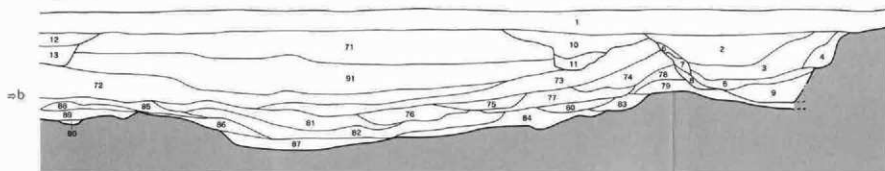
H=10,200m



H=10,200m



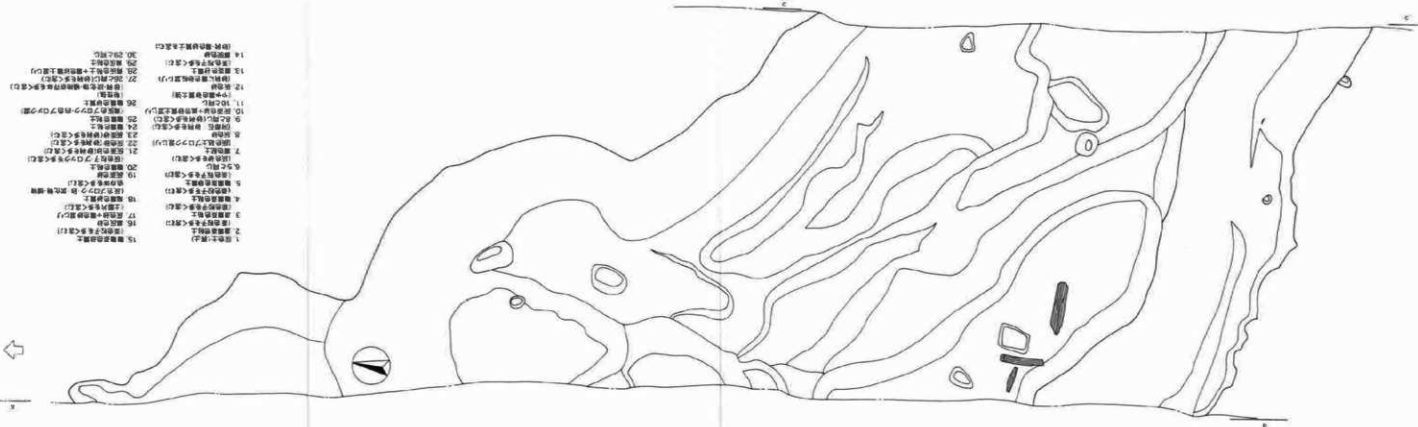
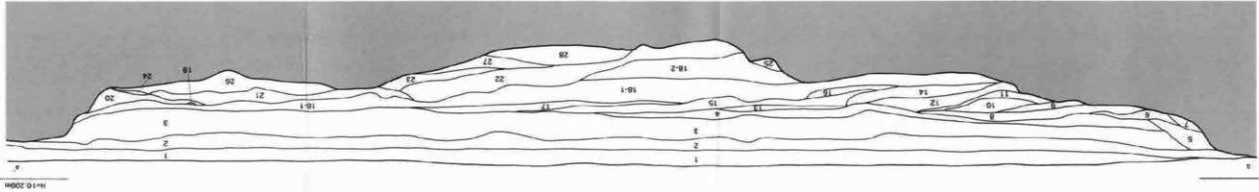
H=10,200m



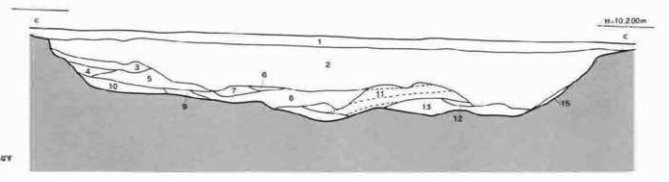
- | | | | | | | |
|------------------------|---------------------|-----------|------------|--------------------------|--------------------------|-------------|
| 1. 花崗岩土(露土) | 19. 礫層状粘土
(砂も入り) | 35. 礫層状砂 | 53. 礫層状砂礫 | 69. 礫層状砂礫
(礫が砂層を少し浸す) | 85. 礫層状砂礫
(礫が砂層を少し浸す) | 103. 礫層状砂礫 |
| 2. 礫層状砂礫土 | 19. 礫層状砂礫土 | 35. 礫層状砂礫 | 54. 礫層状シルト | 70. 礫層状シルト | 86. 礫層状シルト | 104. 礫層状シルト |
| 3. 礫層状砂礫土
(砂層が少し浸す) | 20. 礫層状砂礫土 | 36. 礫層状砂礫 | 55. 礫層状シルト | 71. 礫層状シルト | 87. 礫層状シルト | 105. 礫層状シルト |
| 4. 礫層状砂礫土
(砂層が少し浸す) | 21. 礫層状砂礫土 | 37. 礫層状砂礫 | 56. 礫層状シルト | 72. 礫層状シルト | 88. 礫層状シルト | 106. 礫層状シルト |
| 5. 礫層状砂礫土 | 22. 礫層状砂礫土 | 38. 礫層状砂礫 | 57. 礫層状シルト | 73. 礫層状シルト | 89. 礫層状シルト | 107. 礫層状シルト |
| 6. 礫層状砂礫土 | 23. 礫層状砂礫土 | 39. 礫層状砂礫 | 58. 礫層状シルト | 74. 礫層状シルト | 90. 礫層状シルト | 108. 礫層状シルト |
| 7. 礫層状砂礫土 | 24. 礫層状砂礫土 | 40. 礫層状砂礫 | 59. 礫層状シルト | 75. 礫層状シルト | 91. 礫層状シルト | 109. 礫層状シルト |
| 8. 礫層状砂礫土 | 25. 礫層状砂礫土 | 41. 礫層状砂礫 | 60. 礫層状シルト | 76. 礫層状シルト | 92. 礫層状シルト | 110. 礫層状シルト |
| 9. 礫層状砂礫土 | 26. 礫層状砂礫土 | 42. 礫層状砂礫 | 61. 礫層状シルト | 77. 礫層状シルト | 93. 礫層状シルト | 111. 礫層状シルト |
| 10. 礫層状砂礫土 | 27. 礫層状砂礫土 | 43. 礫層状砂礫 | 62. 礫層状シルト | 78. 礫層状シルト | 94. 礫層状シルト | 112. 礫層状シルト |
| 11. 礫層状砂礫土 | 28. 礫層状砂礫土 | 44. 礫層状砂礫 | 63. 礫層状シルト | 79. 礫層状シルト | 95. 礫層状シルト | 113. 礫層状シルト |
| 12. 礫層状砂礫土 | 29. 礫層状砂礫土 | 45. 礫層状砂礫 | 64. 礫層状シルト | 80. 礫層状シルト | 96. 礫層状シルト | |
| 13. 礫層状砂礫土 | 30. 礫層状砂礫土 | 46. 礫層状砂礫 | 65. 礫層状シルト | 81. 礫層状シルト | 97. 礫層状シルト | |
| 14. 礫層状砂礫土 | 31. 礫層状砂礫土 | 47. 礫層状砂礫 | 66. 礫層状シルト | 82. 礫層状シルト | 98. 礫層状シルト | |
| 15. 礫層状砂礫土 | 32. 礫層状砂礫土 | 48. 礫層状砂礫 | 67. 礫層状シルト | 83. 礫層状シルト | 99. 礫層状シルト | |
| 16. 礫層状砂礫土 | 33. 礫層状砂礫土 | 49. 礫層状砂礫 | 68. 礫層状シルト | 84. 礫層状シルト | 100. 礫層状シルト | |
| 17. 礫層状砂礫土 | 34. 礫層状砂礫土 | 50. 礫層状砂礫 | 69. 礫層状シルト | 85. 礫層状シルト | 101. 礫層状シルト | |
| | 35. 礫層状砂礫土 | 51. 礫層状砂礫 | 70. 礫層状シルト | 86. 礫層状シルト | 102. 礫層状シルト | |
| | 36. 礫層状砂礫土 | 52. 礫層状砂礫 | 71. 礫層状シルト | 87. 礫層状シルト | 103. 礫層状シルト | |

Fig.42 河川跡(1SX1)実測図(1/40)

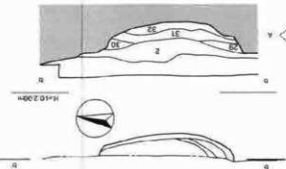
Fig. 43 築路 (1SD2) 築湖圖 (140)



- 1. 築路 (築路)
- 2. 築路 (築路)
- 3. 築路 (築路)
- 4. 築路 (築路)
- 5. 築路 (築路)
- 6. 築路 (築路)
- 7. 築路 (築路)
- 8. 築路 (築路)
- 9. 築路 (築路)
- 10. 築路 (築路)
- 11. 築路 (築路)
- 12. 築路 (築路)
- 13. 築路 (築路)
- 14. 築路 (築路)
- 15. 築路 (築路)
- 16. 築路 (築路)
- 17. 築路 (築路)
- 18. 築路 (築路)
- 19. 築路 (築路)
- 20. 築路 (築路)
- 21. 築路 (築路)
- 22. 築路 (築路)
- 23. 築路 (築路)
- 24. 築路 (築路)
- 25. 築路 (築路)
- 26. 築路 (築路)
- 27. 築路 (築路)
- 28. 築路 (築路)
- 29. 築路 (築路)
- 30. 築路 (築路)
- 31. 築路 (築路)
- 32. 築路 (築路)
- 33. 築路 (築路)
- 34. 築路 (築路)
- 35. 築路 (築路)
- 36. 築路 (築路)
- 37. 築路 (築路)
- 38. 築路 (築路)
- 39. 築路 (築路)
- 40. 築路 (築路)
- 41. 築路 (築路)
- 42. 築路 (築路)
- 43. 築路 (築路)
- 44. 築路 (築路)
- 45. 築路 (築路)
- 46. 築路 (築路)
- 47. 築路 (築路)
- 48. 築路 (築路)
- 49. 築路 (築路)
- 50. 築路 (築路)
- 51. 築路 (築路)
- 52. 築路 (築路)
- 53. 築路 (築路)
- 54. 築路 (築路)
- 55. 築路 (築路)
- 56. 築路 (築路)
- 57. 築路 (築路)
- 58. 築路 (築路)
- 59. 築路 (築路)
- 60. 築路 (築路)
- 61. 築路 (築路)
- 62. 築路 (築路)
- 63. 築路 (築路)
- 64. 築路 (築路)
- 65. 築路 (築路)
- 66. 築路 (築路)
- 67. 築路 (築路)
- 68. 築路 (築路)
- 69. 築路 (築路)
- 70. 築路 (築路)
- 71. 築路 (築路)
- 72. 築路 (築路)
- 73. 築路 (築路)
- 74. 築路 (築路)
- 75. 築路 (築路)
- 76. 築路 (築路)
- 77. 築路 (築路)
- 78. 築路 (築路)
- 79. 築路 (築路)
- 80. 築路 (築路)
- 81. 築路 (築路)
- 82. 築路 (築路)
- 83. 築路 (築路)
- 84. 築路 (築路)
- 85. 築路 (築路)
- 86. 築路 (築路)
- 87. 築路 (築路)
- 88. 築路 (築路)
- 89. 築路 (築路)
- 90. 築路 (築路)
- 91. 築路 (築路)
- 92. 築路 (築路)
- 93. 築路 (築路)
- 94. 築路 (築路)
- 95. 築路 (築路)
- 96. 築路 (築路)
- 97. 築路 (築路)
- 98. 築路 (築路)
- 99. 築路 (築路)
- 100. 築路 (築路)



- 築路面
- 1. 築路土 (築土)
 - 2. 築路土 (築土)
 - 3. 築路土 (築土)
 - 4. 築路土 (築土)
 - 5. 築路土 (築土)
 - 6. 築路土 (築土)
 - 7. 築路土 (築土)
 - 8. 築路土 (築土)
 - 9. 築路土 (築土)
 - 10. 築路土 (築土)
 - 11. 築路土 (築土)
 - 12. 築路土 (築土)
 - 13. 築路土 (築土)
 - 14. 築路土 (築土)
 - 15. 築路土 (築土)



- 1. 築路土 (築土)
- 2. 築路土 (築土)
- 3. 築路土 (築土)
- 4. 築路土 (築土)
- 5. 築路土 (築土)
- 6. 築路土 (築土)
- 7. 築路土 (築土)
- 8. 築路土 (築土)
- 9. 築路土 (築土)
- 10. 築路土 (築土)
- 11. 築路土 (築土)
- 12. 築路土 (築土)
- 13. 築路土 (築土)
- 14. 築路土 (築土)
- 15. 築路土 (築土)

流路

1SD2 (砂利層) (Fig.44・Tab.67・68)

弥生土器

甕 (3~7) 3は「逆L字状」から「く字状」へと移行する過渡的様相を呈した口縁部の形状を示し、

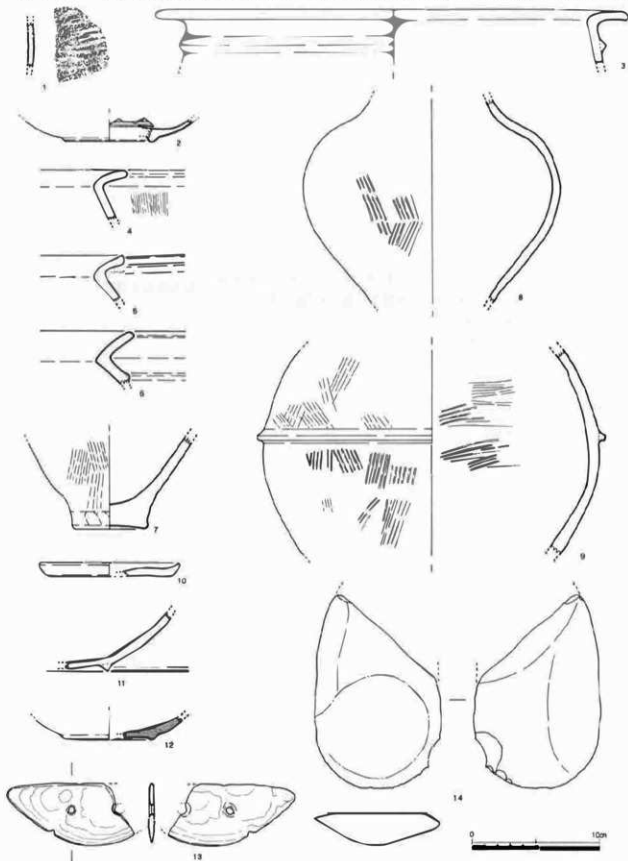


Fig.44 河川跡 (1SX1)・流路 (1SD2) 出土遺物実測図 (1/3)

弥生時代中期末～後期初頭に属するものと思われる。口径37.5cmを復元し、外面に断面三角形状の帯状突起を1条施す。4～6は「く」字状を呈した口縁部細片であり、4から6へしたがって屈曲が強くなる。7は底部破片で底径6.0cmを測る。底面は厚底を呈しながら若干上底気味である。

量 (8・9) 8は胴部破片で胴部は球形ではなく、若干胴部の膨らんだ半球形状を呈する。胴部の最大径は20.4cmを復元する。9は胴部破片で球形を呈する。厚薄にやや不揃い、下垂態膨らみの突起を1条貼付けし、最大径は26.4cmを復元する。

土師器

皿 (10) 口径11.2cm、底径9.4cm、器高1.1cmを復元する。表面は磨耗のため調整不明である。外底は糸切りか？

碗 (11) 表面磨耗のため調整不明である。胎土は微砂粒を含む。

瓦葺

碗 (12) 底部細片で高台径7.0cmを復元する。表面は著しく磨耗しており、調整は不明である。

石器

石包丁 (13) 外湾刃半月形を呈した石包丁であり、石材は片岩質である。刃部は両刃で紐孔は凹形2孔を施す。長さ4.7cm、幅10.0cm、厚さ0.4cmを測る。著しく風化している。

砥石 (14) 石材は砂岩で、表面下半を砥面として使用している。現存の長は15.25cm、幅9.9cm、厚さ2.55cmを測る。

土師器 (Fig. 45・Tab. 68)

土師器

皿 (15) 底部細片で底部外面は糸切りである。胎土は微砂粒及び石英を含む。

瓦葺土器

火鉢 (16) やや肥厚した口縁部を呈する。胴部はヨコナデ、外面は指押さえ、内面は横方向の刷毛目を施す。

龍泉窯系青磁

碗 (17) 口縁部細片で外面に蓮弁を施す。

白磁

碗 (18) 底部細片で高台径5.4cmを測る。淡茶灰色の素地に淡灰白色釉を内外面に施すが、高台内は露胎である。大宰府編年IV類。

(4) 小塚

当地は八手状に広がる八女丘陵に挟まれ、谷部あたり、調査区で検出された河川跡 (2SX1) は、地形的制約を受けて生じた自然河川と思われる。土層観察では多くの砂や砂利を含む砂層と粘土層が重複しあつた状態を呈していたことからかなりの流量を伴っていたと考えられ、当地区は度重なる河川の氾濫に遭遇していたことが想定される。埴中からは古代の遺物を備かに認めただけで埋没時期について言及することはできない。なお、調査区の北隣にあたる藤原三郎丸遺跡調査区南隣部では河川の北岸を確認し、更に当遺跡に隣接するA区では同一と思われる1SX1が検出されている。

一方、調査区南部、丘陵北端部の麓に3号貯蔵の流跡 (1SD2) は、丘陵縁辺部に沿うように検出された。当遺は、A区で検出された1SD2の延長と思われる、河川跡 (2SX1) から派生した自然流跡と推測される。出土遺物から中世の所産であることがわかり、埋没時期は概ね13世紀代と考えられる。

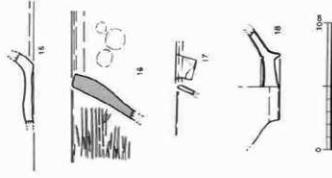


Fig. 45

包含層出土遺物実測図 (1/3)

Ⅳ. 考察

・各遺跡の概要

今回は8ヶ所での調査を行い、各遺跡の成果について簡略をよめ今後の課題について考察する。

集落跡前遺跡は今回の調査の中で唯一、集落跡地区での調査である。地理的には南北の丘陵部に挟まれた低地での調査であり、溝、溜まり状遺構など流水により形成された遺構が検出され、遺物も弥生時代から中世までと幅広い。集落跡山前遺跡などと同様に、層に計々築かれた低地(各地形)部の遺構の存在や道・溝・布など、周知の文化財包蔵地帯である調査地の近隣に新しい文化財包蔵地帯が存在する事を示唆する貴重な資料となった。

遺教保古手遺跡はSD01(自然流跡)が丘陵の展開する形状と隣に丘陵間に検出され、東から西へ若しくは大きく南北に走行しながら走っている様子を確認された。遺物は古墳時代のミニチュア土器が出土しており、これも流跡内でのローリングに依り消耗が激しく周辺に集落が形成されていたことを示唆する資料である。

遺教保古手遺跡第2次調査ではA区で走行する人跡を南北に検出している。時間については古墳時代から中世まで幅広く、犯置所であったと想定される。また、波板状の流跡土層や不定形小ピット群なども検出され遺構の性格が「牛馬歩行痕」であることを見逃させる遺構を検出してしている。B区では流跡の他に溝を検出している。溝と挟まれた空間に関して道路状遺構の可能性を示唆しており、低地における道路施工についての資料として、今後は調査で認識された諸問題を検証して「道路」遺構を考えなければならぬ。また、出土遺物に関しては5世紀後半を中心とする遺物が現られ、調査地東西は異なる風教養ノ木流跡との関連も考えられる。C区では遺教保古手遺跡第1次調査地とJR在米集落を挟んで対する調査範囲をとり、遺跡は流跡を中心に構成され弥生時代を中心とした遺物が出土している。

遺教三郎丸遺跡は中世に比定される溝を検出している。また、遺教保古手第2次調査A区と同様と約10cm〜50cm幅の小ピットが密集する牛馬による歩行痕と看取できるような遺構を検出している。低地において水田耕作の様子を示唆する資料である。

遺教長坂町遺跡A区では流跡跡などが検出されている。各遺跡で流跡跡が多く検出されており、当遺跡でも顕著である。中世を中心として遺構が埋没するが、その生活痕跡である遺構の検出にはならず、南側丘陵上に存在することを窺わせる資料である。B区では埋没期を13世紀に求める河川跡が検出され、A区同様中世の資料を確認している。

・遺教地区の低地での遺跡の展開と文化財包蔵地

先述したように、各遺跡からは「溝」「流跡跡」「河川跡」「溜まり状遺構」などの「水」に関する遺構検出が大半を占めている。これは今回調査区が設定された範囲が南北の正交に挟まれた各地形であることが大きな要因の一つである。各地形の遺教保部でこれらの遺構が埋没する時間については、出土遺物の数も広く横断的に年代を示す遺物が非常に少ないことから判断が困難であり、周辺遺跡の状況を加味して、面的に遺跡の性格や時期認定を行わなければならない。

今回調査が行われた範囲の南側(集落跡前遺跡は北側)は全て低位丘陵部(標高約15m前後)であり、過去の調査で弥生時代から古墳時代の大集落や集落群が形成されていたことが解っていた。これらの集落跡等の北側に位置する今回の各調査地点は標高約9m以下の低地であり、検出された溝等は「水」の利用、または生産(水田など)に関する遺構として捉えることができる。その中で牛馬痕跡による痕跡の可能性を示唆する遺構の検出は肥渾化し臭い低地における良好な資料として、今後羽入塚地区や棚田地区などの低位丘陵地や台地上に展開する同様の遺構と比較検討しなければならない。また、各地形丘陵部において文化財包蔵地の設定を再考する機会に恵まれたことは、今後の文化財包蔵地のあり方を考える上で貴重な資料となった。

写真図版



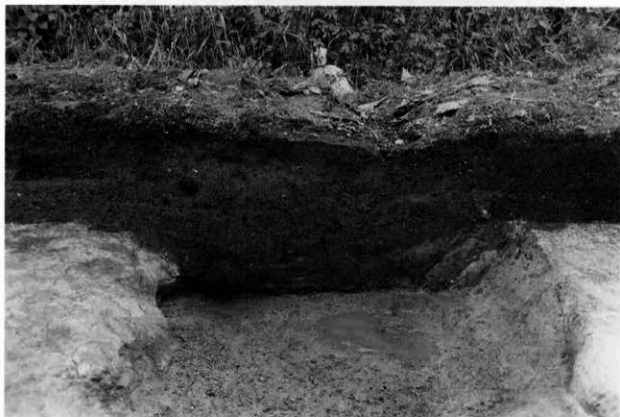
熊野伊弉道跡
全景
(空中写真：真上から)



熊野伊弉道跡
A区全景
(空中写真：真上から)



熊野町遺跡A区1SX2土層観察状況 (西から)



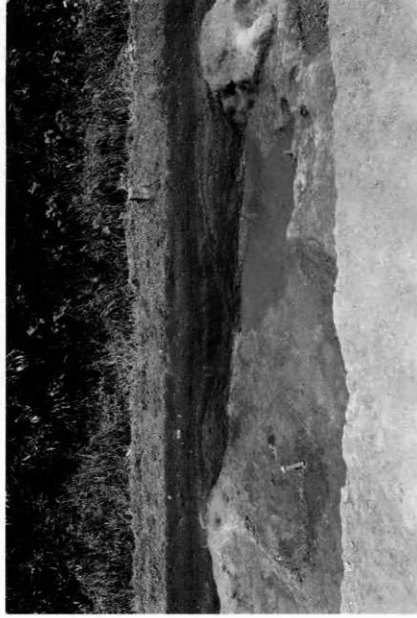
熊野町遺跡B区1SD7土層観察状況 (西から)

熊野町遺跡B区1SD10土層観察状況 (西カ5)



熊野町遺跡B区1SD9土層観察状況 (東カ5)





熊野伊弉連跡B区ISD11中央部土層観察状況 (西から)



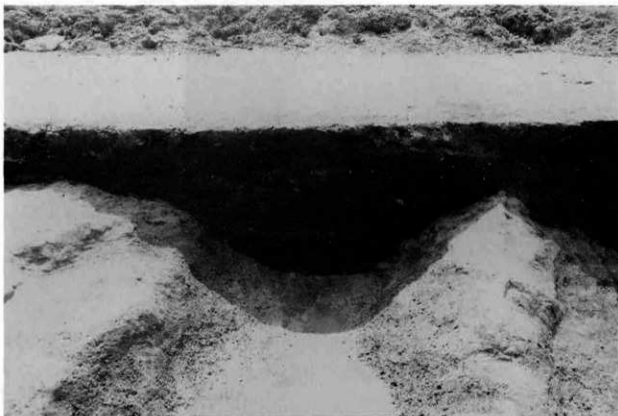
熊野伊弉連跡B区ISD11東部土層観察状況 (西から)



熊野杵町遺跡B区
ISD12・13
(空中写真：真上から)



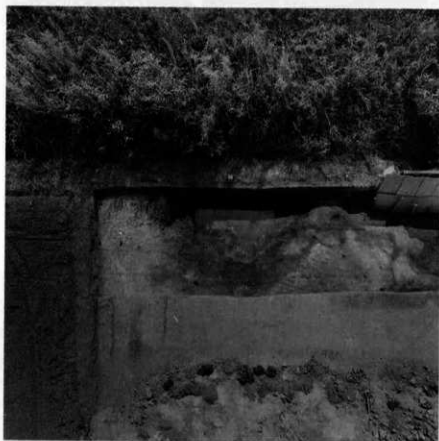
熊野杵町遺跡B区ISD12土層観察状況 (東から)



熊野町遺跡B区1SD13土層観察状況 (東から)



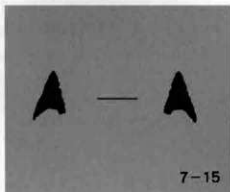
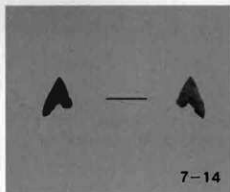
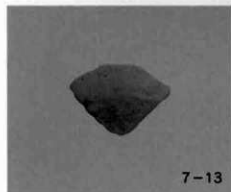
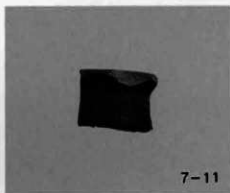
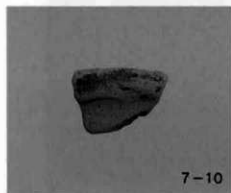
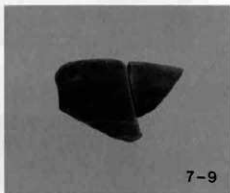
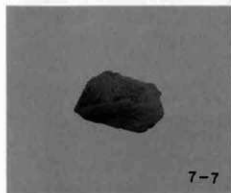
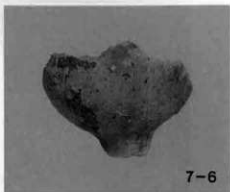
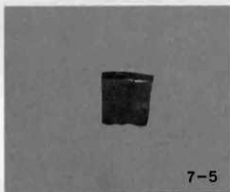
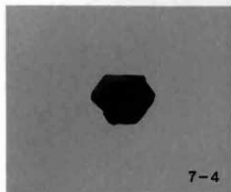
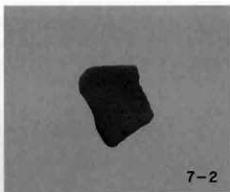
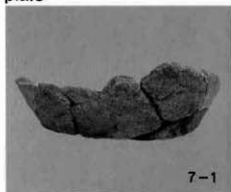
熊野町遺跡B区1SX14土層観察状況 (東から)



熊野伊町遺跡B区
1SD15
(空中写真：真上から)



熊野伊町遺跡B区1SD15土層観察状況（東から）





藏敷島ノ本SD01・SD02調査区北側土層



藏敷島ノ本SD01・SD02調査区南側土層



蔵敷島ノ本SD01 (西から)



蔵敷島ノ本SD02 (北から)



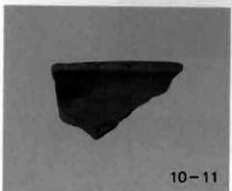
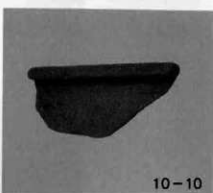
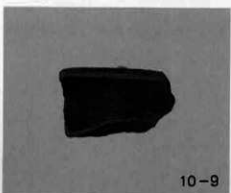
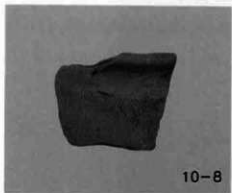
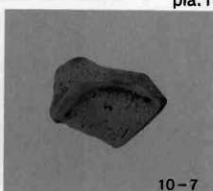
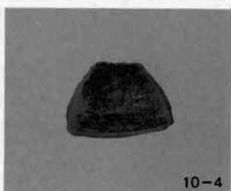
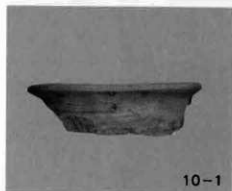
蔵数島ノ本調査区全景（東から）



蔵数島ノ本調査区全景（真上）



歳数局ノ本SD01・SD02 (真上)





蔵数保古手第2次調査A区
調査区全景 (東から)



蔵数保古手第2次調査A区
2SX13土層観察 (東から)



蔵数保古手第2次調査A区
2SX13完掘状況(東から)



蔵数保古手第2次調査A区
2SD09土層・完掘状況(北東から)



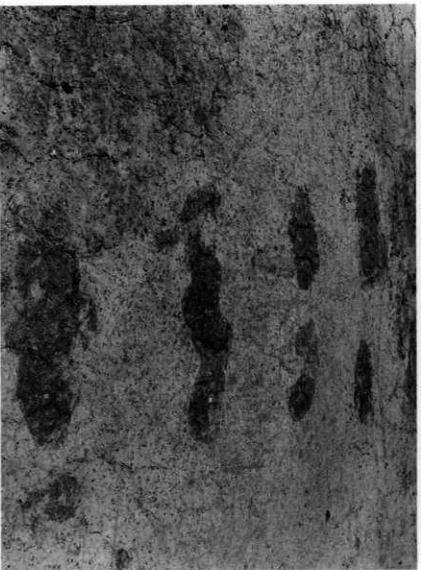
蔵数保古手第2次調査A区
2SD09土層・完掘状況（北西から）



蔵数保古手第2次調査A区
2SD09土層・完掘状況（北東から）



禮教保古手第2次調査A区
2SD10土層観察 (東7.5)



禮教保古手第2次調査A区
2SX18様出土状況 (北7.5)



蔵敷保古手第2次調査A区
2SX18検出状況 (南から)



蔵敷保古手第2次調査A区
2SX18完掘状況 (北から)



藏数保古手第2次調査A区
2SX18土層観察 (南東から)



2SX18-a土層観察 (北から)



2SX18-b土層観察 (北から)



2SX18-c土層観察 (北から)



2SX18-d土層観察 (西から)



2SX18-e土層観察 (南から)



2SX18-f土層観察 (南から)



藏敷保古手第2次調査A区
2SX22完掘状況 (北から)



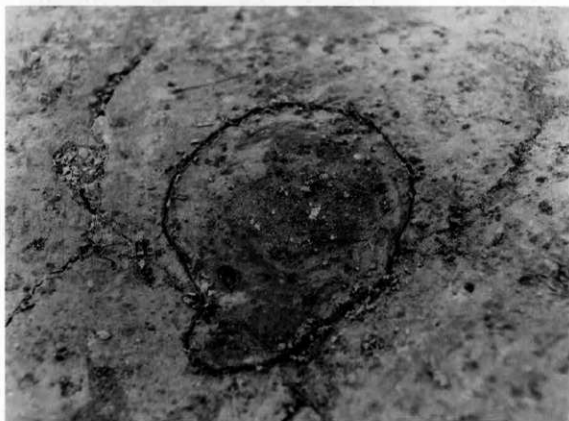
蔵敷保古手第2次調査A区
2SX22完掘状況（北から）



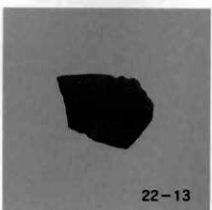
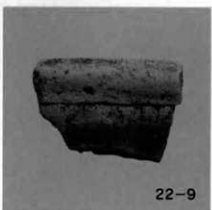
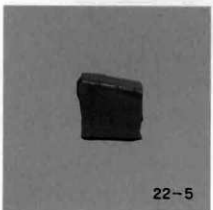
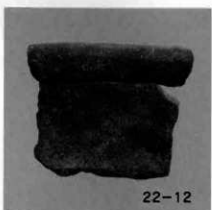
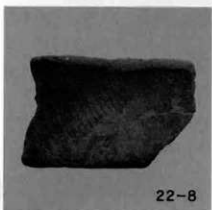
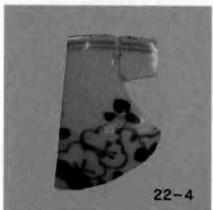
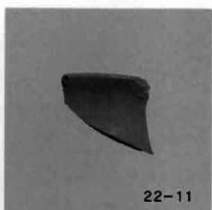
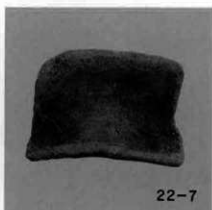
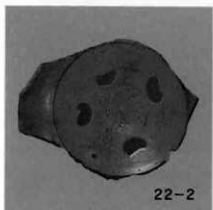
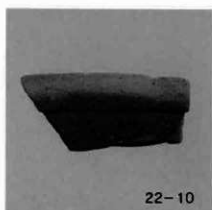
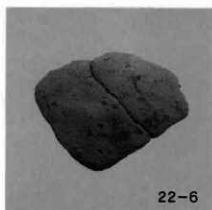
蔵敷保古手第2次調査A区
2SX27検出状況（東から）

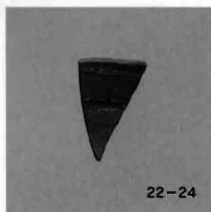
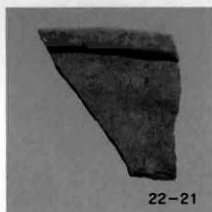
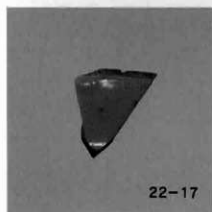
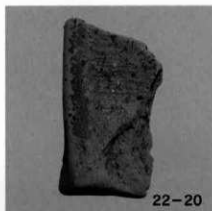
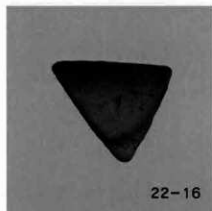
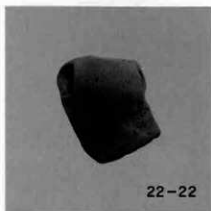
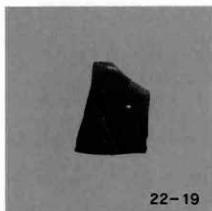
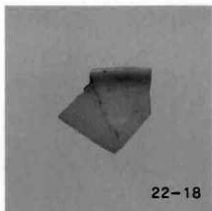
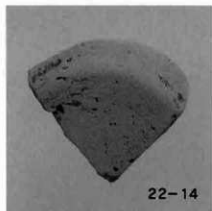


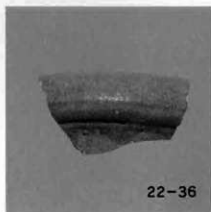
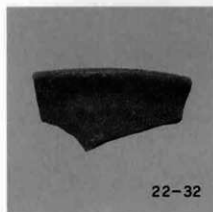
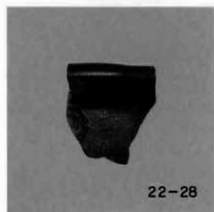
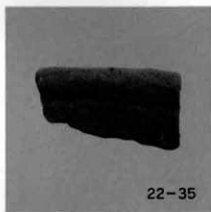
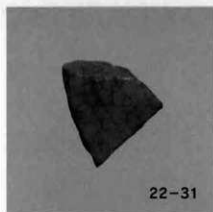
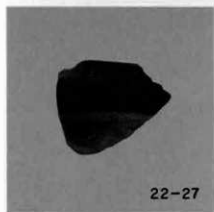
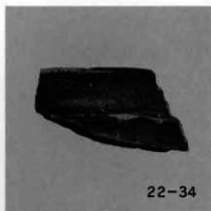
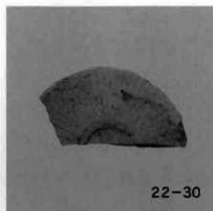
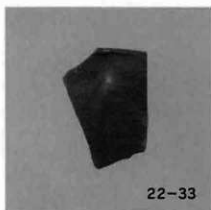
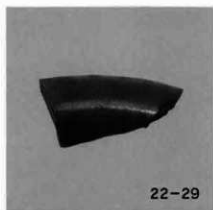
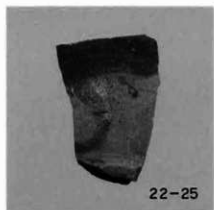
蔵敷保古手第2次調査A区
2SX27完掘状況 (北から)

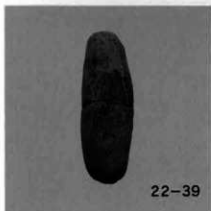
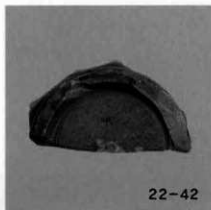
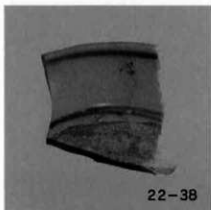
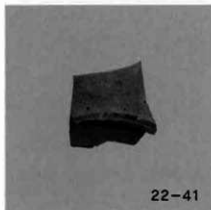
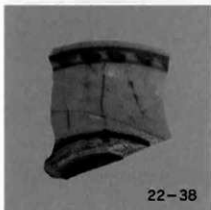
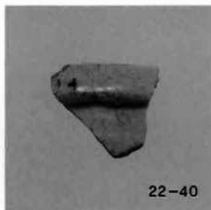
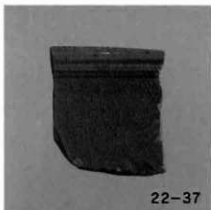


蔵敷保古手第2次調査A区
2SX27検出状況 (南から)



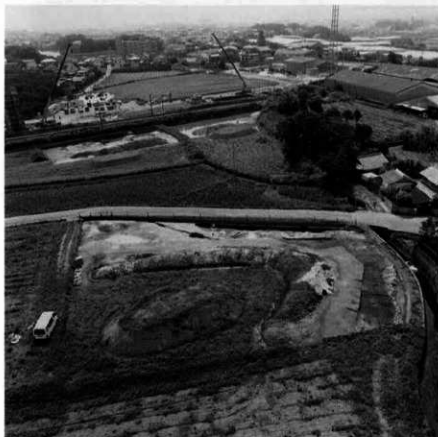








磯数保古手遺跡
2次B区全景
(空中写真：北から)



磯数保古手遺跡
2次B区全景
(空中写真：西から)



藏数保古手遺跡2次B区
2SD1完掘状況（北から）



藏数保古手遺跡2次B区
2SD1完掘状況（南から）



蔵敷保古手遺跡2次B区
2SD1北ベルト土層観察状況（北から）



蔵敷保古手遺跡2次B区
2SD1南ベルト土層観察状況（南から）



藏数保古手遺跡2次B区
2SX2・3完掘状況（北から）



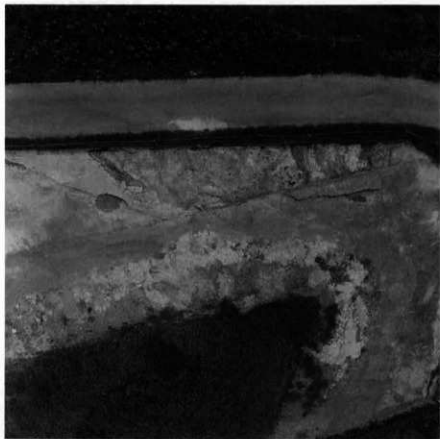
藏数保古手遺跡2次B区
2SX2・3完掘状況（南から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX2完掘状況（西から）



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX2土層観察状況（北から）



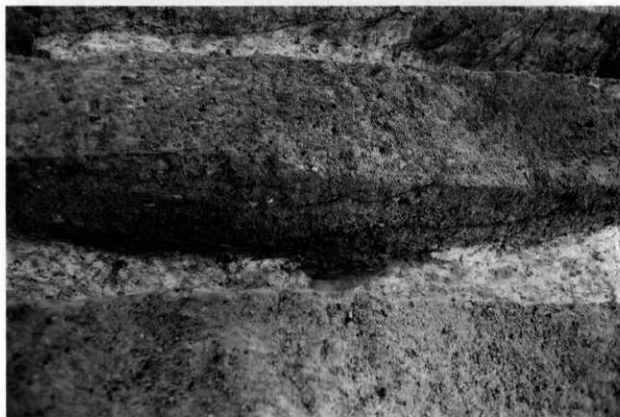
蔵数保古手遺跡
2次B区
2SX5完掘
(空中写真：真上から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S8)土層観察状況 (西から)



蔵敷保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



蔵敷保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



藏数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



藏数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



藏敷保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



藏敷保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (北から)



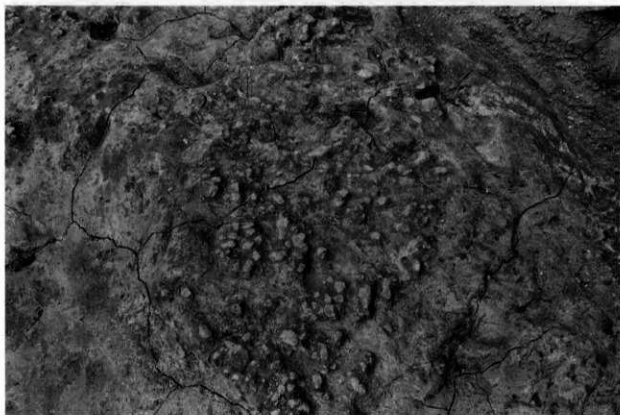
歳数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (西から)



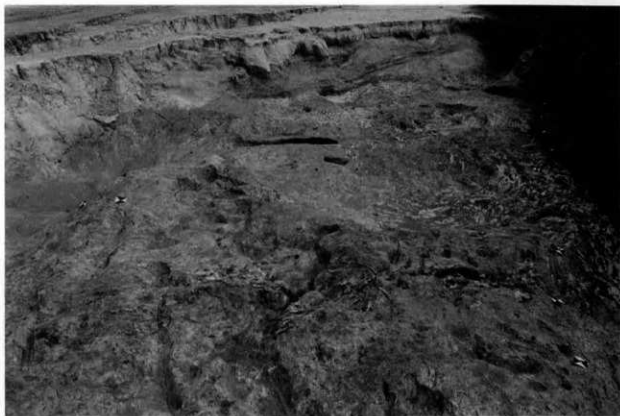
歳数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 堆積状況 (東から)



蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 小石検出状況 (北から)



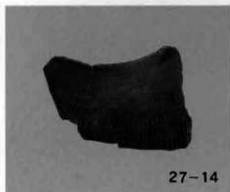
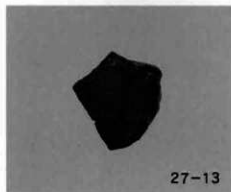
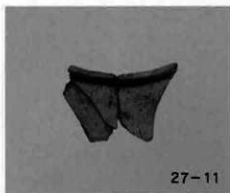
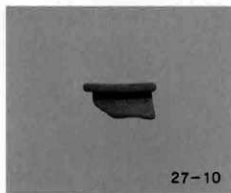
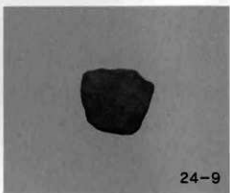
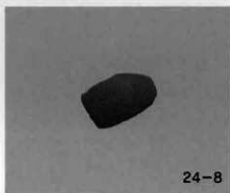
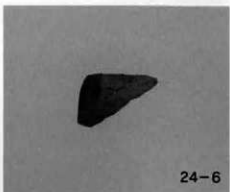
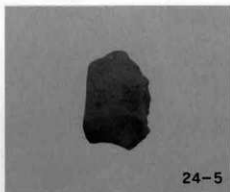
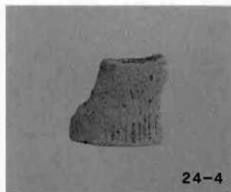
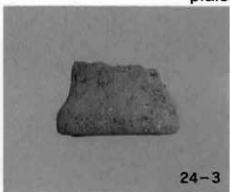
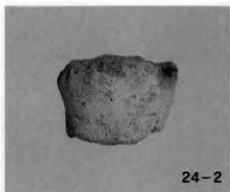
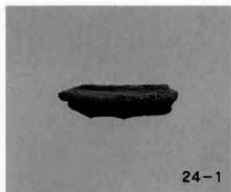
蔵数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 小石検出状況 (南から)

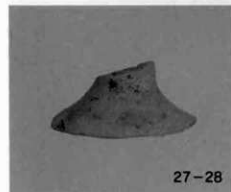
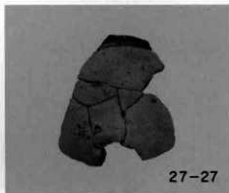
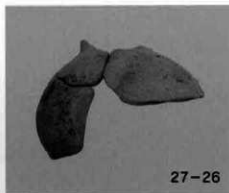
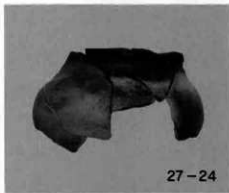
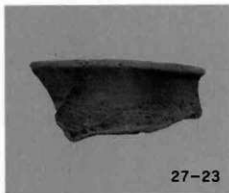
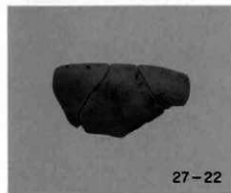
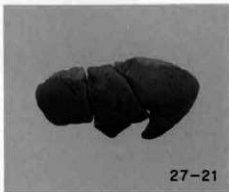
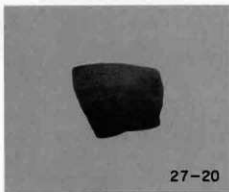
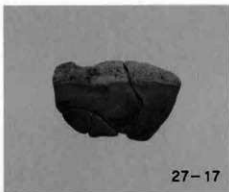


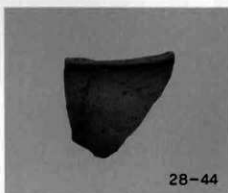
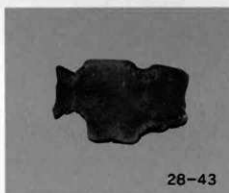
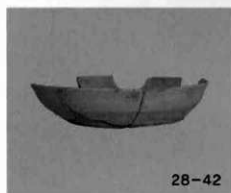
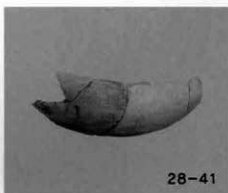
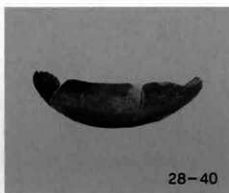
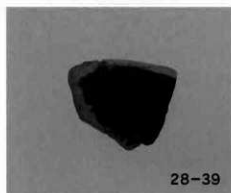
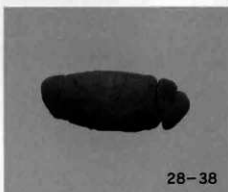
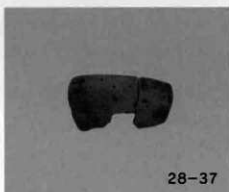
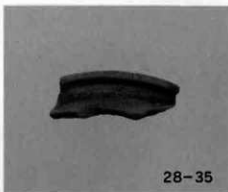
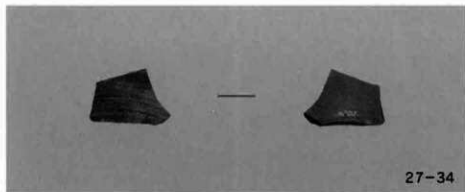
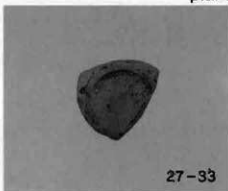
藏数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 完掘状況 (東から)

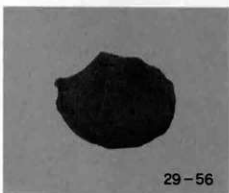
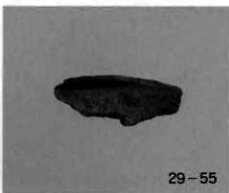
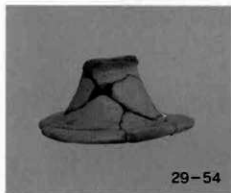
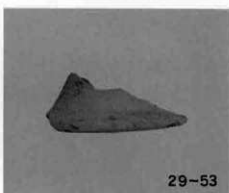
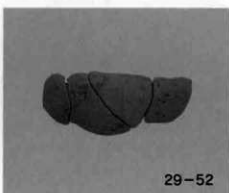
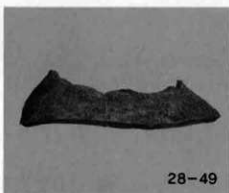
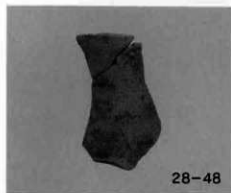
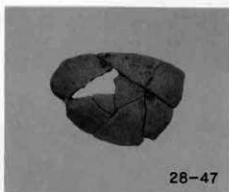
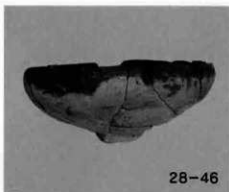
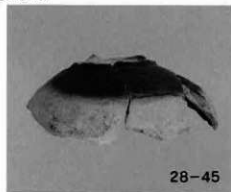


藏数保古手遺跡2次B区
2SX5 (S9) 完掘状況 (東から)











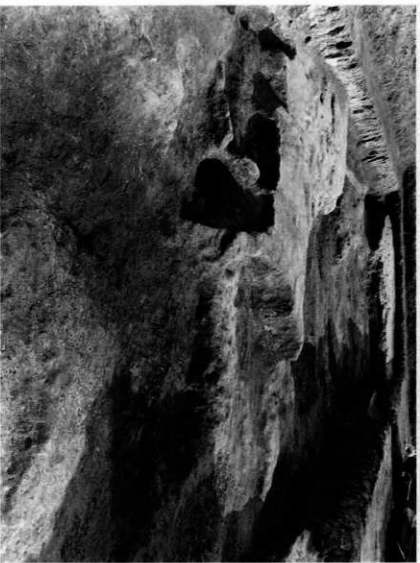
藏数保古手道跡2次C区
2SD01 (東から)



藏数保古手道跡2次C区
2SK03調査区東壁土層



羅敏區古手遺跡2次C区
2SK04土層 (四か5)



羅敏區古手遺跡2次C区
2SD05・2SD06 (北か5)



藏数保古手遺跡2次C区
2SD05・2SD06 (南から)



藏数保古手遺跡2次C区
2SD05・2SD06調査区西壁土層



藏数保古手遺跡2次C区
2SK07・2SD08 (西から)



藏数保古手遺跡2次C区
2SD08調査区東壁土層



藏敷保古手遺跡2次C区
2SD08ベルト南開土層



藏敷保古手遺跡2次C区
2SP11 (東から)



藏敷保古手遺跡2次C区
北側調査区(真上)



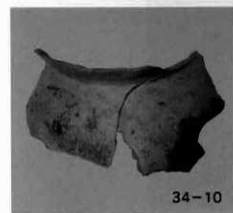
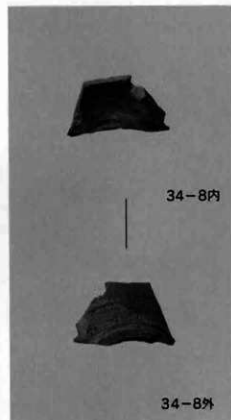
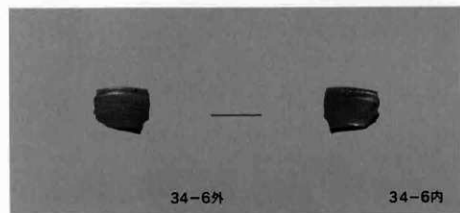
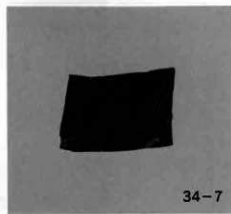
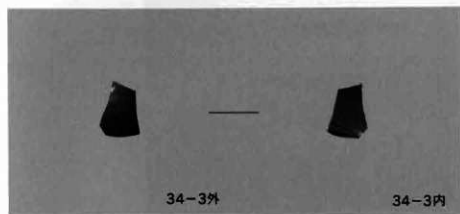
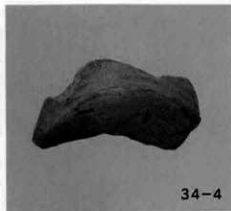
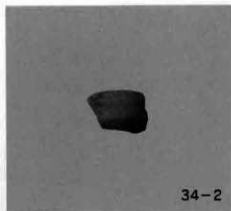
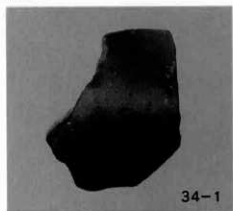
藏敷保古手遺跡2次C区
南側調査区(真上)



蔵数保古手道跡2次C区
調査区全景（西から）



蔵数保古手道跡2次C区
調査区全景（東側を望む）





34-9内



34-9外



34-16内



34-16外



34-17上



34-17下



34-15



35-18



藏敷三郎丸遺跡
全景
(空中写真：南から)



藏敷三郎丸遺跡
全景
(空中写真：真上から)



藏数三郎丸遺跡
ISD1土層観察状況（西から）



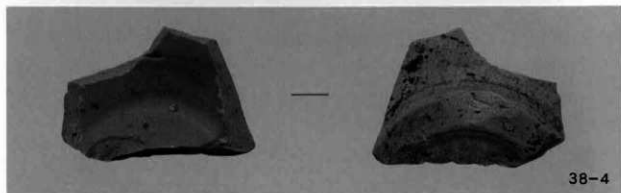
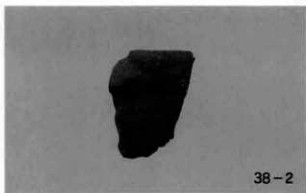
藏数三郎丸遺跡
ISD2土層観察状況（東から）



藏数三郎丸遺跡
1SD3土層観察状況 (南から)



藏数三郎丸遺跡
不明遺構
(空中写真：真上から)





長谷町/AIX
ISX01a (東カ-5)



長谷町/AIX
ISX01a - 北洞窟区西壁土層



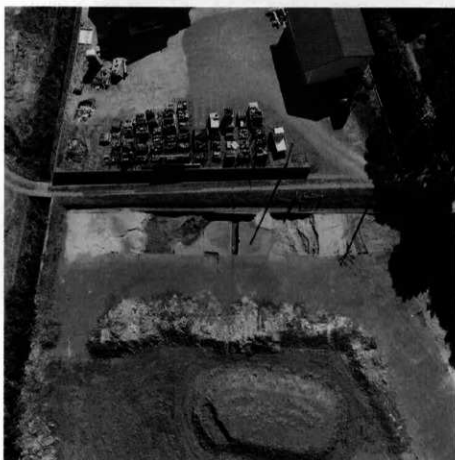
長畝町A区
1SD02 竹製暗渠検出
(東から)



長畝町A区
1SD02 竹製暗渠
(東から)



長畝町A区
ISD02調査区西壁土層



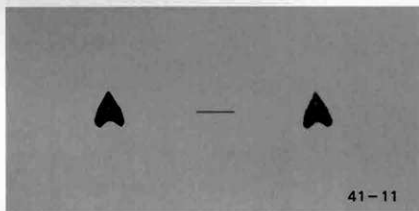
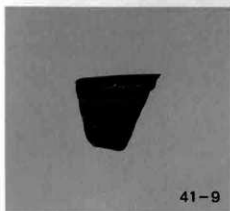
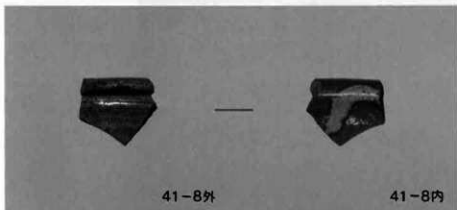
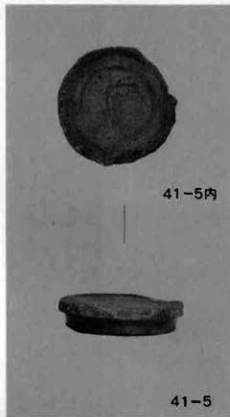
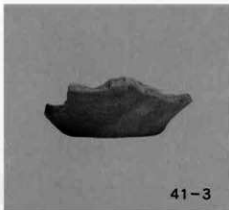
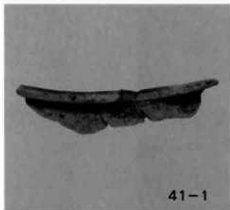
長畝町A区
東側調査区全景（真上）

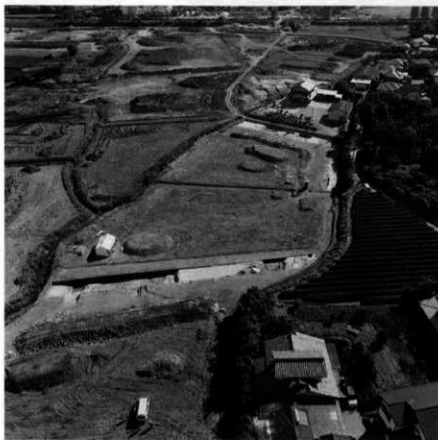


長歌町A区
南側調査区(真上)



長歌町A区
調査区全貌(西北・5)





藏敷長飲町遺跡
全景
(空中写真：西から)



藏敷長飲町遺跡
B区全景
(空中写真：南から)



蔵敷長畝町遺跡
B区全景
(空中写真：真上から)



蔵敷長畝町遺跡B区
ISX1完掘状況(北から)



蔵敷長畝町遺跡B区
ISX1東壁北側土層観察状況（西から）



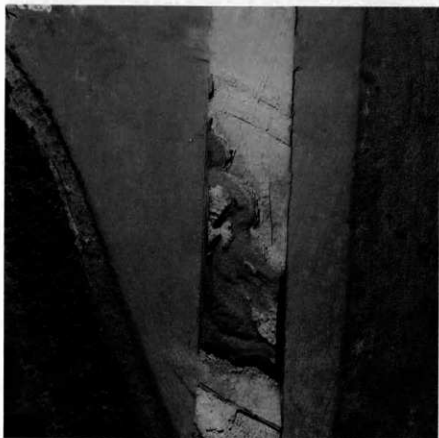
蔵敷長畝町遺跡B区
ISX1東壁北側中央土層観察状況（西から）



葦数長欽町遺跡B区
1SX1東壁南側中央土層観察状況（西から）



葦数長欽町遺跡B区
1SX1東壁南側土層観察状況（西から）



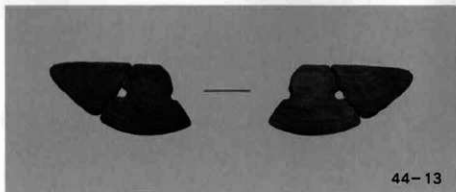
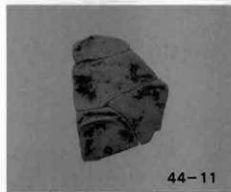
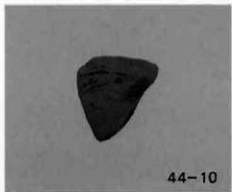
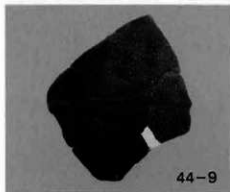
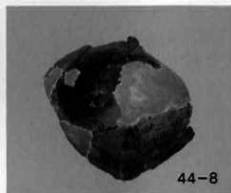
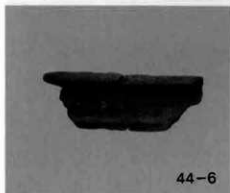
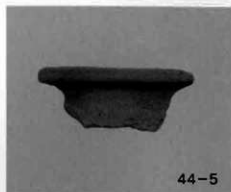
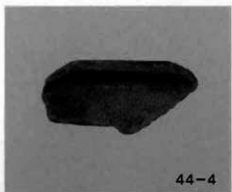
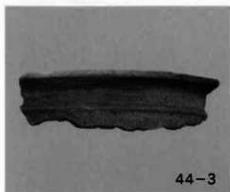
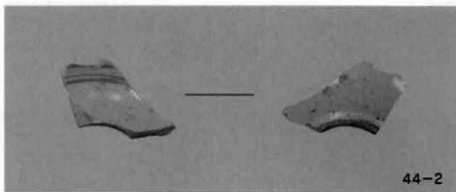
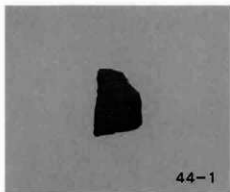
蔵敷長畝町遺跡B区
2SD2完掘状況
(空中写真：真上から)

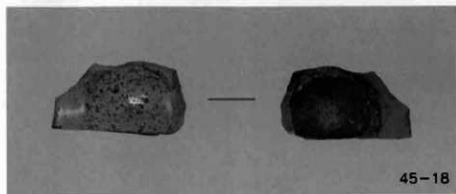
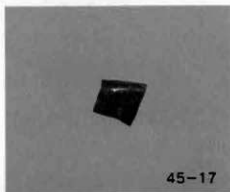
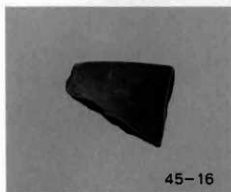
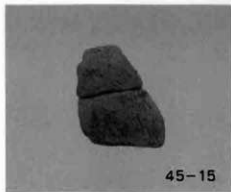
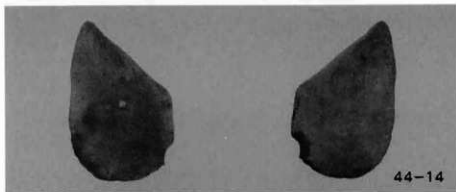


蔵敷長畝町遺跡B区
2SD2完掘状況 (東から)



歳数長畝町遺跡B区
2SD2東壁土層観察状況（西から）





筑後市文化財調査報告書 第70集

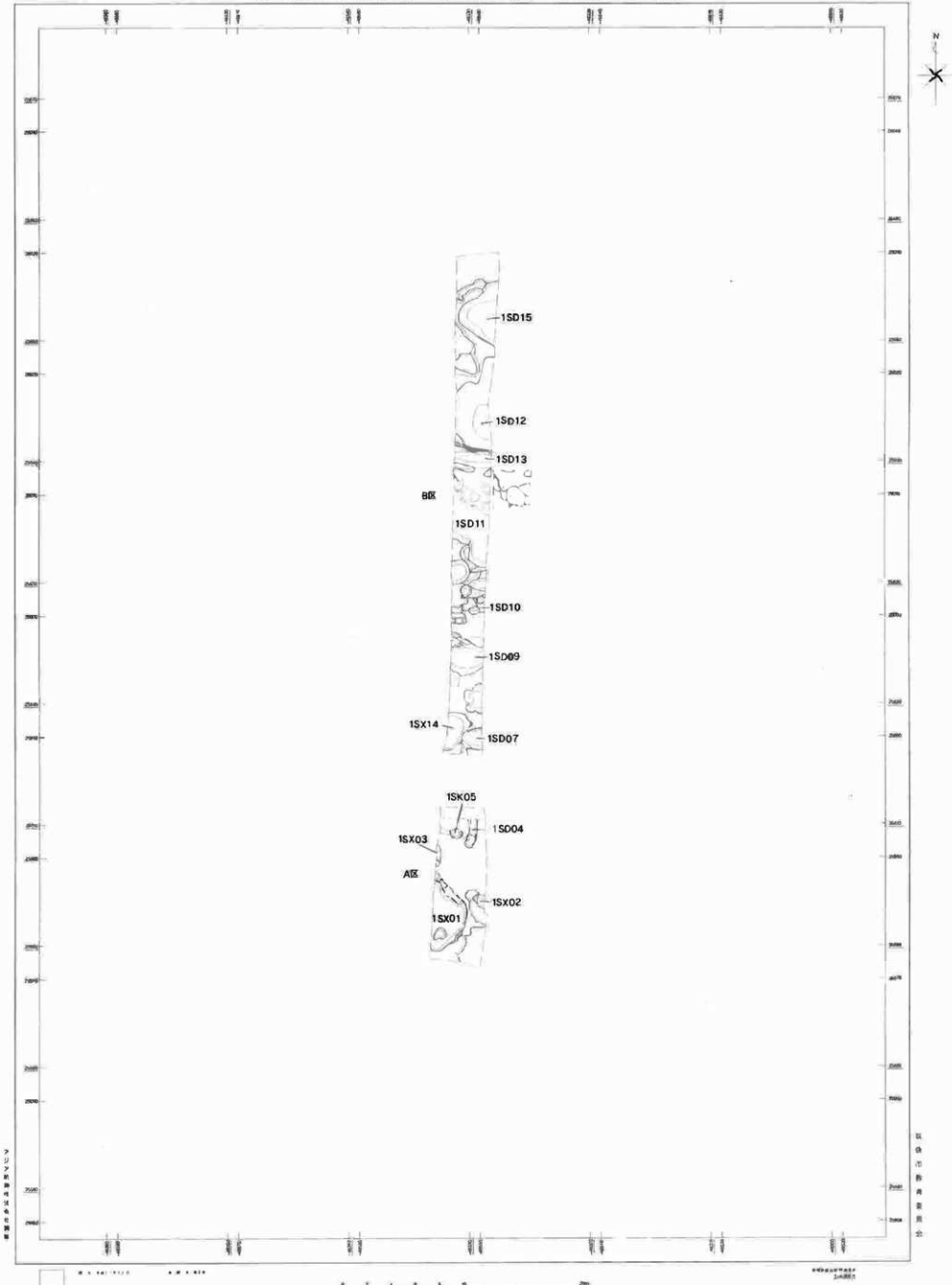
筑後北部地区遺跡群II

平成18年3月20日

発行 筑後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898
TEL 0942-53-4111

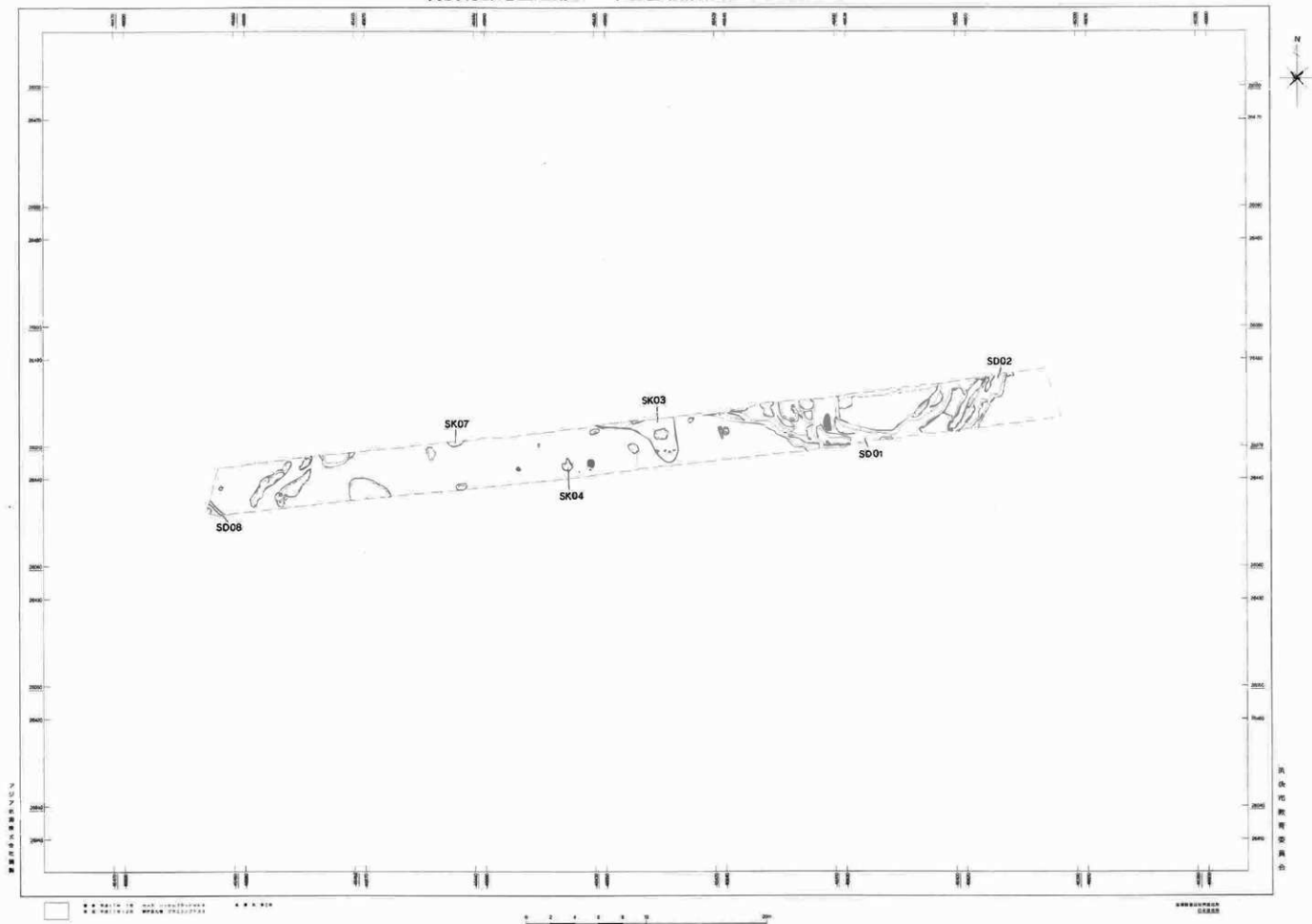
印刷 鶴岡ヶ所印刷
福岡県朝倉市馬田336

筑後北部地区遺跡群 平面図(熊野杵町遺跡) (1/300)



筑後北部地区遺跡群
熊野杵町遺跡
平面図

筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数島ノ本遺跡調査) (1/300)



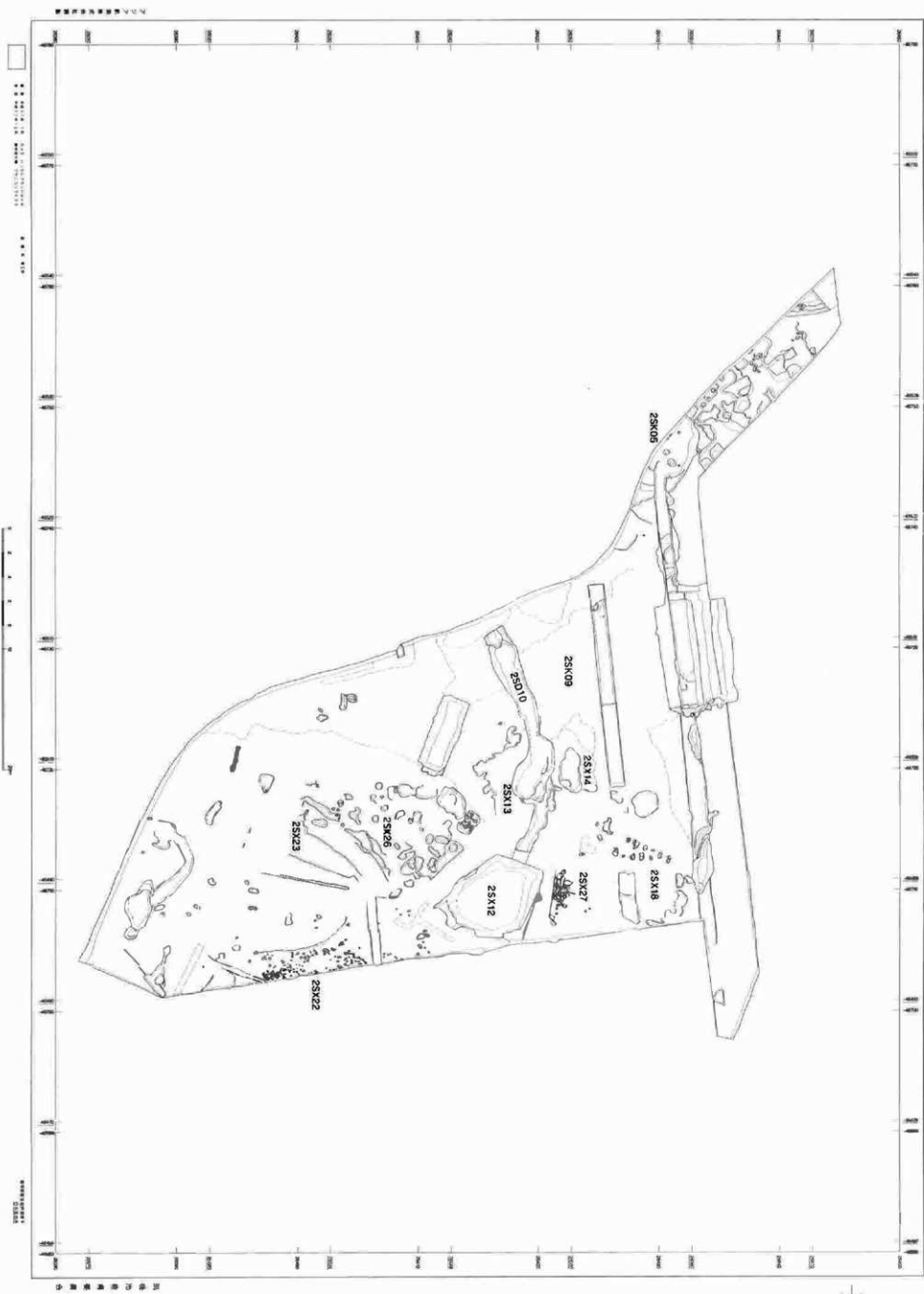
□ 遺構の位置
● 調査範囲

0 2 4 6 8 10 20

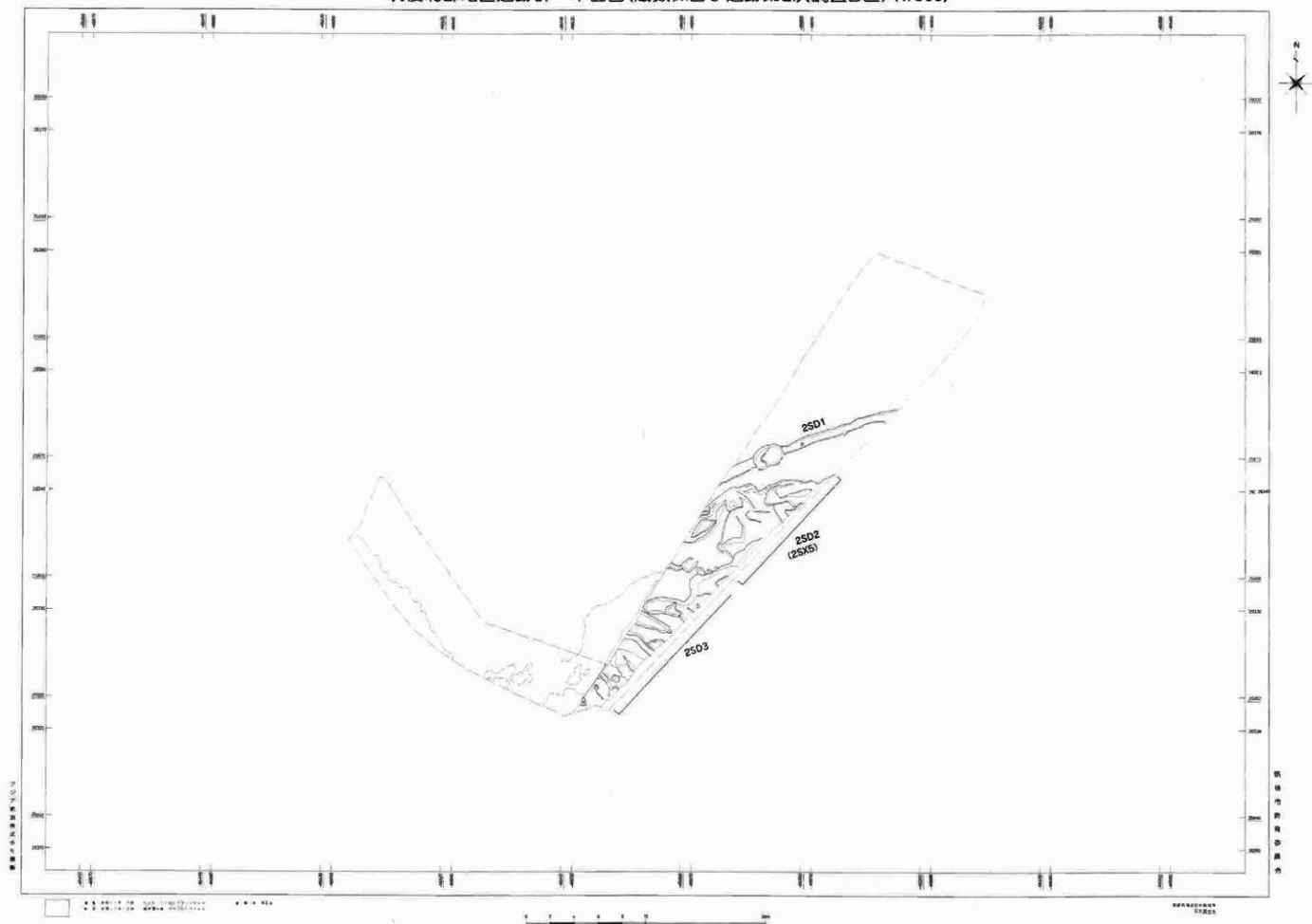
筑後北部地区遺跡群
蔵数島ノ本遺跡調査

筑後北部地区遺跡群
蔵数島ノ本遺跡調査

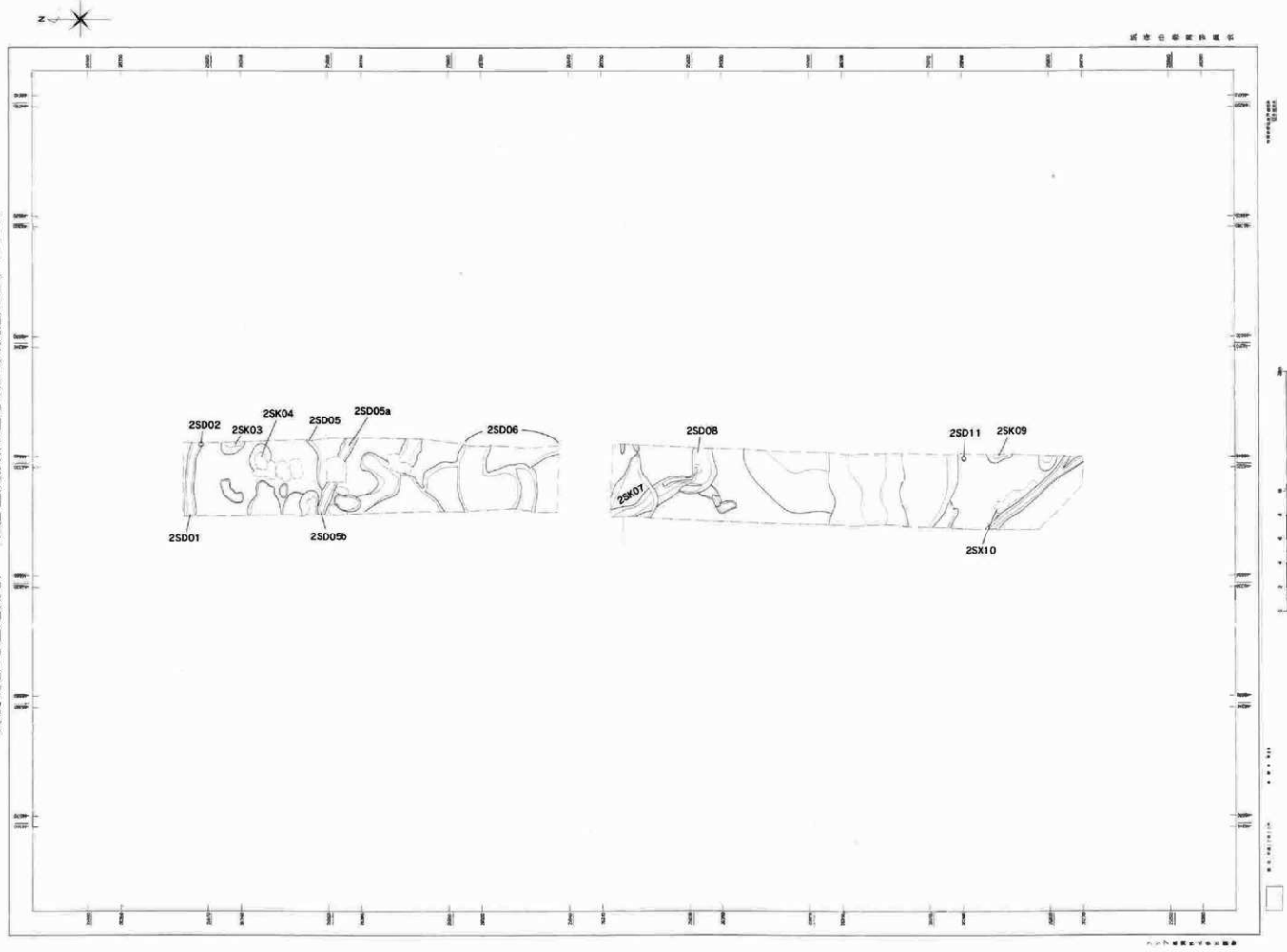
筑後北部地区遺跡群 平面図(竊数保古手第2次調査A区)(1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数保古手遺跡第2次調査B区) (1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(敷数保古手第2次調査C区)(1/300)



10m

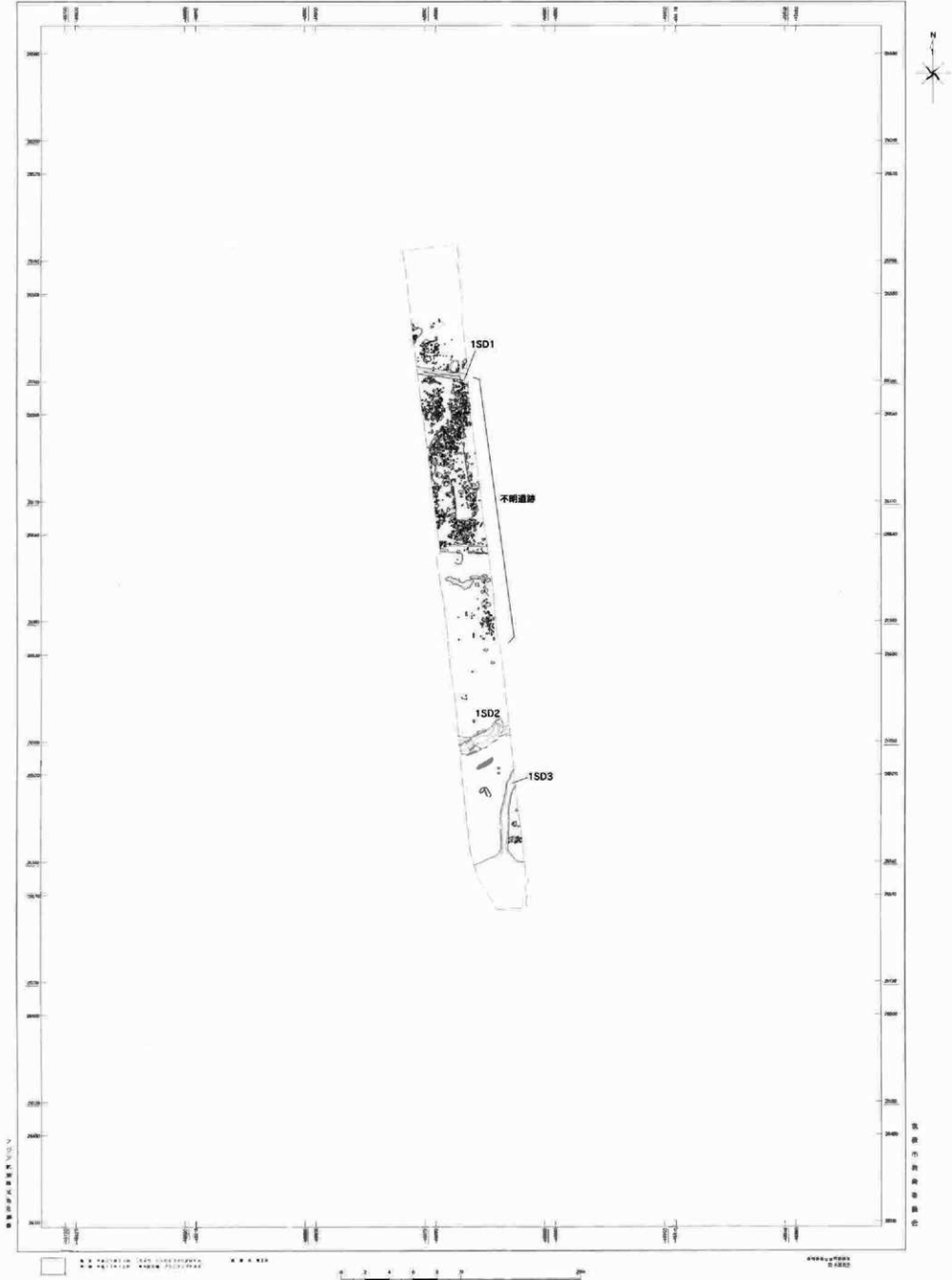
10m

10m

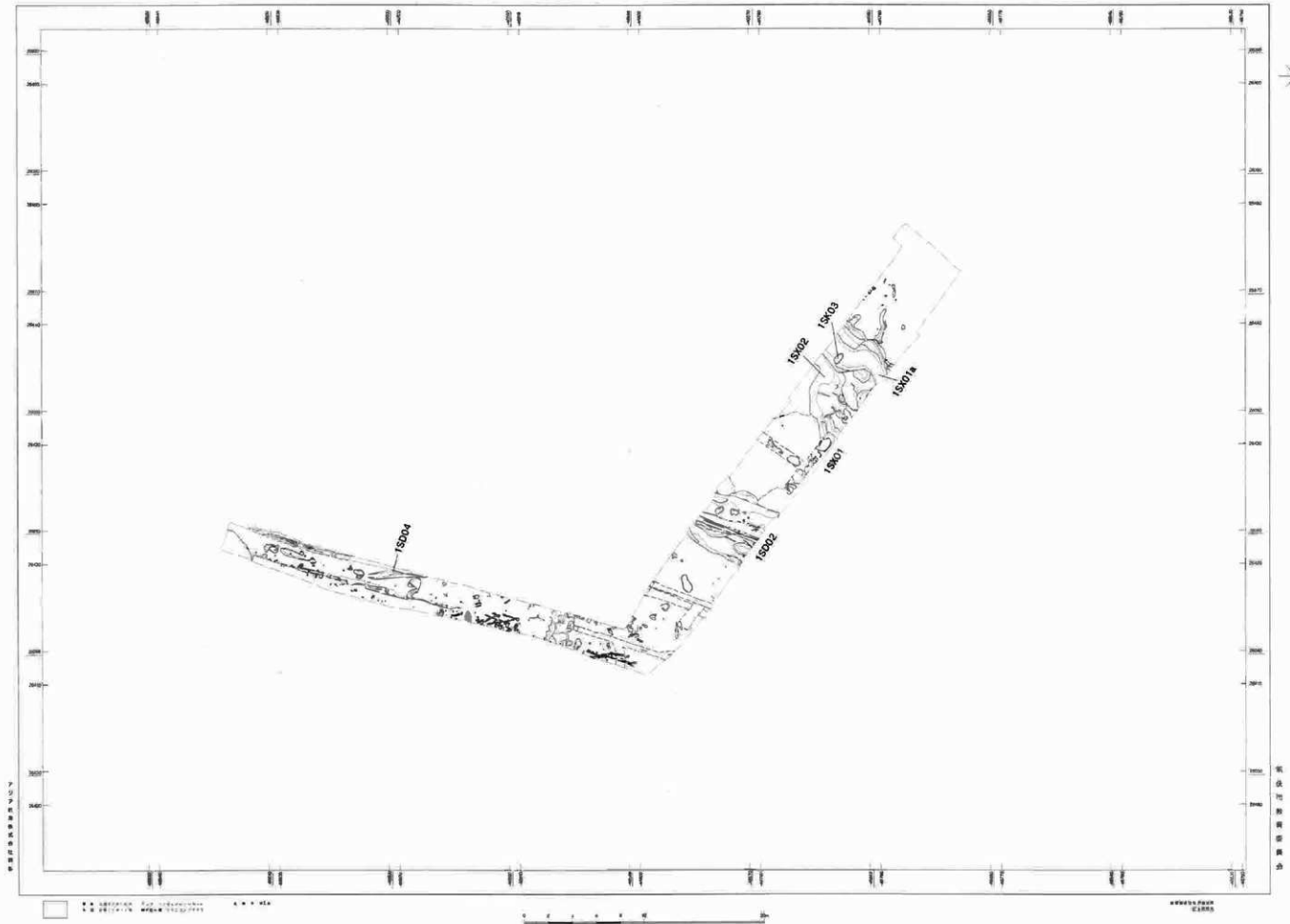
10m

10m

筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数三郎遺跡) (1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数長畝町遺跡調査A区)(1/300)



筑後北部地区遺跡群 平面図(蔵数長畝町遺跡B区) (1/300)

